

したか」と語る。王様も感じて早速母子を引取り、この賢い子供を後取りにした。

——鹿兒島縣大島郡喜界島——

岩手縣

紫波郡昔話 一七五

”

同書 四

「黄金の生る吹花」

福島縣

磐城昔話集 七九

「あくびをした奥方の話」

新潟縣

佐渡の昔話 一九五

”

佐渡島昔話集 一二二

”

佐渡昔話集 二二七

”

昔研 二ノ二七五

「金のなる木」

うとう舟で流れて来た貴女の話。

廣島縣

藝備「昔話の研究」 七七

長崎縣

土ノ香 一六ノ五

同縣

壹岐島昔話集 三

”

第一昔話號 八三

「ウツロ舟の女」

熊本縣

郷土研究 五ノ一七七

「黄金の瓜」

鹿兒島縣

喜界島昔話集 七九

〔例出〕

島 二ノ四二八・四六八

”

島 一ノ三ノ三〇

おきえらぶ昔話 一七六

「黄金花咲く珠」

沖永良部島

（旅傳 一〇ノ六ノ一一）

「島の獸示録」の中にあり。

傳説として残つてゐるもの。

日輪の下し子

鹿兒島縣

喜界島昔話集 二四

島 二ノ四八七

「金の茄子」系話。太陽の下し子が名乗つて出て、天の命令でオソウシ（占者）の始めとなり、母はユタ（巫女）の始めになった。

魂たまの家に傳はる傳説か。

話 千 兩

昔或男が女房と母とを國に残して他國で稼いで金を貯めて、何年ぶりに故郷へ還らうとする時に、何かよい話を國への土産に

しようと思つて寺の住持に頼むと、三つの話を教へてくれた。一

つは「人は寄つても身は寄るな」もう一つは「大木より小木」第

三には短氣は損氣といふので、始め二つの話のお蔭で生埋めや落

雷の難を逃れて無事歸宅する。家に入らうとすると障子に映つた

影が女房と圓い頭をした坊さんで、仲睦まじさうに話をしてゐ

る。カツとして鎌に手をかけたが、「短氣は損氣」を思ひ出して

鎌を投出し家へ入つてみると坊さんと思つたのは我が母で、のぼ

せるので髪を剃つてゐたものであつた。お寺の和尚の話は何より

結構なお土産であつた。

——香川縣小豆島——

岩手縣

聽耳草紙 五〇六

「話買ひ」話は話買りの爺様から買ふ。

”

老嫗夜譚 一八二

”

第二昔話號 四二

同縣

柴波郡昔話集 一四六

「話買り」一話百兩のを二話買ふ。「寶化物」と複合。

福島縣

磐城昔話集 七一

上野國

國民童話 一一八

栃木縣

下野茂木昔話集 二

江戸に炭賣りに出て儲けた三百兩で、百兩の話を三つ買ふ。

智慧のはたらき

「地藏淨土」的要素。

石川縣

江沼郡昔話集 一三三

「おやぢの人形」

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三二

「話買ひ」

江戸へ米つきに出て諺を買つて来る。

長野縣

北安曇郷土誌稿 二ノ九六

岐阜縣

吉城郡

ひだびと 五ノ六

山梨縣

甲斐昔話集 八五

「三つの勘辨」

續甲斐昔話集 三二二

大阪府 泉北郡取石村

和泉昔話集

「智慧賣り所」

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四一五

彦八は鴻池の下作で、いつもトンケツを言つて旦那を笑はせた。

或時「一口話せば一貫匁」と高札を立て、おくと旅で三貫目儲け

た男が見て聞く、云々。

これは破片であらう。

香川縣 小豆島

第一昔話號 七一

〔例出〕

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ三六一

「十五兩の話」



岡山縣 ばいさまのおはたし 三八

「彦八」彦八話を買ったお蔭に命が助かる。

廣島縣 安藝國昔話集 一八四

「彦八話」江戸で三千兩儲けた三吉。一話千兩の話を三話買つてしまふ。

「」 藝備「昔話の研究」二二一

江戸で三年の間米搗きして得た金三貫で「彦八の一貫匁話」を三つ買ふ。

周防大島 口承文學 一一ノ二四

徳島縣 三好郡 北斗 三一號

「一目千兩」 阿波祖谷山昔話集 三六

福岡縣 鞍手郡 福岡縣昔話集 三一

長崎縣 壹岐島昔話集 一四八

「へこ入の話」 甌島昔話集 一一〇

鹿兒島縣 二話あり。一八九の「念佛買ひ」は話千兩と風經との中間。

「」 喜界島昔話集 一〇〇

島 一ノ五七八

同書 二ノ四八二

昔研 一ノ二三四

おきえらぶ昔話集 五四・六一

鹿兒島縣

○参考

×遺老説傳 五七〇

×聽耳草紙 四七六に親子三人が寺の和尚から百文づつで言葉

を買ふ話あり。共に盗人を動かす言葉。

×クラウストン下三一七・四九一 "A King's life saved by

a maxim"

×ホルテ民話史にも。

二反の白

山の上の愛宕様といふ神様は馬に乗つてをられると嫁が言ふと  
姑は否々馬に乗つておいではないと言つて終日言ひ争つたが埒  
が明かない。とうとう大岡様に裁いて貰ふことになつて前の夜に  
嫁と姑は、どつちも内緒で大岡様に白布一反づつ持つて行つて、  
「どうか私の言ふことが本當だと言つて下さい」と、頼んでおい  
た。翌日二人が大岡様の前へ出て先づ嫁が「な申し大岡様、愛宕  
様といふ神様は馬にのつておいですよねえ」といふと、大岡様  
はいみやと首を横に振つた。姑はこゝだと思つて、「馬には乗つ  
てをられませんよねえ」「いみや」

そこで嫁姑はどちらもそれでは約束が違ふと思つて、そんなら  
あの山の上の神様は何神だかと問ひ糺すと、「あれは二反の白た  
だ取り公様さ」と答へた。

——岩手縣上閉伊郡——

岩手縣 上閉伊郡 聽耳草紙 四七九

「大岡裁判・愛宕様」〔例出〕

老嫗夜譚 二二九・二七二

新潟縣 南蒲原郡 加無波良夜譚 一三二

「鶴か雁か」嫁姑の争を和尚が裁く。

長野縣 下伊那郡 むかし話 九五

山梨縣 西八代郡 甲斐昔話集 八〇

「ちよつくり三百しめ子の兎」爺婆の争ひを和尚が賭ひの輕口

で裁く。

滋賀縣 高島郡 昔研 一ノ四七八

「こんぶ」これは聲嫁姑三人の争ひ。

長崎縣 島原半島民話集 一八四

島根縣 八束郡 昔研 二ノ三三

「嫁と姑」

これは破片。

○参考

智慧のはたらき

兒 裁 判

有賀氏傳説昔話集に二反の白只取りの語が見える。  
二反の白の方が後の改良か、もとの形あるべし。  
醒睡笑 四ノ一三三

岩手縣 老嫗夜譚 二四三

大岡様が裁きに困つて、川原で三人の子が裁判ごつこをしてゐる

のを見る。

朝鮮 朝鮮民譚集附 三〇

○参考

別掲「奇童と行脚僧の歌問答」との関係。

大平廣記 二四八

狸 の 巢

田の畔の木に何か巢をかけてゐた。一人は狸の巢だと見、今  
一人は雞の巢だといふ。そこで物知りの爺さんに裁いてもらふこ  
とになり、二人がそれ／＼「狸の巢でせうが」といへばいかにも  
田の木の巢だと答へ、鶏といはれれば「さうさ二羽鳥の巢に間違



ひない」といった。

——長崎縣壹岐——

岩手縣

紫波郡昔話 六八

「酸漿の木に鷹の巢」

”

同書 八五

貧乏な舅殿のところへ聾が正月年始に行つて泊つた。舅は聾に凍みた飯や汁を食はせ、藁を張つた蔭にこもを敷き杵の枕で藁を掛けて寝させた。かへつてから母親に問はれるので聾は、「凍々のお飯にソリ／＼のおつけを食ひ、あぶりの屏風を立て、金銀の枕に小紋の裏タタンの布子を着せられて寝て来た」と言つた。

繼子話を持つて行つた例あり。本來は「祝ひ直し」の智巧談であらう。醒睡笑などにも例が見える。

もよぎの蒲團・ひきあげの皿・其他の笑話。

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 四六

長崎縣

(舊)壹岐島昔話集 一五六

「狸の巢か雞の巢か」〔例出〕

”

島原半島民話集 一八五

「和尚の裁判」

この輕口は外の形にもなつてゐる。(小谷口碑集)

鴉の巢といふのは空巢の洒落なりしならん。

名 裁 判

父親三人の子に一つづつ瓢箪を與へて何れにも俺のあとを繼げと遺言して死ぬ。争ひとなり和尚の所へ持込むと、もとなりの瓢箪を買つた者が家を繼ぐべきことを教へられる。もとなりの瓢箪が一番重たいといふので、それ／＼の瓢箪を目方に掛けてみると總領のが一番重かつたといふ話。

岩手縣

——岩手縣上閉伊郡——  
聽耳草紙 五七

「本なり瓢箪」〔例出〕

私可多咄 三ノ五七に同じ話がある。

栃木縣

茂木昔話集 四

滋賀縣

國民童話 一〇

〇参考

日本童話集 七三七

沙石集 六ノ三〇ノオ

クラウストン 下ノ三六七、落した財布に入つてゐた金額。

これが、動物の拾ひ物裁判との關係。狼の仲裁などあり。

赤米と子供

貧しくて人の小屋を借りて住む者、並の米も得食はず赤米(成熟早く品質悪きもの)を食つてゐた。子供が家主のところへ遊びに行つた折に、何を食ふぞと問はれて「赤めし」と答へた。さてはこの頃家の小豆が少しづつ無くなるのは、彼の者の所業であらうと直ちに小屋へ行き、責めて追出さうとした。父は潔白のあかしをたてるため子の腹を裂いて見せると、出たのは赤米であつた。家主も申護けなくて自殺した。それからはこの邊(備前兒島郡灘崎村)で赤米を作る者がなくなつた。

——岡山縣——

青森縣

津輕口碑集 一一・津輕昔話集 九四

いつもかて飯しか食へぬ貧しい家があつた。その家の子供はそのかて料を赤豆(あづきのこと)と思ひ誤つてゐて、本家へ遊びに行つた時毎日何を食べてゐるか問はれて「赤豆」と答へた。本家の主はそのおごりを詰つて、貸金の催促をした。分家の主が子供の腹を裂いてみせると、出たのはかて飯であつた。潔白の證しは立つたが、大切の子を手にかけて泣く／＼日頃信心する薬師様へ詣でると、愈像の腹が裂けてゐた。不審に思つて歸つてみると死

智慧のはたらき

んだ筈の吾子がかすり傷一つ負つてゐなかつた。

岡山縣 兒島郡

郷研 一ノ七ノ四三四

「赤米に關する傳説」〔例出〕

長崎縣

壹岐島昔話集 三七

「吾子の腹を裂いて見せた話」

腹を裂いて出たのは小蝦。

〇参考

諸國物語 一三〇 肥前十三塚の由來。

祝ひ直し

長らく子供が無くて欲しがつてゐる處へ生れたので、大喜びの父親が隣の實家へあかしに出ると、途中で袈裟と法衣と珠數を拾つた。縁起でもないし腐つて和尚に相談にゆくと

今朝(袈裟)拾つた頃も(衣)霜月十三日この子の年は

珠數のかずほど

と縁起直しの歌をよんでくれた。

——山梨縣西八代郡——

この類はすべて狂歌咄である。但しその以前のものも無いでもない。繼子話にもこの例があるのは「皿々山」からか。

一七七



山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一二七

「縁起歌」 「例出」

静岡縣

静岡縣傳説昔話集 四〇二

繼子に魚の尾を食はすと「あととりにして下さる」と言つて喜ぶので、頭をやると「おかしらと呉れた」眞中をやると更に感謝するので繼母の心がなほる。

座頭の頓智

盲人が昔話の傳承に參與してゐた證據は、彼を主人公とした一癖ある改作話に最も明かに現はれてゐる。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四五

四話あり。

岩手縣

紫波郡昔話集 三四

「二束四束」 座頭に餅を食はせまいとして食はれてしまふ話。

〃

江刺郡昔話

「座頭が身上に關つたといふ話」井戸に落ちた座頭が祝つて上ると、其家の身上がよくつたといふ話。

大歳の火。弘法水などに依れる座頭の改作か。

新潟縣

加無波良夜譚 三八

夜食にかい餅(お萩)をつくつて食べようと、爺婆が相談してゐると六部が来て泊つたので爺の足指に糸をつけて、かい餅が出来たら引張つてそつと起すことにした。これを知つた六部は糸を自分の足指につけかへておき、代りに起出して腹一杯食べた上、残りのかい餅を自分の籠にくるみ、翌朝それを持つて出ようとする

と、爺が「お前さん國は？」と尋ねるので「みのかい餅くるみの郡」と答へた。

相手の知らない秘密をすました顔で固有名詞に頓作する様子があかしいのであらう。

大分縣

直入郡昔話集 六一

四話あり。狂歌咄を含む。

判じもの

人でも突くやうな悪い牛を連れた牛追ひが、座頭と道で行逢つた。「のう座頭さんのうよけて下さい」と言つたら、座頭が「お前は何かい」と問うた。その牛追ひが言ふのに「わしや三十日よ」すると座頭さんが「はあ一月(人突き)か」と言つたさうな。毛色は「十月頃の菜の下葉」と牛追ひがいふと「はあ赤葉(赤毛のこと)か」と言うたげな。

岡山縣

廣島縣安藝郡

「座頭の物識り」 火鉢を誰が何時、何の木で作つたかをあてるはなし。

こんな輕口は後にいくらでも出来る。

和尚と小僧

此話は細かく分類することは出来るが大よそ意味無く、又數にも限りがある。神童譚よりの分化とみとめられ、最初はこの類の夙慧譚の生長したものであらうが、大方今は笑話化して「和尚小僧」の名で通り、和尚を笑ふ方へのびてゐる。別に小僧も愚かであつた話は「おろか村」と共通である。

イ 馬から落ちたものは皆拾ふ

馬から落ちたものは拾ふものだと馬糞を拾ひ、さういふものは踏んづけて置けといふと、今度は和尚が馬から落ちたのを踏みつける。

ロ クワンく、クタク

小豆餅を佛様が食つたといふ話。

ハ 瓢女房

智慧のはたらき

夕顔に顔を書いて喜んでゐる和尚をからかふ小僧の話。

ニ 小僧が名を代へてもらふ

和尚が獨りで餅を食べたり酒を呑んだりするので、その時に使ふ言葉の名にして、返事をして出て来る話

ホ 柱立て話と餅發見

小僧に建て前を見せにやつた留守に餅を焼いて食ふ和尚、小僧が歸つて火箸で柱立ての話をしながら、餅をつきさして見つけてしまふ話。

ヘ 豆腐買ひに、云ひ損ひの話

ト 和尚の難題(智巧譚、これが段々と笑話になる)

難題聲・難題殿様・難題和尚。

チ 指合圖

和尚が便所に落ちて両手を高く上げたので米を一斗炊く。

リ 妻との密か言をきかれる

ヌ 附子話、砂糖を毒と欺く

欺いて毒といふのを知つてゐる小僧、大切なものを壊しておいて、思ふ存分に味はふ話。

ル 狂歌話ともつたがる

青森縣

津輕昔話集 八七・八九・九一

「ロ」及び「ニ」



- 青森縣 八戸 昔研 二ノ五〇七
- 「イ」「ロ」「ニ」「ホ」「ト」「チ」
- 岩手縣 稗貫郡 昔研 一ノ四〇〇
- 「ロ」
- 「ト」「ホ」
- 「ホ」
- 「チ」
- 九戸郡 九戸郡誌 四八〇
- 岩手縣 紫波郡昔話 三ノ一六六「イ」
- 山形縣 最上郡 昔研 二ノ一八七
- 「ニ」
- 宮城縣 桃生郡 郷土の傳承 三
- 「ロ」「ニ」
- 福島縣 石城郡 昔研 一ノ一ノ三五
- 「イ」
- 磐城昔話集 一八二
- 「イ」「ロ」「ニ」「ホ」「ト」
- 新潟縣 南蒲原郡 加無波良夜譚 八九「ハ」一四五「イ」「チ」
- 石川縣 江沼郡昔話集 九三以下
- 「ロ」「ヌ」「ホ」「ル」「ト」「イ」「チ」
- 能美郡白峯村 昔研 二ノ二七三
- 「ロ」「ル」
- 長野縣 小縣郡民譚集 一九六「ホ」一九八「ヌ」一九九「イ」一九四「ロ」
- 伊那郡 昔ばなし
- 五「ロ」二五「ホ」三五「甘酒のお代り」四三「ニ」四六「ヌ」一〇九「ル」(是は智巧譚に入れても可)二八「ル」一三〇「イ」
- 山梨縣 西八代郡 甲斐昔話集 一七五
- 「ホ」
- 「ト」
- 栃木縣 芳賀郡 續甲斐昔話集 三四二
- 「ロ」「ニ」「ホ」
- 上總 南總の俚俗 九七以下三話
- 「ニ」「ホ」

愛知縣 北設樂郡

第一昔話號 五八

「ト」

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ一ノ四一

鳥根縣

「イ」

隱岐昔話集 三八

福岡縣

福岡縣昔話集

糸島郡 一一四・一二四 便所餅のおかはりと、他では聞かぬ汚し話。

宗像郡 一一五 同じ汚い話 一一七「ニ」

遠賀郡 一一六「ニ」

鞍手郡 一一八「ホ」一一九「ロ」一二〇「チ」一二一「ヌ」

長崎縣

島原半島民話集

一九四「チ」一九八「ロ」二〇二「ト」

○参考

×英観・月單・普風(「ニ」参照)の如き名は土地毎に區々に昔話者の才覚なること疑なし。

×宇治拾遺 日本隨筆大系本 一六

×日本童話集 二・四 所在地無し。

×一休話もこれ、醒睡笑にも多し。三ノ一五

智慧のはたらき

×沙石集四ノ一八オ(三人三腹の子)上人子持の事。

七ノ三四ウ 蜜は大毒

○参考

×中田千畝「杜人雜草」小僧の改名、みな本字があてゝある。

×中田千畝(和尚と小僧)

×朝鮮 朝鮮民譚集 一九四 「毒の串柿」全國的説話といふ。

×雜談集二終(嘉元二年)鮎を剃刀なりと云はれし小僧、渡河の時「剃刀見え候、御足ばしあやまち給ふな」その前に雞を「茄子漬の父」といふ話がある。



生  
派  
昔  
話



因縁話

歌ひ骸骨

或二人の商人が稼ぎに行つて、一人は非常に儲けたが他の一人は元の手ぶらで歸らなければならなかつた。儲からなかつた男は途で相手を殺し金を奪つて家へ歸り、三年間商ひもせずぶら／＼してゐたが、三年たつて又先の途を通ると、昔友人と惹んだあたりの簾の中で良い歌聲がする。人も居らぬ所に、と不思議に思つて行つて見ると骸骨が歌つてゐるのであつた。珍らしいことだと思ひ、いつ何處へ行つても歌ふかと聞くと、歌ふと答へるので、良い金儲けが出来ると思つて骸骨を拾つて歸つた。

そしてその骸骨を持つて金持の家に行つて歌を唄ふ骸骨を持つてゐると云ふと、其處の主人は骸骨が歌を唄ふ筈は無いといふ。それでは、といふ事になつて、もし歌はなかつたら男は首を渡す、歌つたら金持は財産全部男に呉れると約束をした。そこで男は骸骨に歌へと云つたが歌はぬ。叩いても轉ばしても歌はぬ。とうとう主人は腹を立て男の首を切つた。すると同時に骸骨はよい聲で「かのかのたよ思た事かのか。末ぢや鶴龜五葉の松」と歌

つた。そのされ骨は三年前の仇を取つたのであつた。

— 鹿兒島縣甌島 —

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二二五

「わらしべ長者」の後段として存在。

日本昔話集 六

福島縣 双葉郡

昔研 二ノ一八〇

「骸骨の仇討」

磐城昔話集 一四

石城郡

「されこべの恩返し」

昔研 一ノ一二五

新潟縣 南蒲原郡

「春の野道から」

加無波良夜譚 七〇

鹿兒島縣

甌島昔話集 一二〇以下三話

「歌ひ骸骨」「歌ひ井」

喜界島昔話集 九五・九六

後者は歌ひながら踊つてゐる井。但し仇討といふ事なし。

島 二ノ四八四

「鶴龜の仇討」

島 二ノ四九一



「饞饒の恩返し」

之は報恩譚。

鹿兒島縣

おきえらぶ昔話 二一四

運定め話

これには三つの型あり。

その一は 同じ夜に生れた男女兒のうち女兒にのみ福分があるといふ話で、炭焼長者話とも縁がある。

その二は 水の神に命を取られる運の子供が、餅やその他偶然のものによつて命を助かるといふ話。

その三は 「虻と手斧」など、稱せられ、手斧で死ぬと定められた運、果して子供に虻のたかつたのを拂はうとして手斧がふれて命を落したといふ様な話。

その一の話は、或長者が身もちの女房を家に残して旅に出た。用事をすませて歸途、山の中で行き暮れてしまひ氏神様の拜殿で泊つた。夜中にシャン／＼と馬の鈴の音がして二人の神様が馬に乗つて来て、今夜某村の某といふ長者の女房がお産をするから氏神様も行かうではないかと誘つた。すると奥の本殿の方から、私の所には今夜お客があつて行かれぬ。みんな一足お先に行つて下

さいと云ふと二人の神はそれぢや私等だけ行くと云つて又馬の鈴を鳴らし乍ら行つてしまつた。

その話をきいた長者は村の名にしても人の名にしても自分の事を云はれてゐるに違ひないが、變なこともあるものだと思ひなつて寝もやらず考へて居た。するといふ加減した頃前の二人の神が歸つて来て、氏神様に、長者の所では男の子が生れたがその徳は氣の毒ながも竹三本だ、と云つてどこかへ行つてしまつた。長者はこれをきいて子供の徳が竹三本ぢや情ないと思つて居ると又二人の神がやつて来て、田圃の土手に小屋がけしてゐる非人の嬪のお産に誘つた。すると又氏神がまだお客が居るからといふ。長者は結果を待つてゐると、又二人の神が今度は女の子で寶を澤山持つて生れたと云つて行つてしまつた。

夜があけて長者は急いで家へ歸つてみると本當に女房は昨夜男の子を産んだといふ。時も恰度同じ頃であるから神様の云つたのは自分の家にちがいない。しかし竹三本の徳では困るから寶をもつて生れた非人の娘と夫婦にするより外あるまいと思つて、行つてみると、果して女の子が産れて居たので將來夫婦にする約束をした。二人の子供は大きくなつて夫婦になつたが、その嫁は何故かその家に居られなくて別の長者の家へ嫁に行つた。するとその家を見る間に何層倍といふお大盡になつたが、反對に前の長者の

とられるものとして家では葬式の用意をしてゐた。

男の子は途で餅屋に入つて餅を食べ、來合せてゐた娘に食べさせた。すると食ふも／＼と／＼と／＼と百貫の餅を食べてしまつた。男は錢の持合せが無いので編笠一つをかたに置いて娘と連れ立つて行くと桂川の堤で娘は「私は此處の主だが私に充分食へさせて呉れたから十八歳の壽命を六十一歳までのばしてやる」と言つた。家では葬式の仕度をしてゐたのに無事に歸つた子供を見て親は大喜びをした。

——兵庫縣美方郡——

その三は、或時六部が或村に來て山神の御堂に宿つて居た。眞夜中に人聲がすると思つて眼を覺すと山神が二人で話をして居た。「今夜は行かなかつたか」「あゝお客があつて行かなかつたが首尾はどうだつた」「うん、母も子も丈夫だ」「それで何歳までかな」「七歳までだ」「そして斧で死ぬ……」

六部は何の話かと思つて聽いて居た。其後七年経つて六部が又其村に行くと或家で大工であつた父親が子供を傍に寝かして置いて仕事をしてゐたが、子供の顔に虻がたかつたので持つて居た斧で追ひ拂はうとして誤つて子供の頭を斬り割つたと云つて大騒ぎをして居る所であつた。六部は七年前の御堂での山神様達の話と思ひ出してあゝこの事だつたなあと思ひ當つた。

家は女房が出て行つてから酷い貧乏になり、食ふにも困つて終に竹で箒を拵へて賣り歩く様になつた。或日前の女房の嫁入先の長者の門口に立つと前の女房が出て來て思ひ出し箒を買つてその代りに米の中へ小判を澤山入れて呉れた。その米をもつて家へ歸ると、近所の貧乏人共が米を賣つた事を聞きつけて借りに來たので、借しげもなく大方貸し與へてしまつた。そして又自分は元のように貧乏になつて箒を持つて長者の家に行つた。前の米はどうしたか、中に何も入つてゐなかつたかと聞かれ、近所隣の人に借してやつたが何が入つてゐたとも聞かないと答へた。女房もよくよく運の無い人だと愛想をつかし、それから相手にななかつた。

——山梨縣西八代郡——

その二は、昔男があつて女房が身重になつたので地藏様に願かけして居た。或夜おこもりしてゐると他の地藏が迎へに來る。お客が居るからとその地藏が斷ると行つてしまつたがやがて歸つて來て「壽命は十八歳、京の桂川の主にとられる」と云つてゐる。家へ歸つてみると果して産れてゐた。

男は間もなく桂川のせぶりを請けとる役になり子供も大きくなつたがと父は一人で苦しんでゐた。十八になつた年桂川に大水が出たが子供は親に代つてせぶりに行くと云ふ。親はやるまいとしたが、親の眼をしので朝飯も食はずに出て行つた。親達は主に



青森縣 八戸

——岩手縣岩手郡——  
昔研 二ノ四四八

宮城縣

登米郡史 下ノ八七七

三つの型が皆揃つてゐる。

草分觀音の傳説として云ふ。

岩手縣

紫波郡昔話集 二八

「右衛門太郎と左衛門太郎」

「蛇と手斧」

第一類に屬する。狼のまつげを買つて人を見分けるといふ話があつて、炭焼長者型につよく。

郷土の傳承 一ノ四九

發端は自然であるが、話が長いのは語りもの化してゐる爲か。

福島縣 石城郡。

磐城昔話集 七七

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 五九

「水の物に取らるゝ運」 第二類。

同書 一

「雉の一聲の里」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一五八

塞神と辯神と山神の話の立聴き、酒泉發見。鴨に小判を打つ事はあるが、炭焼に嫁入る話はない。同書 六〇にも似た話がある。

同書 一九六の炭焼長者と共に第一類に屬する話。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 三〇

「山神の相談」 【例出】 第三類。

石川縣 能美郡

民俗學二卷・昔話採集手帖 七三

秋田縣 鹿角郡

昔研 一ノ一二二

「生れ子の運定め」 第三類。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一八二

蛇の事を云はぬ。

「生れつきの運」 【例出】 第一類。

山梨縣

甲斐昔話集 一七六

「伯耆の國の伯耆衛門様」

二話あり。その一は第一類、その二は第二類。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一四四

「六部と産兒の定命」

山口縣 周防大島

第二昔話號 五三

混合した形となつてゐる。

「子の生れる時には觀音様と地藏様が来る」

千葉縣 長生郡

南總の俚俗 一〇一

「荒神さま」 第一類。

徳島縣 三好郡

昔研 二ノ四七〇

海上郡

遠つびと 一四ノ九

こゝでは「蜂と剃刀」

美馬郡

阿波祖谷山昔話集 三八・八二・一三

長野縣 上伊那郡

郷土 一ノ三ノ八

第三類。

香川縣 三豊郡志々島

昔研 二ノ一三三

岐阜縣 飛騨

昔研 二ノ五一八

運定め話五話の中 第一類は一・二・五、第三類は三と四。

三井寺の由來を説く話。

大阪府 泉北郡取石村

和泉昔話集 三六

第三類。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 八九・九二

兵庫縣 美方郡

昔研 二ノ三二七

「百貫のかたに編笠一枚」 【例出】 第二類。

「三井寺」 第一類。

この諺と結びつけた趣旨は分らぬ。

なほ近江をはなれぬは意味があらう。(次項參照)

水上郡

旅傳 一〇ノ七ノ五一

一人は天井から釘が落ちて死ぬ運命。一人は爪で踵を蹴つて死ぬ

島 二ノ四二五



運命。前者はこの世の別れに友達を集めて遊宴し命を助かり後者は心配して家を出入してゐてやはり死ぬ。

鹿兒島縣 奄美大島

旅傳 一ノ八ノ四九

「運命の神」

〃 甌島

甌島昔話集 一六三

第一類と第二類と二話あり。

沖繩

遺老説傳 一九

○参考

今昔物語 卷二十六・第十九

東下者宿 人家 値産語

その箕を持出して火を防いだといふ。それから大津の三井寺といふやうになつた。

——香川縣三豊郡志々島——

安房富崎

昔、三井寺の女が蛇髻を儲け、菖蒲酒を飲んでその蛇の種をおろした話がある。

炭焼長者系にも箕で寺を建てる話がある。

蛇の母の話にも三井寺の鐘の由来あり。

こゝにも説話者の群があつたか。

### 化物話

#### ちいちい小袴

昔ある山家に一人暮しの婆があつた。ある晩の夜ふけ、いつものやうに一人で糸をつむいで居ると、どこからか一人の小男が来た。如何にも小さい四角張つた男でキチンと袴をはいてゐる。

「お婆さん淋しいだらう。ワシが踊つて見ませう」とて

チイ／＼ばかまに木脇差を差して

こればあさん、ネンネンヤ

### 三井寺話

山中のお堂に夕立に降りこめられた狩人、神様の話を立聽いて生れる子の運を知り、青竹三本の分しか持たぬ我子を、隣の米俵千俵の分に生れついた女の子と夫婦にさせる。男は貧乏相で竹細工ばかりするが病氣になるやら遂に行づまつて夫婦別れをした。女は大津の町に出て奉公するうち分限者の後妻になつてゐると、男はそれとも知らず箕を賣りに来る。女は来る度に箕を買つてやつてゐた。後に大津の觀音様が焼けた時、水が不自由だつたので

と節面白く唄ひ乍ら踊つてどこかへ消えてしまつた。お婆さんは氣味悪く思つて夜を明し、家中調べたら縁の下に只小さいかねつけ刷子の古いのが出て来た。早速焼棄てたらその夜からは何の不思議も無かつた。昔からかねつけ刷子の古いのは皆揃へて焼棄てるものといふ。

——新潟縣佐渡——

新潟縣

佐渡島昔話集 一三二

チイチイばかま (例出)

備中

民族 一ノ一一六一

「ちんちんちよぼし」

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一八二

「化物話」のその一

ハーンの譯したチンチン小袴と備中のものと同じものなる事は疑ひない。

### 化物退治

兄弟の鐵砲ぶちがあつた。山に入つて谷川の兩方の縁を別々に歩いてゐると、弟が打つ音が聞えて来て續けざまに打つてゐる。よほど大物だと思つてきて居るとびたりと止つた。兄は心配し

て大急ぎで谷を渡り向ふ側へ登つて弟を呼んだが返事は無い。ふと見ると十二三間むかふの大木の根元に白髪の婆が一人坐つて糸車を廻して糸を紡いでゐた。怪しいと思つて鐵砲で狙つて見ても怖れも逃げもせず、此方を見てニカリ／＼と笑つて居る。一發放したしかに手應へはあつたが異常はない。遂に二發残つた彈丸で繕り糸を入れる箱を狙つて打つた。すると婆はふと消えてしまつた。急いでそばへ行つてみると年を経た大きな狒々であつた。弟の行方はそれきり分らなかつた。

——甲州西八代郡——

岩手縣 ト閉伊郡

聽耳草紙 一六一

「絲績み女」

二人のマガキの逸話として語られて居るが、昔話の破片であらう。

新潟縣 佐渡

昔研 一ノ一八七

「むじなの仇討」

貉の化けた女、月夜に來いと云つてやり、影を切つて退治したといふ話。

宮城縣 伊達郡伊達崎村

信達民譚集 五五

「狐の悪戯」

式部阪の鐵柴つけ女が北澤の佐五平といふ男に、「ついたか佐五平」と云つて顔を見せる。翌晩はついたらと云つて傍の火鉢を打つ



て退治する。

山梨縣 西八代郡

「佛々婆」〔例出〕

栃木縣

「坊主に化けた狸」

徳島縣

大分縣 北海部郡

鹿兒島縣

「蜘蛛の化物」

鹿兒島縣

「火車の化物」

頭の引掻きくら、脛の握りくら。

○参考

×東北にも頭の叩きくらの話がある。紫波郡昔話集 一四（化物寺の項参照）

×小さくなつて見せろといふ話。

老嫗夜譚 三七 マタギと大入道。

餅と白石

「山寺の怪」退治譚の一つの型。

岩手縣 上閉伊郡

早池峯山道の由來。傳説の形。

新潟縣 南蒲原郡

「狸仰天」

狸の八疊敷の話と結びついたもので、之はたたみやの話にしたものであらう。

山梨縣 西八代郡

「和尚と狸」

和歌山縣

これも八疊敷の話。火にあたるといふのみにて白石をやく話は無い。

和歌山縣

餅好きの山姥。秋になると餅をねだりに歩く。川原の白い石をやって食はずとその恨みにより、このあたりの正月はもちを拵へぬといふ傳説となつてゐる。

岡山縣 川上郡

炭焼小屋には、白い餅の様な石を並べておく。狸が化けて來ると

岡山縣 川上郡

岡山文化資料 二ノ三

南紀土俗資料 一六

之を投付ければすぐ逃げるといふ。

○参考

吾妻昔物語 上

婆の三つ疣

狐が人の話を立聴してその秘密を知り、それを種にして人をだま

さうとして失敗する話。

岩手縣 紫波郡

「陣岡左衛門に馬場松公」

新潟縣 岩船郡

「狐の昔話」のうち。

紫波郡昔話集 二一

越後三條南郷談 三七

蜘蛛の糸

「小間物屋と狸」など云ふも同系。

山伏が或村に行つて宿を断られたので山の空寺に泊つた。夜中に本堂の方から大入道が出て来ておい／＼客人といふ。三味線を弾いて聞かせべいと云つて三味線の糸をきり／＼と縮めた。すると山伏の喉が苦しくなる。その度毎に切刃で切るとたはる。終に

化物話

入道が歸らうとする所を切刃を投付けて殺した。屍を土間に投げ

ておいて朝日にあてゝ見たら大きな古蜘蛛であつた。

岩手縣 上閉伊郡

「山寺の蜘蛛女」

主人公は小間物賣。古寺に泊るとやがて美しい女が出て来て三味

線をひく。それを弾く度に首筋をしめられる。

岩手縣

「山伏」〔例出〕

新潟縣 南蒲原郡

「蜘蛛と座頭」

鹿兒島縣 喜界島

「亡者と歌賭」の二

マチャムンが三味線の絃を縮めて呉れと盛に云ふ。糸が切れると

後生へひかれると云ふので、近くの家の婆が来て鶏を見せて怖を

追ふ。

この話は座頭以前からあり、この島では蜘蛛の化物とは云はな

島 二ノ四三三

加無波良夜譚 一二五

紫波郡昔話 一四九

老嫗夜譚 三五



小間物屋と狸

「蜘蛛の糸」「餅と白石」などと系統を同じくする。主人公は小間物屋。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 三五

「山の蜘蛛女」

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 八六

「狸と小間物屋」

一つ家に女あり、針を求める。女が不要といふ針を小間物屋が疊にさすとあゝ痛ツと云ふ。八疊敷の話。

鳥取縣

因伯昔話 四五

「一軒家」

狐退治の失敗

狐の化けるのを見あらはさうとして却つて騙されてゐる。

岩手縣

江刺郡昔話 一二五

「雌馬の鬣を覗かせられた男」

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 二九九・二八五

狐の尻尾を見つけると閉口して寶物をくれる。

爺はそれを頭にのせ姿が見えぬ心算で居て失敗する。

隠れ義笠の交易話換骨奪胎といふべし。

岩手縣

聽耳草紙 二八七

「耻け馬」是など又一段と世間話化した新趣向。騙されぬと威張つてゐる侍が、峠に休んでゐると馬が恥けて來る。立上る拍子に握飯をころがして狐に唾へて行かれてしまふ。

羽前

豐里村誌

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四〇

「強情な狐」

南蒲原郡昔話集 一五八

石川縣 七尾

第二昔話號 四一

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 六九

「剃髮狐」共に坊主にされる話。

埼玉縣 秩父大瀧村

昔研 二ノ二二七

狐の化けた娘を打殺して手柄を立てる話。

この話は大分痛んで居る。話し手の新意匠か。

「法印様と狐」

傳説叢書 三一・三二

新潟縣 佐渡

遠野物語 二九八

岩手縣 上閉伊郡

昔研 一ノ四六一

秋田縣 仙北郡

磐城昔話集 六五・一五七

福島縣

昔研 二ノ二三一

「法印様と狐」

旅商人が狐の晝寝に石を打付けると、不意に日が暮れ、一つ家の婆に留守をたのまれ惟にあふ。次に崖から落ち、田にゐる人に笑はれる。

長野縣 伊那郡

昔ばなし 三二・五六・一四四・八四

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二三

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 八七番

「狐と六部」

これは破片。

福岡縣昔話集 二二三番

同縣 築上郡

話の世界(大正九年三月)

「三井郡

或は曾呂利物語の土着か。

長崎縣 島原

旅傳 二ノ三

これは狸。

小間物屋と狸

「蜘蛛の糸」「餅と白石」などと系統を同じくする。主人公は小間物屋。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 三五

「山の蜘蛛女」

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 八六

「狸と小間物屋」

一つ家に女あり、針を求める。女が不要といふ針を小間物屋が疊にさすとあゝ痛ツと云ふ。八疊敷の話。

鳥取縣

因伯昔話 四五

「一軒家」

狐退治の失敗

狐の化けるのを見あらはさうとして却つて騙されてゐる。

岩手縣

江刺郡昔話 一二五

「雌馬の鬣を覗かせられた男」

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 二九九・二八五

狐の尻尾を見つけると閉口して寶物をくれる。

爺はそれを頭にのせ姿が見えぬ心算で居て失敗する。

隠れ義笠の交易話換骨奪胎といふべし。

岩手縣

聽耳草紙 二八七

「耻け馬」是など又一段と世間話化した新趣向。騙されぬと威張つてゐる侍が、峠に休んでゐると馬が恥けて來る。立上る拍子に握飯をころがして狐に唾へて行かれてしまふ。

羽前

豐里村誌

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四〇

「強情な狐」

南蒲原郡昔話集 一五八

石川縣 七尾

第二昔話號 四一

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 六九

「剃髮狐」共に坊主にされる話。

埼玉縣 秩父大瀧村

昔研 二ノ二二七

狐の化けた娘を打殺して手柄を立てる話。

この話は大分痛んで居る。話し手の新意匠か。

「法印様と狐」

傳説叢書 三一・三二

新潟縣 佐渡

遠野物語 二九八

岩手縣 上閉伊郡

昔研 一ノ四六一

秋田縣 仙北郡

磐城昔話集 六五・一五七

福島縣

昔研 二ノ二三一

「法印様と狐」

旅商人が狐の晝寝に石を打付けると、不意に日が暮れ、一つ家の婆に留守をたのまれ惟にあふ。次に崖から落ち、田にゐる人に笑はれる。

長野縣 伊那郡

昔ばなし 三二・五六・一四四・八四

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二三

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 八七番

「狐と六部」

これは破片。

福岡縣昔話集 二二三番

同縣 築上郡

話の世界(大正九年三月)

「三井郡

或は曾呂利物語の土着か。

長崎縣 島原

旅傳 二ノ三

これは狸。

小間物屋と狸

「蜘蛛の糸」「餅と白石」などと系統を同じくする。主人公は小間物屋。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 三五

「山の蜘蛛女」

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 八六

「狸と小間物屋」

一つ家に女あり、針を求める。女が不要といふ針を小間物屋が疊にさすとあゝ痛ツと云ふ。八疊敷の話。

鳥取縣

因伯昔話 四五

「一軒家」

狐退治の失敗

狐の化けるのを見あらはさうとして却つて騙されてゐる。

岩手縣

江刺郡昔話 一二五

「雌馬の鬣を覗かせられた男」

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 二九九・二八五

狐の尻尾を見つけると閉口して寶物をくれる。

爺はそれを頭にのせ姿が見えぬ心算で居て失敗する。

隠れ義笠の交易話換骨奪胎といふべし。

岩手縣

聽耳草紙 二八七

「耻け馬」是など又一段と世間話化した新趣向。騙されぬと威張つてゐる侍が、峠に休んでゐると馬が恥けて來る。立上る拍子に握飯をころがして狐に唾へて行かれてしまふ。

羽前

豐里村誌

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四〇

「強情な狐」

南蒲原郡昔話集 一五八

石川縣 七尾

第二昔話號 四一

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 六九

「剃髮狐」共に坊主にされる話。

埼玉縣 秩父大瀧村

昔研 二ノ二二七

狐の化けた娘を打殺して手柄を立てる話。

この話は大分痛んで居る。話し手の新意匠か。

「法印様と狐」

傳説叢書 三一・三二

新潟縣 佐渡

遠野物語 二九八

岩手縣 上閉伊郡

昔研 一ノ四六一

秋田縣 仙北郡

磐城昔話集 六五・一五七

福島縣

昔研 二ノ二三一

「法印様と狐」

旅商人が狐の晝寝に石を打付けると、不意に日が暮れ、一つ家の婆に留守をたのまれ惟にあふ。次に崖から落ち、田にゐる人に笑はれる。

長野縣 伊那郡

昔ばなし 三二・五六・一四四・八四

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二三

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 八七番

「狐と六部」

これは破片。

福岡縣昔話集 二二三番

同縣 築上郡

話の世界(大正九年三月)

「三井郡

或は曾呂利物語の土着か。

長崎縣 島原

旅傳 二ノ三

これは狸。

小間物屋と狸

「蜘蛛の糸」「餅と白石」などと系統を同じくする。主人公は小間物屋。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 三五

「山の蜘蛛女」

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 八六

「狸と小間物屋」

一つ家に女あり、針を求める。女が不要といふ針を小間物屋が疊にさすとあゝ痛ツと云ふ。八疊敷の話。

鳥取縣

因伯昔話 四五

「一軒家」

狐退治の失敗

狐の化けるのを見あらはさうとして却つて騙されてゐる。

岩手縣

江刺郡昔話 一二五

「雌馬の鬣を覗かせられた男」

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 二九九・二八五

狐の尻尾を見つけると閉口して寶物をくれる。

爺はそれを頭にのせ姿が見えぬ心算で居て失敗する。

隠れ義笠の交易話換骨奪胎といふべし。

岩手縣

聽耳草紙 二八七

「耻け馬」是など又一段と世間話化した新趣向。騙されぬと威張つてゐる侍が、峠に休んでゐると馬が恥けて來る。立上る拍子に握飯をころがして狐に唾へて行かれてしまふ。

羽前

豐里村誌

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四〇

「強情な狐」

南蒲原郡昔話集 一五八

石川縣 七尾

第二昔話號 四一

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 六九

「剃髮狐」共に坊主にされる話。

埼玉縣 秩父大瀧村

昔研 二ノ二二七

狐の化けた娘を打殺して手柄を立てる話。

この話は大分痛んで居る。話し手の新意匠か。

「法印様と狐」

傳説叢書 三一・三二

新潟縣 佐渡

遠野物語 二九八

岩手縣 上閉伊郡

昔研 一ノ四六一

秋田縣 仙北郡

磐城昔話集 六五・一五七

福島縣

昔研 二ノ二三一

「法印様と狐」

旅商人が狐の晝寝に石を打付けると、不意に日が暮れ、一つ家の婆に留守をたのまれ惟にあふ。次に崖から落ち、田にゐる人に笑はれる。

長野縣 伊那郡

昔ばなし 三二・五六・一四四・八四

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二三

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 八七番

「狐と六部」

これは破片。

福岡縣昔話集 二二三番

同縣 築上郡



長崎縣

「山伏と狸」

○参考

曾呂利物語一卷 四〇九

島原半島昔話集 一四四

狐狸の仇返し

多くは世間話風に語られる。

昔話の形の残れるもの。

岡山縣 邑久郡

岡山文化資料 二ノ三ノ七〇

狸の穴のまはりの草を刈り「はれやかになつとらうが」といふ。

夕方狸来て「戸を賣つて富ゆ入れ」といふ。その通りするが

皆はづれる。そこへ狸来て「はれやかになつたらうが」

鳥取縣

因伯童話

「なまけ多助」

山梨縣 西入代郡

「怖い顔」〔例出〕

「目だらけの化物」

愛知縣

鳥取縣

鳥根縣

續甲斐昔話集 二四四

三州横山話 一一一

因伯童話

郷土研究(清水氏)

二度の威嚇

これは不思議に数多き怪談である。恐らく語りの面白さに流行したものであらう。

熊本縣

玉名郡

「鼻の長くなる話」「顔の長くなる話」

鹿児島縣

「こげな顔ぢやこわんさんぢやつたか」

○参考

地方叢談 羽前米澤

天草島民俗誌 一〇四

昔研 一ノ二二七

旅傳 三ノ七

猫と南瓜

悪猫を殺して埋めたところ、その眼から南瓜が生えた。それには毒があつてすんでの事で命を失ふ所を助かるといふ怪談。

青森縣 三戸郡

五戸の昔話 二ノ六ノ一

此話には船頭が関係してゐる。

岩手縣

聴耳草紙 三四九

物云ふ猫を殺して埋めた後、南瓜を食つて家人があてられる。よく調べてみたら猫の口から生えたのであつた。

これが南瓜のはじまりといふ。よほど語り物風になつてゐるのは

ボサマの細工か。

老嫗夜譚 二〇二

上下二つの口

征服譚に入れてもよいが中心は寧ろをかき化け方にある。

絡が二匹で一人の人間に化けて来たが、下の口が欠伸をしたといふ話。

岩手縣

江刺郡昔話 一三〇

栃木縣 芳賀郡逆川村

茂木昔話集

神奈川縣 津久井郡

相州内郷村話 四二

香川縣 高松市

讃州高松叢誌

沖繩の鬼餅の由来。その他にも鬼を嚇したといふ話傳はる。

○参考

燭取録 一一ウ

化物話

静岡縣 周智郡  
廣島縣 双三郡

静岡縣傳説昔話集 三三一  
藝備「昔話の研究」 一九一



熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ一七一

筑後柳河では事實譚のやうに説かれてゐる。

” 天草島

天草島民俗誌

猫を殺して埋めた所から生え出て實つた大南瓜、切つたら中から蛇が出た。

沖永良部島

おきえらぶ昔話 一九八

○参考

長崎縣南高來郡の天人女房談に千匹の赤牛を埋めて其上に南瓜の種を蒔けばその墓天に届くといふことあり。

南瓜はもと瓜であつたらう。笑話化分脈の経路か。

此話は分布弘し。話者は大部か、好い役を持つてゐる。

### 猫の秘密

親父と猫と鶏との三人暮し、三人共同じ四十二歳であつた。猫は主人を殺して自分になりたいたいと鶏に話した。鶏は驚いて盛に奮闘をつくつて知らせようとしたが縁起が悪いと言つて、却つて山に棄てられた。通りかゝつた薬屋がこの話をきいて鶏を行李に入れて歸り、猫の寝てゐるのを突然打ち殺す。主人は怒つたが薬屋がわけを話した。翌年薬屋が又此家を訪ねると、主人が、去

年猫を埋めた所から南瓜が生えたから今晚煮て食べようと云ふ。薬屋は不思議に思つて南瓜の根を掘つてみると、猫の口から生えて居たので皆おどろいてしまった。

——新潟縣南蒲原郡見附町——

これは冒険譚。

青森縣

津輕口碑集 二七

八戸にもあり。

岩手縣 裨貫郡

五戸昔話 第二十五話附録

昔研 一ノ一一ノ四六

口承文學 九ノ六

聴耳草紙 三四五

” 上閉伊郡

猫の淨るり。疲れた旅人が墓から拾つて来た棒きれを杖についてきくと猫の聲に聞えたが、外の人々には淨るりに聞えるといふ。

” 秋田縣 鹿角郡

遠野物語 二六八

「歌をうたふ猫」

第一昔話號 四三

” 平鹿郡淺舞町

旅傳 九ノ一一ノ一八

宮城縣 (登米郡米岡村八軒小路の口碑)

郷土の傳承 一ノ九

猫が老婆に義經東下りの一節を語る。

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ七一

〔例出〕

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ四一六

猫の淨瑠璃のもの形。少くともその課程を知る。「うちの和尚さんをいつとらうか、おひやりこひやり〜」と寺の飼猫が踊つてゐるのを飯炊爺に見つかる。和尚と問答して後その猫を捕へてしまふ。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ五七三

猫が鹽賣りに「家の者は茶つみに行つた」といふので驚いて家人に話す。そこで猫言つたか言はぬかと問ひつめられ「言はぬ」といふ。

嫁を食殺す話よりこの方が古い。斯ういふ形になれば冒険譚に入る。

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ一七二

長崎縣

島原半島民話集 一七四

鹿兒島縣 喜界島

島 一ノ三ノ二四

この話は例に出た新潟のものとは非常によく似てゐる。

” 島 一ノ三ノ二五

爺の留守に猫が婆に八月踊りのうたをうたつてきかせる。婆がそれを言はうとすると、のどに咬みつき殺す。以下類話。

○参考

× 地方叢談 福島縣東北部のムロの木。

これも婆に義太夫を語つて聞かせる。そのあと鏡で玉をよける話となる。

× 咄隨筆 下の六一 石川縣河北郡長井谷傳燈寺、承應中のことと傳ふ。狐經脱謝恩の爲、和尚に能を見せんと約す。笛吹は猫の役なりしが、豫め人に知れたる爲恥ぢてやめぬ。狐の老人も來らずなりぬ……と。

### 猫の淨瑠璃

猫の踊と關係あるかと思はる。

秋田縣 鹿角郡

第一昔話號 四三

留守居の邊様に猫がうたを歌つて聞かせる。息子が歸つて來て誰だと追求するので婆が、約束を忘れて「猫が……」と云ひかける」とどついでのを咬んで殺す。

山梨縣 西八代郡

第二昔話號 二二

「猫の忠臣蔵」

○参考

備中阿哲縣上刑部村の猫神の祠の言ひつたへ。芝居を見に行く前夜、猫が芝居をして爺婆に見せる。之を怖れて



明朝叩き殺さうとすると逃げて山中の岩穴に入る。人が番をして居ると段々大きくなり出られず遂に死んだ。それを猫神として祀る。非常に人にさはり、呪ひに之をたのむ事もある。此邊猫神多く、又猫外道といふもある。

物食 ふ 魚

毒を入れて魚をとる相談をしてゐると、知らぬ僧が来て是をいさめる。その僧は團子を買つてやがて居なくなつた。後で大魚を捕つたら腹から團子が出た。

宮城縣 白石〔例出〕

——宮城縣——

郷土の傳承 一

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一二二

「やまめの王」

やまめの化けて来た小僧に粟の強飯を食はせる。後それを釣上げることになつてゐて捕魚を制する條を伴はぬ。

趣向が無視せられてゐる故、此方が變化であらう。

笑 話

一 大 話

飲み込んだ密柑の種が腹で芽を出し、頭に突出て實がなつた。子供が探りに来て五月蝋いので本を引抜くと大穴となり、雨水が溜つて池となつた。また子供らが釣に來てうるさい。たまらなくなつてその池に身を投げて死んだ。

——鹿兒島縣喜界島——

日本童話集 五七四 のがこれと相似す。

岩手縣

紫波郡昔話集 四四・一〇九

「たご馬」「頭さ柿の木」

こんなのは皆座頭の作。

”

聽耳草紙 五二二

「額の柿の木」

”

膽澤郡昔話集

浅木の五郎の額に柿の木の生える話。後段は明治時代にいひ始めたもの。

秋田縣 仙北郡

角館資料 三一六

高い塔の上から小僧の擲げる大風呂敷の上に飛び下りると、小僧達は鉢合せして目から火が出て傍の木に燃移つた。この木を楡といふ。

この地方は「雀とり話」につづく。其餘參照。

長野縣

小縣郡民譚集 二八二

腹に吞込んだ鳥が羽拍きして工合が悪いので鳥刺しに入つて賣ふと、刺して出たはいゝが笠を腹に残して來た。それでカサの病となつた。

兵庫縣 城崎郡

昔研 二ノ四一九

「風來坊」 鳥に運ばれて生野の銀山へ落ちて坑を掘つては大阪の傘屋の庭へ掘抜き、大傘を或寺へ届ける途中風に飛ばされて、信濃の善光寺の屋根まで飛ぶ。飛び下りる時目から火が出て善光寺は丸焼けになつたげな。

長崎縣

壹岐島昔話集 一七一

「藥しび長者」 盲が、なめた味噌の辛さに飛上つて目が明くもある。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一五四

「頭の木」〔例出〕

不幸話の大話に「佐野屋の不運」あり。

郷土研究 二ノ四ノ二二五 寶玉集 下ノ五六二參照

笑 話

大話・大口といへば現在では猥褻の話に限る地が多い。もとは誇張が全部で、その最も無害なものが此方面にあつた。

○參考

Xオホグチ——信州高遠附近で猥褻のこと。

Xオホバナシ——猥褻の話に限る地あり。

Xイカイハナシ——といふも同じ。

Xオホモノイヒ——周防柳井で常に猥褻な言辭を弄する者（方言と土俗 四ノ一）。

Xオホモノナイフ——石見で猥なる言を放つの意。

Xオガタリ——山形縣最上郡安東城では、山小屋では盛にオガタリをする、色話のこと。

Xハヘアナス——石巻で他愛ない話、猥談をふくむ。

〔天 上 胡 瓜〕

青森縣 八戸

昔研 二ノ四五二

天人女房から變化したものか、爐の隅に生えた夕顔が天に届き、それを傳つて昇るといふ。犬飼七夕などに近い。

大話は本格説話の一部の誇張からといふことを、可成り有力に證明するもの。



鹿兒島縣

〔天の河〕

甌島昔話集 一〇八

語り物としての形の面白さ、早物語に似る。

同書 二一七

〔豆子話〕

笑話化第二次のもの。東北特有かと思はれる。

青森縣

津輕口碑集 二五

岩手縣

津輕昔話集(川合氏) 九戸郡誌 四八四

豆を一粒見つけると(この點が、第一次の大話からの續き)それを炒つたり、はたいたり段々してから爺の禪でおろすが、大きな屁で飛んでしまふ。

これは地藏淨土から派生したもの、他に大話、又は早物語に屬するものがある。

岩手縣

紫波郡昔話集 二六

「豆こいつ」これは早物語に近く、語り方のみのかしき。同書

一一に「爺那のこばかま」江刺郡昔話 五一

早物語の口調は失はる。聽耳草紙 二二〇以下

地藏淨土と鼠淨土との結合。同書 五六四「爺婆と黄粉」をも參照。角館のものと半分以上共通。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一五四

この話の變化も大話である。土間で拾つた大きな豆を蒔くと、天まで伸びて云々といふ。

第二昔話號 七〇

「豆コ拾つて鼠コに呉だ話」

新潟縣

佐渡昔話集 一〇三

これは座頭の藝なること疑ひなし。

〔鼠 經〕

信心深い婆さんが寺へお經を習ひに行つた。和尚さんは佛壇の前で目をつぶつて考へたが一向考へつかない。ふと目をあけると鼠が佛壇の上をチヨロチヨロとしてゐたので「オンチヨロチヨロ」と言つた。すると鼠は人聲がしたのでかんだから「ソラふくだんだ(かんだの意)」と續けた。今度は鼠が逃げようとするので「逃げようたつて逃がしはせんど」と唱へた。婆さんは此有難いお經を忘れないやうにと途々唱へながら家に歸つた。處がその夜泥棒が入つて庭をちよろ／＼してゐると、婆さんはあまり一心だつたので「オンチヨロ／＼」と寢言を言つた。泥棒が驚いて壁の蔭にかくれると「ソラふくだんだ」と言ふので、是はきつと見

岡山縣

御津郡昔話集 八九

てゐるに違ひない。かうしてゐると命が無いと思つて逃げようとする、今度は「逃げようたつて逃がしはせんど」といふ聲がしたから、尻に帆をかけて逃げたとき。だからお經といふものはありがたいものだ。

「經文と泥棒」經文を教へるからといふので泊めた旅の者がこの鼠經を教へる。

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 四四番

「信心の功德」

大分縣 速見郡

昔研 一ノ五七二

「鼠經」〔例出〕

九州は大體この名で呼ばれてゐる。

熊本縣 天草郡

昔研 一ノ五二五

「葦北郡」

同書 一ノ三三四

全國にあり多分旨の運搬ならむ。にせ者の功名を主とするかと思はれる。

〔へやの起り〕

婆が息子にいゝ嫁をとつて喜んでゐたが、四五日すると段々嫁の顔色が悪くなつて、さつぱり元氣がない。婆が心配して譯を尋ねると實は尻を堪へてゐるのだといふ。そんな遠慮は要らないことだといふと、喜んでそれではとこいたのがひどいもので、婆はその風に吹上げられて天井で頭の皮を摺り剝いた。息子が歸つて來ると婆は相談して里へ歸すことにした。

鹿兒島縣

〔天の河〕

甌島昔話集 一〇八

語り物としての形の面白さ、早物語に似る。

同書 二一七

〔豆子話〕

笑話化第二次のもの。東北特有かと思はれる。

青森縣

津輕口碑集 二五

岩手縣

津輕昔話集(川合氏) 九戸郡誌 四八四

豆を一粒見つけると(この點が、第一次の大話からの續き)それを炒つたり、はたいたり段々してから爺の禪でおろすが、大きな屁で飛んでしまふ。

これは地藏淨土から派生したもの、他に大話、又は早物語に屬するものがある。

岩手縣

紫波郡昔話集 二六

「豆こいつ」これは早物語に近く、語り方のみのかしき。同書

一一に「爺那のこばかま」江刺郡昔話 五一

早物語の口調は失はる。聽耳草紙 二二〇以下

地藏淨土と鼠淨土との結合。同書 五六四「爺婆と黄粉」をも參照。角館のものと半分以上共通。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一五四

この話の變化も大話である。土間で拾つた大きな豆を蒔くと、天まで伸びて云々といふ。

第二昔話號 七〇

「豆コ拾つて鼠コに呉だ話」

新潟縣

佐渡昔話集 一〇三

これは座頭の藝なること疑ひなし。

〔鼠 經〕

信心深い婆さんが寺へお經を習ひに行つた。和尚さんは佛壇の前で目をつぶつて考へたが一向考へつかない。ふと目をあけると鼠が佛壇の上をチヨロチヨロとしてゐたので「オンチヨロチヨロ」と言つた。すると鼠は人聲がしたのでかんだから「ソラふくだんだ(かんだの意)」と續けた。今度は鼠が逃げようとするので「逃げようたつて逃がしはせんど」と唱へた。婆さんは此有難いお經を忘れないやうにと途々唱へながら家に歸つた。處がその夜泥棒が入つて庭をちよろ／＼してゐると、婆さんはあまり一心だつたので「オンチヨロ／＼」と寢言を言つた。泥棒が驚いて壁の蔭にかくれると「ソラふくだんだ」と言ふので、是はきつと見

岡山縣

御津郡昔話集 八九

てゐるに違ひない。かうしてゐると命が無いと思つて逃げようとする、今度は「逃げようたつて逃がしはせんど」といふ聲がしたから、尻に帆をかけて逃げたとき。だからお經といふものはありがたいものだ。

「經文と泥棒」經文を教へるからといふので泊めた旅の者がこの鼠經を教へる。

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 四四番

「信心の功德」

大分縣 速見郡

昔研 一ノ五七二

「鼠經」〔例出〕

九州は大體この名で呼ばれてゐる。

熊本縣 天草郡

昔研 一ノ五二五

「葦北郡」

同書 一ノ三三四

全國にあり多分旨の運搬ならむ。にせ者の功名を主とするかと思はれる。

〔へやの起り〕

婆が息子にいゝ嫁をとつて喜んでゐたが、四五日すると段々嫁の顔色が悪くなつて、さつぱり元氣がない。婆が心配して譯を尋ねると實は尻を堪へてゐるのだといふ。そんな遠慮は要らないことだといふと、喜んでそれではとこいたのがひどいもので、婆はその風に吹上げられて天井で頭の皮を摺り剝いた。息子が歸つて來ると婆は相談して里へ歸すことにした。



嫁が村はづれへ來かゝつたら、子供達が柿をもがうとして騒いでゐるので一發放つと、柿はばら／＼と雀が飛ぶやうに遠くへ吹落された。段々行つて川へ出ると、川中に米舟がつかへて船頭達がいくら竿を押しても動かない。「そんなものは尻の風ですらす」と言ふと、そんな事が出来れば中の米を皆やらうといふので、今度は烈しいのを一つして約束の米を取つた。

「尻びり嫁子」 委しいが「へやの起り」の落しは無い。  
岩手縣 農民俚譚 一一  
宮城縣 桃生郡 九戸郡誌 五七七  
栃木縣 郷土の傳承 二  
新潟縣 南蒲原郡 芳賀郡土俗研究會報 七  
〔例出〕 茂木昔話集 九一  
柿と米船と二段になつてゐるのは古風である。同書 一四七にもあり。  
加無波良夜譚 一三八

新潟縣南蒲原郡

尻話の一群が「竹伐爺」から成長した。その笑話化の道筋の一つがこれである。

長野縣 下伊那郡 昔ばなし 一一二  
「尻ひり嫁」 是は前半のみで梨を落す條なし。

青森縣

津輕昔話集 一一六

山梨縣 甲斐昔話集 一五四

岩手縣

津輕昔話集・村の話

早く尻口をとめると怒鳴つた話。

八戸

老媪夜譚 二四六

岡山縣 御津郡 昔研 一ノ二一ノ三五・四二  
へやの口合ひなし。

岩手縣

南蒲原のと似てゐるがこの方が整つてゐる。これだけの運搬は職業者で無くては出來ぬ。

廣島縣 安藝國昔話集 二一六・二一九  
前者は花嫁が吹上げられる。後者は普通の尻ひり嫁。

岩手縣

紫波郡昔話集 九二

長崎縣 島原民話集 二七六

「猫の眞似」の後段。

單に吹飛ばされたといふ處で終る話は、九州にも寒田話中にある。

「尻藝」 安藝國昔話集 二二二  
「誰だ」〔例出〕 藝備「昔話の研究」七六  
御調郡 之は尻たれ爺の逸話として方々に残る。その爺が京參りの留守番に頼まれて——等とあり。

結末、煎餅屋が賣りに來た話もある。

盛岡地方のものは、「へアゲタ」とはこれから來たといふ落しである。

竹伐爺からの發達と思はれる。

〔誰なら尻〕

尻たれこき爺の尻は「誰か／＼」と言ふやうに聞えるので、隣村の庄屋様で泥棒除けに備つた。夜になつて泥棒が入らうとする。「誰か誰か」と言ふので驚いたが、やがて尻と判つて奥へ入りしなに栓をして置いた。音が止んだので安心して千兩箱を盗み出して來ると、うっかり栓に蹴つまづいた。すると溜つてゐた尻が一時に出て、「誰か／＼」と言つたので泥棒は肝をつぶして、千兩箱を放り出して逃げてしまつた。尻たれこき爺は庄屋さんから大層な御褒美を買つたげな。

〔尻 放り話〕 (へやの起り、誰なら尻をも含む)  
爺様は蕎麥餅で腹が張り、尻に栓をかつて寝ると壓力でそれが飛んで雁に當たる。  
青森縣 五戸昔話 七ノ二  
雁取爺を笑話化したもの。

岩手縣 和賀郡黒澤尻町

廣島縣 聽耳草紙 五七一

山口縣 大島 尻ひりのわざ比べの話あり。大力話と似る。家をひり曲げ、ひり戻す。斧をひり飛ばして、歸つてゆく相手に打付ける。

「尻びり番人」

山梨縣 續甲斐昔話集 三六九

鳥吞爺も古い笑話か。



たので、女房も「お前がそれ程技倆のある人とは思はなかつた」と言つて夫婦仲よく暮した。

〔見透しの六平〕

格氣やみた亭主があつて、いつも外から歸つて来ると、「おい見届けたぞ、今日は誰それが来たな」といふのが癖であつた。それが又よく當るので女房も呆れて、なにこの嘘八卦と言つてゐた。すると仙臺のお城で千兩箱十箱を盗まれた。いくら詮議をしても判らないのでこの八卦の噂をきいて、重立つた家來衆が勢揃ひをして、迎への駕籠を持つてやつて来た。亭主は仕方なく度胸をきめて連れて行かれると、國境ひの峠で一休みした時にお侍が人拂ひをして、「さて八卦置き殿、お前が行けば金箱のありかも見現はされ、俺の首も胴にはついて居るまい。そこでお願いだが一箱は俺が貰ひ、一箱はお前にやるから、俺の盗つたことは黙つてゐては呉れまいか。不承知なら今此所でお前の命をもらふ」といふ。亭主は青くなつて承知し、「そんなら金箱はどこにある」と聞くと、お城の後の堀の泥の中に置いておいたといふ。仙臺につくと早速八卦を置いて、「二箱は西國の大泥棒が持つて行つてしまつたが、あと八箱はお堀に埋つてゐるから早く引上げろ」と言つた。(二箱は前夜のうちに侍と二人で取出して置してしまつた)人夫を入れてみると如何にも八つの金箱があつたので、殿様は大層喜んでお禮に千兩箱一つ呉れた。亭主が千兩箱を二つ迄持つて歸つ

岩手縣 上閉伊郡

「嘘八卦」〔例出〕

禮に又千兩箱といふ所が改作であらう。

「見透しの六平」

老嫗夜譚 一七四

高名の鼻利きとよく似てゐる。盗人白状の話等もある。これには火事をあてる條なし。

鳥取縣

因伯童話

「和尚と小僧」 戯れに八卦を置いたばかりに詮議を頼まれ、山中で迎への駕籠から逃げ出し盗人の内證話を立聞く。

鹿兒島縣

甌島昔話集 一七六

「偽せ八卦」 錫屋七兵衛御殿で、盗まれた黄金の罐子を探し出す。

七敵一擊譚と同系か。日本のは多く「高名の鼻利き」を伴ふ。是もかなり古くからか。

〔高名の鼻利き〕

水士の孫左衛門は貧乏であつたが、船出の前に「正月十五日に下るからその日に家に火をつけて焼け」と女房に言ひつけて出た。さて下りになつて船が向ふの港を出ると間もなく、孫左は船の屋根に上つて私の家が今焼けてゐる臭ひがするといふ。バカなことを——と言ふ親方と賭をする事になつて、焼けてゐたら親方の家をそつくり貰ふといふ書付けを取つた。船が濱へ着くと孫左の嫌が家が焼けたと空泣きしてゐるので親方は家を取られて了つた。これが評判になつて薩摩の殿様から、紛失の刀の詮議を頼んで来た。孫左は心配でたまらず甘酒を作つて神様にあげて半分も飲んでそこへ寝てしまふと、其處へ祝殿(神官)が来て「甘酒が飲んであるが又城山の狐の仕業だらう。殿様の刀をとつたのもあれだが、言へば俺が疑はれるから黙つてゐるのだ」と言ふので孫左は首尾よく刀を取返し、殿様に願つてこれからは一切鼻嗅ぎをしないこととして貰つた。

立身譚からの派生と見てよからう。

岩手縣

紫波郡昔話集 一八

「鼻利き」 嫌が小豆餅と酒を隠すのを既の梁の上から見てゐて

笑 話

是を嗅ぎあてたやうに言ふと評判になつて、長者の姫の病氣の因を嗅當てることを頼まれる。迎へが来たが長者方へ着いた頃を見計らつて家に火をつけさせ、一先づ大役を逃れたが、其夜青森權現におこもりしてお告げを受け、姫の病氣は蛇と蛙の祟りなるを知る。

怪我の功名でないのは作りかへか。

食物を嗅出す話は西洋にもあり、この話は多くは閨男の話と結付いてゐる。

福井縣 坂井郡

南越民俗 四號ノ二五

「天狗の掛算」 山で天狗の掛算を覚えて来たと言つて、女房の隠し事を言ひあて、殿に召される。

兵庫縣 多紀郡

民俗學 二ノ一二

島根縣 出雲仁右衛門話。女房の援助あり。 旅傳 三ノ九ノ一九

廣島縣 佐伯郡

藝備「昔話の研究」 五五

「鼻神話」 女房が木綿賣の婆とマナベを炊いてゐる。そつとその木綿糸を牛駄屋に投込み、あとで嗅出してやると「鼻神ぢや」と評判になる。狐の話を立てききしてお姫様の病の原因も嗅出す。今一話は、出雲の仁右衛門話と近く、發端は例話に相似し、呉服



やに頼まれて下女の盗んだ替を嗅出したり、又跛狐の話の立聞きもする。

勇をあらはす。

—福岡縣鞍手郡—

廣島縣

安藝國昔話集 一三五

岩手縣

柴波郡昔話集 五三

お萩を嗅出して有名となる。

三人聲の聲入りの時、馬に乗せられて「怖い」と叫ぶと、馬上で

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一

誰をうたふとは名人だとほめられる。

「かざみの名人」

阿波祖谷山昔話集 一七八

新潟縣 南蒲原郡 加無波良夜譚 二二二

鹿兒島縣

「偽せ八卦」の二「例出」

徳島縣 阿波祖谷山昔話集 一七

「偽せ八卦」の二「例出」

〃 沖永良部島 おきえらぶ昔話集 六九

福岡縣 鞍手郡 福岡縣昔話集 四九番

〃 沖永良部島

「見とほし童子」 發端は少し違ふが、倒れ狼(跛猿)の話から

福岡縣 鞍手郡 「榎木屋八兵衛」 「例出」 吉四六話にも小麥粉の大蛇退治の事

王様の寶物を嗅出す條は廣島縣のものに近い。

がある。

思はぬ手柄をした話。是が「への字の鐵砲」とも續く。

大分縣 速見郡 「麥粉で蛇を退治した話」 馬鹿のやうに思はれてゐる者が退治

思はぬ手柄をした話。是が「への字の鐵砲」とも續く。

して侍に取立てられる。

「運の良い俄武士」(尻矢)

長崎縣 壹岐島昔話集 二一八

植木山八兵衛は山で武士の死體を發見、それと服裝を交換して

「ぼら賣り吉五郎」 之は怪我の功名でどんだん殿様に取立てら

俄武士となつた。仕合ひを申込まれ、前夜手ならしの爲弓をやみ

れる話。

くもに射るとそれが盜人を射當てゐる。仕合ひで馬から落ちれ

ば雉子の巢の上で、雉子を手取りにし、怪物退治に行つて氣絶し

てゐれば怪物の方は八兵衛の持つて行つたハツタイの粉を食つて

「三年寢坊太郎の手柄」 三年寢太郎が薩摩に落ちのび、手柄を

死にかゝつてゐるので、蘇生して首尾よく退治するなど、數々の武

立てる話。求婚譚なし。

薩摩にてとあるは不思議。

地方叢談の例。

鹿兒島縣 川邊郡久志

〔雀とり話〕

鎌倉權五郎と偽つて、久志郷に下り、怪我の功名で武勇をあらは

雀を澤山とるには、朝早く生棒の葉を澤山バラ撒き、それには

す話。

少しづつ酒の粕を着けておくと、雀が来て甜め、酔つてそこへ寢

鹿兒島では何故か鎌倉權五郎といふ。

てしまふ。そのうち日が當つてくると、棒の葉は反りかへつて、

仕立屋武勇傳(一撃七敵)に近いもの。

くるりと雀を包んでしまふから掃き寄せて俵につめればよい。

をかしい話を何でもくつつけてしまふ傾向は、時間をとるための

秋田縣 角館民俗資料 五七・二七九・三一六

策か。

鼻を胡桃にみせかけて小鳥をとる法。

風經・誰なら屁の如く怪我の功名で盜人を走らせた博奕打が、

長崎縣 島原半島民話集 三〇〇

鎌倉權五郎と名乗つて怪我の功名で武勇をあらはし(運のいゝ俄

「雀を澤山捕るには」 「例出」 又鳩を澤山とるには豆一粒を糸

武士参照)又町で賣付けられた般若の面で博奕打を走らせ、金を

で結はへておけば、一羽が食べては糞と一緒に出し、それを又次

手に入れて長者になる(津輕昔話集 三六)など、怪我の功名を

のが食べて出して、珠數つなぎとすることが出来る。

主題とするものは多い。

大分縣 吉四六さん物語 八二

グリムの「一撃七敵」もこの系統の話である。これらは「愚か聲

酒の粕と柿の葉とどんぐりで小鳥を捕る。同書 八九には芝居を

話」にもなり得る話である。

只で見る法もある。

怪我の功名話の三人聲との關係。

手に眞黒に墨を塗つて出しておくと雀がとまるといふものもあるが

ユエの譯文 昔研 二ノ二五七参照

棒の葉、黒塗杓子の方が前かと思はれる。



〔まのよい獵師〕

ある貧しい獵師、子供が七歳になつたので、こかき祝をしなけれはならないので山へゆき、狸を見つけて撃つと、彈丸のあたつた苦しきまぎれに藻掻いて、山芋を澤山掘り起した。鴨を撃つて水中へとりに入れば袴の中へ鮒がいつぱい入つて來た。皆背負つて歸つて盛なへこかき祝をすることが出來た。

福岡縣宗像郡

此話が三河花祭の「翁聲入」にもあること。

三人聲入話に伴ふものあり。

岩手縣

紫波郡昔話集 一二

「三人聲」長女の聲は幸運にて、順々に色々なものを手に入れる。

”

紫波郡昔話集 五

「古河の幸太」

北上川の鴨を澤山手取りにして、鵜にはさむと、鴨は舞上つて奈良の大佛様の屋根の上へ幸太を落した。下へ飛下りると土の中へ潜り込み……今度は天に昇つて源五郎話となる。

岩手縣

膽澤郡昔話集

これは形やゝ變り、備後のことといふが怪しいものである。

日本童話集三四五・一五七

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一四

「鬼と山芋と栗」

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 八七

千葉縣 長生郡茂原町

南總の俚俗 九九

「まのよい獵師」 次々と獲物を得、鴨を生どりにすると飛んで五重塔の上へ運ばれ、飛下りたら目から火が出て塔は焼けた。

傳説叢書 二〇九

岐阜縣 吉城郡

手帖 八一

これは「頭の柿の木」と近し。

ひだびと 五ノ六

山梨縣

續甲斐昔話集 三六七

「殺生大當り」 鐵砲の臺尻を振りながら撃つと、彈丸がその通りに振られて、千鳥を描いて飛んで行つて十三羽の鴨に皆當つた

——といふのは「への字の鐵砲」である。

愛知縣傳説集 三六六

愛知縣 北設樂郡

「嘘こき新左の自叙傳」 この場合には「俺が」で話すが、花祭には「翁が聲入の時に」となつてゐる。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一一三

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 五三番

「落し話」 鴨を手捕りにすると、飛んで天王寺の塔へつれて行かれ、飛下りると齒が缺けてハナシとなる。

福岡縣 八女郡

福岡縣昔話集 一四一番

「間のよい獵師」

” 宗像郡

同書 一九〇番

〔例出〕

大分縣 北海郡

昔研 一ノ一八四

「藤太さんの獵」

同書 一九〇番

同縣

直入郡昔話集 一一五

よほど球磨の彦七話と近く、空とぶ條なし。

旅傳 一ノ三號

熊本縣 球磨郡

人文 一ノ一

「彌左衛門の斑鰻取り」

吉四六さん物語 一八八

左門「かはうそ」

昔研 一ノ八七

「鳥取爺」等の名で呼ばれてゐる。

〇参考

×鴨取り權兵衛の名、大正十一年刊童話寶玉集 下の五一三 備

後の國とも阿波國とも無し。

×顯昭古今集註九わたの原八十島かけての條、鳥の頭七十八母俄

笑 話

二二

子二頭云々。

〔源五郎の天昇り〕

母親の言ひついで茄子苗を買ひに行つた息子が、苗賣りの爺の

言ふまゝに百文でたつた一本の苗を買つて來た。高いけれど一本

で何千何百の茄子がなるといふから、この方が得だと言つて島に

植ゑて丹精すると、苗はずん／＼大きく伸びて見上げるやうな大

木となつて、美しい紫の花が雲が懸つたやうに咲き亂れ、やがて

實となつた。

七月七日になつた時、母親が七夕様にお供へするから茄子をも

いでお呉れといふので、息子は梯子をかけて茄子の木に登つて行

つた。登るが登るがとう／＼天上まで登ると、其處に結構な御

殿があつて、立派な座敷に白髪のお翁がある。お前のお蔭で毎日茄

子の御馳走になつてゐる。折角來たのだからゆつくりして行け、

と美しい二人の姉妹まで出て來て種々ともてなすので、息子は

い氣に打寛いでたんと御馳走になつてゐた。この翁は雷神で晝頃

になると虎の皮の褌をしめ、夕立を降らしに出るから手傳はぬか

と息子にいふ。娘たちも側からすゝめるので雨降らせ役を請合つ

て、雷神や娘たちが太鼓や鏡で雷鳴や稻妻をする後から走つて

行つた。下界では七夕なので村々は鎮守の祭禮の最中で、其處へ

二二



雨で大騒ぎであつた。そのうち息子の村の上に来た。祭に集つてゐる知人朋輩共をからかつてやうらうと、息子は翁や娘達に頼んでうんと太鼓を叩いたり鏡をひらめかしたりして貰つた。

息子は朋輩のあはてる様を見て大笑ひしたが、ふと気がつくとな娘達は熱心のあまり衣服がはだけ裾からけ眞白い脛が出たりしてゐる。それを見ると思はず氣拔けがして、雲を踏み出してどんと下界に落ちてしまつた。そして桑の枝に引掛つた。天の娘等はひどく息子を惜しがつたがどうすることも出来ない。雷神は娘達の心を察して「今後俺は桑の木の上には落ちぬことにしよう、あの息子が可哀さうだから」と言つた。雷の鳴る時桑の枝を軒に挿すのはこの爲である。

岩手縣

「桶屋の昇天」

岩手縣江刺郡 老姐夜譚 一四三

「雷神の手傳」

聽耳草紙 四七四

江刺郡昔話 九六・三三

「稲子澤長者のもとにゐる寢手間取りの若者の話」

八石山系、三三頁の分。【例出】

秋田縣 鹿角郡

昔研 一ノ二二三

「悪戯小僧」

長野縣

北安曇郷土誌稿 二ノ一五二

この話の發端を豆子噺にするものは八石山に限らず、角館の例は豆子噺の方に出ず。

徳島縣 三好郡

昔研 二ノ四二三

「花の都」三年寢太郎話のやうだが天昇りの要素を含む。

長崎縣 南高來郡

島原半島昔話集 一三・四六

「源五郎天昇り」「天人女房」後者は千匹の赤牛を埋めてその上に南瓜をまけば天に届くと天人女房の教へ。一匹足りなかつた爲もう一寸届かぬが天女が引上げてくれる。それから雨降らしの手傳ひ中落ちる。

九百九十九足のわらじのこと。奄美大島の天人女房の結末となる。

大分縣 速見郡

昔研 二ノ四四

昔源五郎といふ人があつて天に昇つて、雷の手傳ひになつた。

「此の笹の葉で水を撒き乍らついて來い」と言はれた。まき乍らふと下を見ると自分の村の田の上なので、笹の葉ではまどろくて變からこぼしたら、うんとこぼれた上、自分も雲から足を踏み外して落ちてしまつた。源五郎の田は洗ひ流されて大きな湖となり（これが琵琶湖）源五郎は鮎になつたといふ。

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四七一

「かうの鳥と海老と龜」

長野縣

北安曇郷土誌稿 二ノ一七九

正月松に入丈をつける謂れは天竺から大鳥が人取りに來るからといふ。

山梨縣

甲斐昔話集 七一

「世界見物」

静岡縣

静岡縣傳説昔話集 四四七

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ四一三

二話あり。

山口縣 周防大島

口承文學 八ノ九

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 八六

愛媛縣 北宇和郡

昔研 二ノ一三〇

「伊勢蝦の腰はなぜ曲つたか」

福岡縣 企救郡

福岡縣昔話集 一四六番

「鴉の世界廻國」鴉に海老に赤えひ。

大分縣 北海郡

昔研 一ノ一三七

「かうの鳥と海老と鯨」

長崎縣

島原半島昔話集 一二六

「鰐と海老と蛤」

長崎縣

島原半島昔話集 一二六

「鰐と海老と蛤」

二二三

「天人女房」から分化したものか。

どうして源五郎の名を思ひついたか。これも咄の者の名とすれば近江への影響は大である。

○参考

ユエ一八〇の豆の木に傳つて天にのぼる話。

〔海老と大鳥〕

昔大きな鳥がゐて、他の鳥から大きい／＼と褒められるので慢心し、諸國漫遊に出かけた。海の上を飛んでゐたが疲れたのでそこに出てゐた一本の杭にとまると「わしの口ひげにとまるものは誰ぞ」といふ。これが伊勢海老で話を聞いて、それなら脛程大きいものはあるまいと今度は海老が漫遊に出かけた。途中で草疲れたのである洞穴へ入つて休んでゐると「わしの鼻の穴へ入つた者は誰ぞ」といふ。よく見るとこれが大きな魚の鼻の孔で、是がくしゃみをしたので伊勢海老は吹飛んで、岩に打突かつて腰が曲つた。だから自慢をするものではない。

愛媛縣北宇和郡

由來譚を以て話を結ぶ趣味。

青森縣

五戸昔話 一一ノ二

「オッホ(鼻)の自慢」

笑話

二二三



熊本縣 蒼北郡

昔研 一ノ三三五

「鯨騒動」

なまこに灸のあとのあるわけ、鯨を助けるためにとあるが誤謬であらう。

鹿児島縣

甕島昔話集 二〇二

「海の世界」

”

高木敏雄氏傳説集 一二四

「叡山の蛙」

どこの話にも海老が必ず出て来るのは或は翻譯なるが爲か、又は鼻の穴から吹飛ばされて腰が曲つたといふ結末をそへる爲か。

○参考

×一休話 中ノ一六

×朝鮮民譚集 三〇二 これは或はこわれてゐるか。

〔力くらべ〕

もとの形があつたのであらうが、今は大話しか傳はらず。その一例は

唐の大力坊といふ大力持の所へ、日本の大國といふ大力持が力競べに行つた。すると大力坊の女房が出て来て、主人は留守だが

上つて慰んで下さいと云つて、一間四方程の火鉢をちよいと持上げて来て其處に置いて行つた。大國はその女房の力に驚いて、大力坊が来たらどんな目に逢はされるか知れぬと思つて大いそぎで逃げ出した。

大力坊はやがて歸つて来て女房から話を聞いて出てみると大國は影も形も見えなかつた。大力坊は、のがすものかと雲を起して一飛びに海岸までとんで来ると、大國は船にのつて日本へ渡らうとしてゐる所であつた。大力坊はその船に長い金鉤をかけて引戻さうとしたが、大國は鏝ですり切つて遁げた。さうしてやつと日本へ逃げ歸り、或村の寺へ駆込んで助けを求めた。和尚は井戸の釣瓶の中へでも入つて置れて居ろといふのでその通りにして居ると、大力坊は嵐と一緒にとんで来て方々探したあげく井戸の中を覗くと大國の影が水に映るので、そんな所に隠れてゐたのかとどぶんと井戸へ飛込んだ。大國はすかさず釣瓶からとび上つて石垣をがら／＼とつぶして井戸を埋めてしまつた。さすがの大力坊も出る事が出来ず、口惜がつて時々身動きするのが地震だといふ。大國は寺方のおかげで命拾ひをしたのでお禮として一生寺に仕へた。それから今のダイロクといふ名が起つたといふ。

青森縣

岩手縣紫波郡——津輕口碑集 六

日本の大黒と天竺の土用と。

岩手縣

紫波郡昔話 四二

「地震になつた大力坊」〔例出〕

” 上閉伊郡

聽耳草紙

「南部の生倦と秋田のブンバイ」

双方共死ぬ。にげ歸るとは云はず。世間話化の傾向か。

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三一

「コッバイと入道」

石川縣

江沼郡昔話集 一一七

息子と手合せをしようとして来てその親爺の大力に驚いて逃げ歸る。

” 能美郡

能美郡誌 九二八

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二四六

二話あり。その一は女房大力。その二は祈願して大力を授かり、勝負は無し。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 五九

静岡縣 榛原郡

静岡縣傳説昔話集・四四八

和歌山縣

牟婁口碑集 五四

阿波の力士が力競べに来たのを追返す話。逃げ歸る話とは系統別

か。

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一八三番

笑 話

笑 話

不動明王と青面全剛。

少しこしらへものか。

長崎縣

島原半島昔話集 一二八

「仁王とガイ」

鹿児島縣

喜界島昔話集 一二九

「力王の話」

沖繩縣

遺老説傳

○参考

「屁ひり競べ」島原民話集 二八四

〔騙しあひ〕

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一〇八番

中津の吉吾と小倉の吉吾との騙しあひ。

長崎縣

島原半島民話集 二二二

「仇討競争」二話あり。これは落語になつて今も人望がある。復

仇として騙した者の女房を坊主にする。

〔術競べ〕

昔京の三角、越後の三角、江戸の三角といふ三人の泥棒が或る大盡の家に押入つた。まだ何も取らないうちに若い衆が大勢で三



人を掴まへた。私共はまだ入つて来たばかりで何も取らぬのだから今度だけは許して下さいと哀願したが、いやどうしても赦すわけに行かぬと云つて承知しない。それでは面白い藝をやつて御らんに入れますから許して下さいと云ふと旦那も承知したので、三人は竹竿を一本借りて庭に立て、京の三角が先づとんびになつてその先へ止つた。次に江戸の三角が鼠になり、越後の三角が豆になつたので、鼠は豆を唾へてする／＼と竹竿の先へ上つて行くと、とんびがそれを唾へてどこかへとんで行つてしまつた。

——新潟縣南蒲原郡——

青森縣 八戸

昔研 二ノ四五〇

「魔法つかひ」

岩手縣

紫波郡昔話 一四六

「馬になつた若者」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一四八

「三人泥棒」〔例出〕

長崎縣

島原半島民話集 一八三

「どうもとかうも」

どうもとかうもといふ二人の醫者が、互ひの首をつぎ、それから首引きをする。

長崎縣

島原半島昔話集 一二九

「鳶と鼠」

鹿兒島縣 喜界島

島 二ノ四九二

力くらべ。年くらべなど、兄弟話との關係。

日本ではあまり發達して居らぬ。

今在るものは近代の翻譯か、或は笑話として始まるか。

○參考

クラウストン 上ノ四一三 西洋の例は詳し。

喜界島などの破片と見る外は無し。

〔どうも・かうも〕

是れは多分術くらべ話の笑話化ならむ。

童孟、孔孟二人の醫者の治療比べ。

初めは吸出し膏、次に首を切つて繼ぐ接骨膏、最後に力くらべで首引きすると双方首が落ち、どうもかうも仕方がないといふ落ちとなる。

——福岡縣築上郡——

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四七一

「どうもとかうも」

新潟縣

「ドームとコーム」

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 三六二

「ドウモイとコーモイ」

福岡縣 築上郡

福岡縣昔話集 二〇八番

「童孟と孔孟の話」〔例出〕

〔テンボ競べ〕

法螺吹きの名人が仕合ひに来て見ると相手は留守だつたが、その息子の法螺の巧みに驚いて退却するといふ話。

術比べ・力比べから。これも大話か？

青森縣 八戸

昔研 二ノ五〇六

「ほら吹きの子」

岩手縣

紫波郡昔話 二一五

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 四九八

「テンボ」

江刺郡

同書 一一六

「嬰兒子太郎」

エチコに入つて留守番の日本の法螺吹の子が大法螺を吹いて、唐から仕合に來たテンボ吹をへこますので、親は怖しがつて流す。

笑話

二一七

すると家にあつた生針を持つて行きそれで出世する。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八三・一六二

秋田縣 角館

角館民俗資料 一一一

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四七一

「テンボウ語り」

南蒲原郡

加無波良夜譚 七七

「てんぼ仕合ひ」

同縣

佐渡昔話集 一七八

「嘔吐きの名人」

末は俵薬師とつながる。

石川縣

江沼郡昔話集 一一六

尾張と南部と紀州の殿様のテンボ比べ。

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一〇七・二〇八

二人吉昔話。前者の前半は息子のテンボウ。

鞍手郡

福岡縣昔話集 六〇

親と子の話になつてゐるのは童子留守居の話の名残か。

朝倉郡

福岡縣昔話集 九五

これは破片。

長崎縣

島原半島民話集 二八五

「うばちぶくりん」



やはり白樂天型を存す。

長崎縣

(舊)壹岐島昔話集 一八二

「辨慶は人斬の名人」

追々と逸話風に語らうとするこし。

鹿児島縣

喜界島昔話集 一五三

「口賭け」

前半はへらぞ口の例なれど、續いて子供がテンポを吹くので驚いて逃げる。

歌賭け、口賭けも賭にあらずして、掛綱の掛であらう。ハナシといふ語はもとはこんな語藝を云つたのではないか。

鹿児島縣

甌島昔話集 一八七

「オーベ話」

○参考

×壽々葉羅井(落語八七九)長い刀をさす人の話。女房が取次ぎに出て云々。

×テンポウ物語 加無波良夜譚 一〇二

大話の事をいふ。

×ユヰ 一四三

〔大もの競べ〕(嘘の皮)

テンポ比べの二つの形。法螺の吹き比べ。「その皮をどうする」

「その太鼓を張る」「片方は何で張る」「その嘘の皮で張る」と

いつた様な話。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八五

「大きな大根の話」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一五七

四十里四面の家を建てたが、あんまり天井が高いので雁の通るために雁穴といふものが五つも六つもあけてある。屋根を拵へようと思つたけれども滅法高いので寒くて上れない、云々。

石川縣

江沼郡昔話集 一一六

みかんの大木に大馬の皮を張つて太鼓をつくり、大大根で叩けばテンポ／＼と音がする。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 六二

お國自慢。伊勢・美濃・三河・大津の人々、大木・大牛の皮・芋の蔓の長さなどを吹くと大津では大太鼓と云ふ。

其芋の蔓でしめる。とあるから古いもの。

廣島縣

安藝國昔話集 二四七

安藝國昔話集 二五一 のは猿三匹、古い事を云ひあひつことをするといふ古い話。

説教僧の譚案なる事は明らかである。

福島縣 築上郡

福岡縣昔話集 二〇三

三人の旅人の話。これも大猫の皮で太鼓を張るといふ。

鹿児島縣

喜界島昔話集 一三八

「三人の法螺」

〔長命競べ〕

岡山縣

御津郡昔話集 一一八

「大きい比べ」 その二

島原半島民話集 二八

長崎縣

「狼の栗拾ひ」

○参考

三匹の狼が只一つ拾つた栗を一番長命の者が食べるといふ話。

朝鮮 朝鮮民譚集 一九五・同 附録三三

〔嘘話〕(又夢話ともいふべし)

これも大話とよく似た成立ちにて、荒唐なる話の末を夢にする方法である。おとし話なども地口、口合以前のものは是であら

笑

話

話

話

話

話

話

話

話

話

話

話

話

話

〔無精競べ〕

辨當を肩からおろすのが面倒な男と、笠のひもを結ぶのを大儀に

思つて大口をあけて来る男と。

岩手縣 膽澤郡

紫波郡昔話集 七

「せつきき男」

岩手縣 下伊那郡

紫波郡昔話集 七

「かばねやみ」

長野縣 下伊那郡

紫波郡昔話集 七

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三

紫波郡のもの全くおなじ。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 四三三



「二人のづく無し」

福岡縣 久留米

「辨當と笠の紐」

○参考

島の町(安永五、近世文藝叢書 六)にこの話出づ。

〔無言くらべ〕

石川縣

「三つの梨」「梨ほしや」

朝まで黙つて居たものが梨をとる事にして、泥棒が入つても黙つてゐる。

愛知縣 名古屋

安藝

餅好き夫婦の無言の睦。

○参考

×朝鮮 朝鮮民譚集 二二六

×支那 昔研 一ノ四〇二

×沙石集 四ノ一オ 無言上人

×クラウストン 下ノ一五

〔長者の寶比べ〕

これも派生であらう。

山梨縣 西八代郡

〔寶比べ〕

長者は七つの倉に寶物をぎつしりと積み、貧しい男は七人の男の子を寶と云つて長者に示す話。

長崎縣 豊岐島

鹿兒島縣 喜界島

第一昔話號 八六

島 二ノ四二四

〔吝さ比べ〕

山梨縣 西八代郡

「しびれの藥」

”

「飯盗人」

魚を飯盗人といふこと。

筑後宮の陣

田斐昔話集 二四六

同書 一七二

話の世界(大正九・四)

〔こんにやく問答〕

これは今は落語家の種だが、もとはあつたのであらう。

山梨縣 西八代郡

「和尚と小僧」

無學な和尚と小僧、頓智によつて問答に來た僧を追ひかへす。

山梨縣 西八代郡

「啞問答」「菟菟問答」

長崎縣

二話あり。

これも座頭の作なるべし。

言葉の興に基くものは國際比較から除いて誤りないであらう。

相應に學問が無いとわからぬ話。こしらへものと思はれる。元の形があるらしい。

○参考

×支那 昔研 一ノ四〇二

×南方隨筆 二二三—二三

×朝鮮 朝鮮民譚集 二二八 附三七

〔三尺草鞋〕

これも方々に傳はる話。多分中古の説教者の作ならん。

石川縣

「仕事せず婆」 嫁が芋を積みながら居眠りして居ると、婆がそ

笑話

甲斐昔話集 二六八

横甲斐昔話集 三二二

島原半島民話集 二〇七

甲斐昔話集 二六八

横甲斐昔話集 三二二

島原半島民話集 二〇七

岡山縣 岡山歴史地理

備備「昔話の研究」 二〇八

山口縣 周防大島

廣島縣

うつかり爺とうつかり婆。二人がお互に見合ふといふだけで段々にはなつて居らぬ。

これは語り方の面白味をねらつたもので職業的練習を要する。

○参考

×日本童話集 六・八

「うつかり男とうつかり女」

之は或は何か古い草子にあるのではないか。

黄雀・蠅螂の話などから思ひついたか。

×備後神石郡では「耳なし草鞋」といふ。

〔三人泣き〕

無筆の婆と無筆の侍。そこへ惚格賣が來て共に泣く話。



岡山縣

旅傳 六ノ八ノ七三  
御津郡昔話集 七

〔醫者と駕籠〕

駕籠に乗つて見たい醫者が、のぞみ通りに乗つたが、道行く人々から死人・狂人・病人などと、間違へられて閉口するといふ話。  
山梨縣 西八代郡 甲斐昔話集 二七八

〔唐丸籠〕

どうでも駕籠で迎へに來いといふ醫者の所へ、唐丸籠を持つて行く。乗つて行くと重い各人だらうと人が云ふので、駕籠の中から各人ぢやないぞ、と怒鳴ると今度は氣狂ひだらうといふ。中の醫者はたまりかねて駕籠のまどから首を出して睨め廻し、この通り正氣だぞといふと、人々はさてはいよ／＼大氣狂ひだ、怪我でもしない中に逃げろ／＼と逃げた。

醫者も閉口して今度は窓もしめてじつと黙つて乗つて居ると、外では死人が行くと云ひ合つてゐる。醫者はもう二度と再び駕籠などへのものぢやないと云つた。

この形落語にあり。積重ねて行く興味から。徒然草の掘池僧正。

續鳩翁道話 一上(泉七六) 談義僧と駕籠。

〔三人片輪〕

或所に目腐れ、白雲たかり、虱たかりの三人の朋輩があつた。目腐れは目をこすり、白雲たかりは頭を搔き、虱たかりは背中をゆする癖があつていつも人に笑はれて居た。それで相談してこれからは一切その癖をやらない事に約束をした。

三人は黙つて爐にあたつて居たが、初めの中は我慢して居たが段々と居堪れなくなつて來た。そこで虱たかりは我慢出來なくなつて、「あれ／＼向ふの山を鹿が、斯うしてむつくら／＼通るよ」とうんと體を揺すぶつて衣物で思ふ存分背中を搔き廻した。する目腐れは、「ウン本當にさ、あれの逃げない中に俺は斯うして弓を引かう、もし外れたら又矢をつがへて斯うして射てやる」と云つて、幾度も幾度も矢を射る恰好をして目をこすつた。だが白雲頭は、「あゝお前等は、若しあの鹿が逃げたら残念だツ」と云つて、がつ／＼とこれも思ふ存分頭を搔いた。

——岩手縣上閉伊郡——

青森縣

津輕昔話集 三二・津輕昔話集

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 四九〇

〔目腐れ・白雲・虱たかり〕〔例出〕

福島縣 石城郡

磐城昔話集 七五・一六〇

廣島縣 高田郡

藝備「昔話の研究」一九〇

「目腐れ・鼻こげ・きつとう」の三人、及び「めちやひち・はなひち・できものひち」の三人の話あり。

香川縣 志々島

讃岐佐柳・志々島昔話集 一三二

〔三人片輪〕

是も身振り話なるべし。落語になる前は身振りは座頭の管轄であつたらう。

○参考

狂言三百番集 下ノ三七八 落語はやゝ是を變へたもの。

〔癖をやめる賭〕

長野縣 上伊那郡

有賀氏昔話

三人の癖の話で三人片輪に近い。二人の癖もある。

大分縣

吉四六さん物語 一二三

「まさかそんな事はあるまい」といふ癖でそれを云はせる爲に色々の話をする。

○参考

醒睡笑 五ノ二〇四〇 只今の御言葉百貫仕らうずる。

火の字を云はぬ例。ノメル・ツマラヌ等の例落語にあり。

〔長い名の子供〕

長い名の子が井戸に落ち、その名を呼ぶうちに死んでしまつた。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五〇八

岩手縣

紫波郡昔話集 一一三

盛岡

郷土研究 四ノ九號

上閉伊郡 二話あり。

聽耳草紙 五〇二

遠野

人文 一ノ一

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ三八二・四六七

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一〇三

富山縣

郷土研究 二ノ五號

加賀にもあり。共に纏子には短い名をつけるとあり。

長野縣

郷土研究 二ノ一・四號

纏母が悪意で長い名をつけるが、それが反つて殿様の御氣に入り出世する。

長野縣 南安曇郡倭村

歌謡頌聚 下

子守唄にあり。

同縣

伊那昔ばなし 八九

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 四三四

何故か井戸掘職人の子といふ。



栃木縣 芳賀郡 茂木昔話集 七四  
 岐阜縣 吉城郡 三話あり。 ひだびと 五ノ八  
 島根縣 邑智郡 第一昔話號 七三  
 廣島縣 安藝國昔話集 二三四

二話あり。共に井戸に落ちる話。

同書 二三七 に三人の子に「嬉し」「めでたや」「有難や」と名づける話あり。これも變化であらう。

岡山縣 御津郡昔話集 三五・八六  
 福岡縣 企救郡 福岡縣昔話集 一五四番  
 長崎縣 島原半島民話集 三〇三  
 江戸のものに近い。

同縣

(新)壹岐島昔話集 一六一

「長名の短命」

鹿児島縣

甌島昔話集 一八六

○参考

×土の色 五ノ四 日本童話集一八五 趣味の傳説三九二 見ゆ。  
 ×沙石集 八ノ七ウ 既に長い名の笑話はあり。

但し井戸に落ちたとは云はぬ。

早物語から出たものと認められる。

この名は屁言葉の如く比べて行くと必ず得る所があらう。言葉の面白味は昔の人の方がよく感じた。

〔土鼠の掣取〕(鼠とも)

聲入話の笑話化であらう。

形は動物物語だが實は智巧譚。又は言葉の巧みの大話。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一八五

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二一

長野縣 下伊那郡

昔研 二ノ三七

これは鼠。

昔ばなし 四二

上總

國民童話 九一

石屋職人がもとの石屋になる話。

周防大島

猫に名をつける話。

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一九七番

白いもぐらもちの掣取。

○参考

×中田氏 日本童話の新研究 三四〇

引朝鮮の奇談と傳説。

×沙石集 八ノ二〇ウ 下伊那のと全くおなじ。

×心學名治泉 二五九 引家財要道六。

×落語全集 七六五

×地藏舞の歌(岩手縣) 俚語集。

〔嘉兵衛 衛 鉄〕

嘉兵衛といふ百姓。鳥にかへい／＼と啼き立てられて怒るが、鉄を忘れた事に氣付く。すると鳥がアホ／＼と啼く。

——長野縣下伊那郡——

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ七二

「赤子だか」

鳩・鳥・雀の聲の笑ひ話。

石川縣

江沼郡昔話 一〇〇

「どうも・かうも」

小僧が醬油を買ひに行くと、鳥が五合カラ／＼となく、一升ぢやにと怒つて入れ物を投げつける。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 二一

〔例出〕

輕口であるが古いものであらう。

同書 三一

「後家のお久さ」

後家のお久さと蛙との對話。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 四五

「裸重兵衛」

博奕打と蛙との話。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一一

「嘉右衛門の鶏」

これはたゞ啼聲を形容した笑話。されども動物説話のやゝ是に近いもの、例へば瓜子姫の末段のやうなものが無かつたら考へられないであらう。

嘉右衛門といふ木挽は鐵砲打ちが好きで、木挽は放つておいて鐵砲ばかりかつき歩いてゐると、鶏が「オテツボー」とときを作る。

婆と娘とが嘉右衛門に叱言を云ふと、怒つて鶏を追まはす。鶏は

「バババババ」と婆様の悪口を云ひ、又「嘉右衛門嬢、嘉右衛

門嬢」と嬢の悪體もつく。皆怒つて家中で追ひかけて捕へて首を

しめると鶏は「コピキー(木挽)」と啼いて死んだ。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 八九

「蛙とはだか久兵衛。」

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 一〇番

「鹽賣と鳥」



福岡縣 朝倉郡

福岡縣昔話集 九四番

これも魚屋が相手。鵜と鴨と鳩。

鵜が「かをく」鳩が「ごろつこ」鴨が「ひーろたひーろた」と啼いて逃げる。

拾ひ物分配や入浴譚に近し。

長崎縣

島原半島民昔話集 二八二

愚か息子が「菜を賣りにゆく話」 鴨にからかはれる。

之は古くから童話か。

〔氣にかけ爺さん〕

長野縣

上伊那昔話(有賀氏)

芋植多・豆蒔き・大根蒔きに不吉なる事を云はれること。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 八

〔氣にかけ爺さん〕

はとかりさまときいて大根を蒔かぬ話。

二 眞似そこなひ

〔旅 學問〕(朱椀朱折敷)

旅で覺えて來た言葉を皆まちがへて、醫者の所へをかしな手紙を

かく話。言葉は土地毎に違つてゐるが、此話の無い地方はない。樹から落ちて血朱椀、朱折敷を出すことは一貫してゐる。醒睡笑以來の笑話である。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五〇八

同縣

津輕昔話集 九一

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 四九九

〔上方言葉〕

同縣

紫波郡昔話集 一二二

〔朱膳朱椀〕

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一九・追記ノ四

同縣

佐渡昔話集 一九五

石川縣

江沼郡昔話集 一一四

〔伊勢えびと稻荷の鳥居〕

長野縣

小縣郡民譚集 一八四

〔朱椀鹽しき〕といふ話あり。

下伊那郡

昔ばなし 六六

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 四一六以下二話

伊勢

國民童話 三五

丁稚が色々な人から教へられることを併せ唱へる。

兵庫縣 水上郡

旅傳 一〇ノ一一ノ六一

〔柿の木參詣〕

廣島縣

藝備「昔話の研究」 一三三

徳島縣 美馬郡

安藝國昔話集 二〇三

〔學者の文〕

昔研 二ノ三二

福岡縣 鞍手郡

阿波祖谷山昔話集 一二九

改造したものだが、なほ朱椀といつてゐる。

福岡縣昔話集 八五

佐賀縣

旅傳 一四ノ九號

現在でもまだ醒醉笑の頃のものを存する一例。

大分縣

吉四六さん物語 一七二

〔寒田話〕

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一五一

〔大和言葉〕

こゝでは赤いものは緋ぢりめん朱膳朱椀では無い。

新しい輸入だらうか。

平林とくつつけた話がある。依つて誓願寺派なることが判る。

何れも醫者への手紙となつてゐるわけ。

○参考

柳亭記(日本隨筆大成本 一ノ一ノ七三八)引

笑話

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一六一

〔粗忽六兵衛〕

長野縣

小縣郡民譚集 二五六

〔粗相惣兵衛〕

あわて者の男が伊勢詣りにと、辨當をもち旅差しを腰にはさみ笠を被り草鞋脚絆に身を固めて出かけた。途中まで來ると逢ふ人びとの笑ふので氣がつくと腰には揺木をさし、辨當は嫌の腰巻に包んであり、被つたものは箆で草鞋も脚絆も恰度にははいて居なかつた。仕方なしに辨當を開くと中には枕が入つて居た。寶錢を上げると、又餅屋に入つても失敗ばかり重ねて散々の體で歸つて來ると、又家をとりの家とまちがへたといふ話。

岩手縣

山梨縣西八代郡

〔仙北町のとんてぎ〕

紫波郡昔話集 五七

秋田縣 朝舞町

昔研 二ノ一二六

臥に入つて寝てゐる所を盗人に持つて行かれ、頭を剃られる。目

がさめて驚き、「あつ家稱ばした」頭をなでて見て「やつ俺でな

い」。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一六一

〔粗忽六兵衛〕

長野縣

小縣郡民譚集 二五六

笑話

二二七



長野縣 伊那郡

昔ばなし 二・三・九八

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 七四

〔例出〕

同書 七七に、縞の男を背負つた風呂敷に逢はなんだか、といふ話あり。

新作ならんも方々にできく。座頭の作か。

兵庫縣 赤穂郡

昔話採集手帖 八六

鳥取縣

因伯童話

出雲

出雲の童話(清水氏)

大分縣

吉四六さん物語 二五五

長崎縣

島原半島昔話集 一三八

〔言ひそこなひ〕

秀句咄の笑話化といふべし。

上總

南總の俚俗 九九

「年のクル／＼目が五十、縞の人間背負つた風呂敷はどこへ行きましたらうか。」

これなどは即興の記憶。

甲斐昔話集 七七 にもあり。

「味噌つけた馬」「馬の田樂」

「茗荷女房」南總の俚俗

〔酒かす食ひ〕

是も醒睡笑以後無限につゞく。

石川縣

江沼郡昔話集 九〇

〔籠屋の長兵衛〕

酒かす食ひが仲間に問はれて、三百メと答へて笑はれる。嬬に教はり次の日は三合といふが、「あぶつて食つた」といふので現はれる。

子供の言葉に托する例。蒲團は薬すべ。

〔唄があまる〕

「歩き淨瑠璃」語り餘したので家の前を通りすぎる。

「吉右話」 旅傳 一ノ三

家の前をロソクを持つて通る。 吉四六さん物語 三〇〇

露新輕口咄三、「こちの家はこゝなるに」といへば、「今這入れば小唄があまる」。

作りものならんも多くは笑話主人公に托せんとす。

〔茶 栗 柿〕

口拍子を賞玩したので演者は専門家であつたらう。段々と教訓話になつてゆく。

その例は

酢・栗・柿・茶の四品を賣つて來よと云ひつけられた番頭が、非常な早口な男だつたので町に行つて「すつくりかきちや」と呼んで歩いた。人々は何の事やら分らず買手もなかつたので一品も賣らずに戻つた。別々に云はなければいけないと云はれて今度は「酢は酢で別々、栗は栗で別々、柿は……」と云つて歩いたといふ話。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八五

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 七五

石川縣 能美郡

昔研 二ノ三七三

越中 「ダラノアンマ」

旅傳 三ノ二ノ七九

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 四四〇

茶ア茶・栗ア栗・柿ア柿 フンフ

方言の改訂を加へつゝ全國に分布するは運搬者のあつた證據と云ふべきか。

長野縣

小縣郡民譚集 一八六

笑 話

小豆島

小豆島民俗誌

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 五〇番

宗像郡

同書 一七九番

「吉右話」

旅傳 一ノ三號

「日當山」

同書 一ノ一一號

〔篩 古 金〕

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 四四四

「お茶賣と舗屋と古金屋」

新茶ア／＼、フルイ／＼、と呼び歩き喧嘩となり、そこに古金屋が通りかゝつて、最後に「フルカネ／＼」と三人揃つて歩き、仲よく商賣をしたといふ話。

〔ぐつの話〕(ぐつ問答・ぶつ話・ぐつ問答とも)

ぐつは鍋の粥の煮える音で、さういふ名の愚か息子がいつ迄も其音に返事をしたといふ話。其前後に寺の和尚を迎へに行く條、風呂を焚くとて法衣を焼く條、甘酒瓶の尻をおさへて居れといふ條など附加する。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五〇八

岩手縣 膽澤郡

黄金の馬 七〇



新潟縣 岩船郡

グスバダの話。

石川縣

二話あり。

長野縣

北安曇郡郷土誌稿 一ノ一九三

栃木縣 芳賀郡

飛騨丹生川村

こゝのは愚かな娘となつてゐる。

廣島縣

安藝國昔話集 二〇二・一五三

徳島縣 名西郡

美馬郡祖谷山

高知縣

旅傳 五ノ十二

「ブスケ」

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 一七一 一番

宗像郡

同書 一七六番

久留米市

同書 一七七番

長崎縣

島原半島昔話集 一四一

「ブツ」

五島民俗圖誌 二五四

越後三條南郷談 一二一

江沼郡昔話集 一四

北安曇郡郷土誌稿 一ノ一九三

二ノ一四八

茂木昔話集 七七

うつしばな 八五

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一四三

「馬鹿息子」 名はブツカタ。

紀州では時鳥の前生譚と結び付いてゐる。以てその著名察すべし。

和尚小僧の「クワンクワン」もこのブツカタ／＼から出たことは想像される。

福井縣小濱地方の和尚小僧話では、小僧がグツガラリと名をかへて貰ひ、夜和尚が酒を爛する音を聞いて呼ばれたと言つて起き出す（「和尚と小僧」 四二）

三 おろか村話

〔段々の教訓〕

「ぐつの話」と同系。「そんな時には何々と言ふものだ」の形、次々と縮尻つて行く面白さを主とする。

葬式——祝言——火事——鍛冶屋——牛の喧嘩

岩手縣 上閉伊郡 老嫗夜譚 二四〇

この話の順はやゝ無理。或は記憶ちがひか。

同縣 聽耳草紙 五二六・五二七・五五六

紫波郡昔話集 一四四

岩手縣

膽澤郡昔話集

宮城縣 桃生郡

九戸郡誌 四七二

長野縣

郷土の傳承 二

「入れ魂」

小縣郡民譚集 二一六

「世知原話」のうち。

〇参考

×趣味の傳説 二〇 のもの最も詳し、

×支那の例甚だ多し。昔研 一ノ四〇二参照

×ニュエ譯文 昔研 二ノ二五七 阿房のジャン。

長野縣

小縣郡民譚集 一七八

紙に用事を書いて息子に渡して父は出て行く。人が来て父は？と

聞くと袂を探して「無くなりやした」

山梨縣 西八代郡

上伊那郡史 甲斐昔話集 九三

これはやゝ詳しい。色々の形があつたのであらう。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 七六

和歌山縣 有田郡

有田郡童話集

これは破片。

鳥取縣

因伯童話

香川縣

小豆島民俗誌

福岡縣 浮羽郡

福岡縣昔話集 一三五・一七二

笑話

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 一八〇

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一八四

長崎縣

壹岐島昔話集 一〇七

〇参考

×趣味の傳説 二〇 のもの最も詳し、

×支那の例甚だ多し。昔研 一ノ四〇二参照

×ニュエ譯文 昔研 二ノ二五七 阿房のジャン。

〔愚か 俚〕

これにも古いものと新しいものとありと思はる。例へば買った錢を沼の鴨に投げたりするのは炭焼長者譚などの形である。

青森縣 津輕昔話集 五八以下

糸引合圖・おはぎは化物・澤庵で湯加減。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 五二七

段々しくじり話

同書 五三九

口上を口傳する話

同書 五四四

團子をウントロ

糸引合圖など。

岩手縣

紫波郡昔話 六二・四四・九〇



小豆餅は化物

紫波郡昔話 一〇一

終りに母との話を載す。この例他には聞かず。

糸引合圖

同書 一七九

團子といふ名を忘れる

同書 二〇三

節穴と柱かくし

同書 二〇七

友人の援助

同書 二一四

段々しくじり

九戸郡誌 四七二

山形縣 庄内

話の世界 一ノ七(大正八・十二月)

立谷澤與作の話として傳ふ。段々のしくじり。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七六

七話あり。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一九四以下

五話あり。一の粟をまくのを辭儀と思ふ例。

この例他では未だ聞かぬ。

石川縣

江沼郡昔話 八一以下

習つた智慧三話。團子を「フィットコサ」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二〇六以下

糸引合圖・お萩は化物・口傳聲

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 三七・二一六

「節穴」

團子をウントコ

昔ばなし 三八・一〇六

御馳走は化物

同書 四八

段々しくじり

同書 一一六

風呂の澤庵

同書 一二四

長野縣

火の用心札

小縣郡民譚集 一七七

ウントコシヨ

同書 二一四

風呂の澤庵

同書 二一五

北安曇郡

節穴・風呂の澤庵・團子

北安曇郷土誌稿 一ノ一九二以下

團子・舅の病氣

二ノ一五一以下

栃木縣 芳賀郡

團子・節穴・妻の眞似して着物を左前に・重箱のしくが牙をむく・

茂木昔話集 八三以下

饅頭が腹わたを出して死ぬ・甘酒の瓶

和歌山縣 伊都郡

口承文學 一〇ノ二二

鳥取縣 八頭郡

因伯民談 一ノ一ノ一七

「飛越し團子」

因伯童話 七九

廣島縣

安藝國昔話集 一九五

口傳聲・澤庵で湯加減・節穴

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一六七番

鎌の里へ行き、菊をほめる言葉で蕎麥をほめる。

新作話と見ゆ。

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 一八一番

「節穴にお禮」

佐賀縣 杵島郡

口承文學 一〇ノ一七

長崎縣

島原半島民話集 二六一以下

十一話あり。

鹿児島縣 肝屬郡

昔研 一ノ三四五

「飛越團子話」 が日當山家中の話となつてゐる。

吉四六さんになつた例もあらう。

喜界島

島 二ノ四三一

あいさつの段々しくじり

馬を死なせて残り多い、今日はやいてカツチイさせて下さい。

とあれば、死馬も食ひしなり。

自由に改作増補してゐる。それは職業者か否か。

聲話について注意すべき事は、もとはこれ外見愚かなる聲の、

實はすぐれてゐたことを説いた點。(紫波郡昔話 四四・九〇)

愚かなといふ事だけを説くのは派生であらう。三人兄弟の話と近

いこと。

〔口 傳 聲〕

馬鹿聲が挨拶を教はつて行つて舅の家で妙な事をいふ話。

岩手縣

九戸郡誌 四七一

舅禮の挨拶を雑魚釣りに尋ねると、「朝飯前にこればかり」と

いふ。

この話はまだ少しばかり「仕合せ話」に近くなつてゐる。この雑

魚は別の人が捕つたのだが、もとは聲が捕つて来たやうに話すも

のもあつたらう。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七九

飛騨 丹生川村

續飛騨探訪日誌 一三〇

○参考

×傳説民話考 三三三に「口眞似聲」の名見ゆ。

×狂言記にもあり。

×牛賞め・一つ覚えはこの系統か。

〔糸 引 聲〕おろか聲参照

岩手縣

九戸郡誌 四七〇

三つの挨拶の語を嫁に教へてもらふ。「禪と猫」



〔團子 聲〕

團子淨土と關係あるべし。

岩手縣

九戸郡誌 四七〇

宮城縣 本吉郡

郷土の傳承 二

〃 桃生郡十五濱

同書 一ノ一七九

大阪府 南河内郡

昔研 一ノ一ノ三八

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 一六九番

〃 八女郡

同書 一七三番

〃 久留米

同書 一七四番

〃 朝倉郡

同書 九二番

大分縣 速見郡

昔研 二ノ四四

〔餅は 化物〕

舅禮に行く愚か聲、「餅はモだからおつかないから餘り食ふな」と嫁に教へられ、本當におつかないと信じて、いろ／＼馬鹿な眞似をすること。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七九

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 二

大分縣 速見郡立石

昔研 二ノ四五

日向の高千穂の愚か聲話としてかなり詳しく述べられてゐる。女房が説明する條、くどくどとあり。

〔瓶と小石〕〔石と酒瓶〕

或時馬鹿聲が舅の家に行くとき舅は小豆團子を拵へて御馳走してくれた。その甘さが忘れられずに、聲は主人が寢靜まつてから晝間見定めて置いた戸棚から團子瓶を取り出し、頭を突込んで饜腹食つてから頭を抜かうとしたがどうしても抜けない。その中便所に行きたくなつて脚に入つて蹲んでゐると、そこへ舅がやつて来た。舅は何も知らず用を濟ませたが生憎カキギがなかつたので其處にあつた石を拾つて間に合せ、その石を投げると聲のかぶつて居た瓶に當つて瓶は壊れてしまつた。そこで二人は相談してお互にその事は喋らぬ約束をして置いた。或時親類に婚禮があつて舅も聲も招かれて行つたが、席上舅は謠を所望され「池の水際をつるかめは……」と唱ふと聲は怒つて「お前は石でケツ拭いた」と喋言つてしまつた。

岩手縣上閉伊郡

この話は自然に出来たものらしくは無い。座頭の作かと思はれるが、相當に古いものであることは知れる。

岩手縣

紫波郡昔話 二一七

例の上閉伊のものと似てゐる。

〃 上閉伊郡

聴耳草紙 五三七

〔小謔〕〔例出〕

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七六

岐阜縣

ひだびと 四ノ一〇ノ四一

「とろ／＼好きな男」 とろ／＼を盗食ひして擗鉢が頭にひつつく。

便所に隠れて居ると親爺が来て小石を拾つて用を足してから投げると擗鉢がわれる。互に約束して内證にしておく。以下無し。

これは舅と聲ではない。

廣島縣 山縣郡中野村

昔研 一ノ五六一

「鶴龜や」とうたひ出すと「石で尻をこくつた」とはやす。

長崎縣

島原半島民話集 二八六

話方の上手下手が問題となる話で、この點落語に近い。

古書にもあつたかと思ふ。醒醉笑か。

〔結 付け 枕〕

舅禮に行つたおろか聲、枕をはじめしてどうも外れるので禪で頭にしばりつける。見つけられて、(一)彼の村の習慣なりと言ひなすものと、(二)雉子を捕るまじなひなりと云ふものとあり。

笑 話

青森縣 八戸

昔研 二ノ五〇九

岩手縣

紫波郡昔話 四四・九〇・八

宮城縣 桃生郡北村

郷土の傳承 一

二三五

福島縣 石城郡

磐城郡昔話集 一七七

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

(一)の形、斯ういふ單純な形がもとはあつたものであらう。

ひだびと 四ノ二ノ二一

(二)の形、友人が相談して皆で泊りに行き、同様に禪で枕を結付けて見せる。

因幡佐治村 因伯民談 一ノ一ノ三八

因幡佐治村

(二)の例、但し話し方がかなりこわれてゐる。

愚か聲最後の勝利といふ點に異色がある。

陸中には「雉子を追ふ話」と併合せた例がある。

紫波郡昔話集 一一七の「頭さ枕」

三人聲と結び合せたもの。(八戸)

〔三 人 聲〕

三人姉妹の聲が同時に聲入りし、平常輕しめられてゐた一人が見事器量をあらはして他の相聲たちは面目を失つた。

これが馬鹿聲の起りらしきこと。



町の聲・里の聲・山の聲、嫁をつれて舅禮に来る。山の聲のみは土産なし。夜中に小用に起きて弓が掛つて居たから、ビュと放すと次の朝鶴が二羽落ちて居た。「今朝の大勝負は誰方」と舅がいふ。「おらへだべ」次の夜は縁側に汚いものをしておく。舅が又「今朝の大勝負は誰方」ときくと、町と里の聲は大いそぎで「オレデガス〜」。

幸運の磯人とのつなぎ目。陸中のものとも近し。  
宮城縣 桃生郡十五濱 郷土の傳承 一ノ一七七

三番目の愚聲の爲嫁が一心に雁に石を打つて捕り、門口にさげて置いて夫に「オレデガス」といはせる。あとは前のものと同じ。これでは愚か聲は却つて二人の方である。

愚かなる者の成功を説くのがもとであつた證據か。

○参考

朝鮮 旅傳 一三ノ七ノ二四

三人姉妹の末娘、暮の嫁となる。暮は二人の相聲と競技し、及第する。説明不足。

しかし少くとも聲入話の笑話が神婚譚の分岐點なることはこれで見察せられる。

〔愚か 嫁〕

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 五五五

二話あり。一は「オつけ言葉」

これはたゞ早物語の技倆を示すだけ。

二は「鷲言葉」

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七九

長崎縣

島原半島民話集 二七六

一は「よそ行き言葉」

二は「猫の眞似」「屁ひり話」につゞく

〔嫁に行きたい話〕

斯ういふ諷刺が田舎までも行きわたつてゐる例。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 五六一

その一は婆様は年とつて眼も悪いからと断れば「こりや向ひの山で赤蠟と黒蠟が角力してらでア」といふ。

同じ話は奥南新報「村の話」にも見ゆ。

その二はうちの娘はまだ子供で、と断れば席へ出て「あゝ今朝のしはれることは……十九にならでも手あ冷い」。

〔愚か 村話〕

「野間話」「増子話」「寒田話」「川津場話」「もくろじ話」「世知原話」「五箇庄話」「秋山話」「遠山話」等各地にあり。

宮城縣 玉造郡鬼首

郷土の傳承 二ノ八四

長野縣

北安曇郡郷土誌稿 一ノ一九二

「増間話」

旅傳 一ノ二五ノ三九

愚か村話は安房國瀧田村増間のことといふ。中に國引と似た話がある。

兵庫縣 養父郡

第一昔話號 六八

大屋の横生話

鳥取市附近

因伯民譚 一ノ三ノ一三〇

佐治谷話

山代の馬鹿話

第二昔話號 九〇

山口縣 岩國の奥の話。主として海を知らぬ者を嘲る話。

「もくろじ話」

狗留孫山下の李路子村の人を笑ふ話。愚か村話の一。蝶菜の内を臟腑だとして捨て、穀を食べたりする話。

山口縣 豊浦郡角島

この邊では中津の吉吾咄も有名。

笑話

座頭この邊に炭焼三五郎などを持來ること。

「野間話」

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 四一三

「寒田話」

豊前 筑上郡城井

第一昔話號 七八

福岡縣 京都郡

大正十四年四月(阪根道治郎氏)

福岡縣 京都郡 寒田村のことといふ。

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 二〇二番

「さーだ話」といふものあり。

「世知原話」

長崎縣

(新)壹岐昔話集 一〇七

此村の名は島には無いが北松浦郡にはある。

日當山の侏儒話

鹿兒島小學校編 「神話と傳説」

「日向山」

日向山といふ馬鹿な子供の失敗話で、馬鹿者のことを「ひなたやま」といふと。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一四二

薩摩の愚村話に「日當山の衆中」といふのがある。このシユジユを侏儒と解することとなり、徳田太兵衛(徳田武右衛門とも)い



ふ小兵なりし男の奇行として傳へてゐる。

これなどは起原を説明しうる。

○参考

續南方隨筆 一八八 平賀源内の話とつたふ。

〔風呂場の餅〕

宿屋でのしくじり話。風呂場の糠と鹽を田舎者が食ふので宿屋で餅を出して置いてやると、今度は外の人のするのを見習つて餅で顔を洗つた。

或は愚か聲の方が多くあらうが、澤庵と一つの話になつて居るものあり。

廣島縣

安藝國昔話集 二三九

九州

吉四六さん物語 九〇

寒田話にも同じ話がある。

○参考

寓言草(三十輯三ノ八二) 逸話として傳へらる。

風呂場の澤庵は既に醒醉笑 二ノ六九 にあり。

〔長頭をまはせ〕

手洗水をまはせと云はれて、長い頭の人を探し出して来て頭をま

はさせた話。

岩手縣 上閉伊郡

〔長頭廻し〕

徳島縣 美馬郡祖谷山

福岡縣 京都郡

〃 築上郡

この書に野間の話といふも一二あり。

〔引張屏風投團子〕

愚村の人々が旅の宿屋で屏風を扱ひかねる話。

福井縣 坂井郡

南越民俗 二ノ三

村長のする通りにする話で、「耳掛素麵とほり上げ團子には弱つた」といふ話。

長野縣 小縣郡

長村郷土資料 一一〇

馬鹿聲話。「首一卷素麵・投げ餅頭・パッサリ屏風で夜が明けた」と唱ひ乍ら歸つて来た。

千葉縣 山武郡千代田村

山口縣 山代

福岡縣

川津湯話

第二昔話號 九〇

第一昔話號 七七

〔耳掛け素麵〕(首掛け素麵)

おろか村の噂は轉用にて三人聲入の話の方がもとか。

岩手縣 上閉伊郡

聴耳草紙 五五二

投上まんじう・首まき素麵・之を愚か聲の話としてゐる。

富山縣

旅傳 三ノ二ノ八一

耳かけそば・投げ餅頭

長野縣

小縣郡民譚集 二二二

愚か聲の話にもなつてゐる。引張屏風の話もある。

山梨縣

甲斐昔話集 二三九

和尚小僧話の中にあり。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一三六

長崎縣

(舊)壹岐島昔話集 二〇

○参考

醒醉笑 なま彌二郎・ゆで彌二郎。

〔振り米〕

米の音を死にかゝつた者に聞かせる。  
大分縣南海部郡因尾にこの話がある。

〔正月知らず〕

長門豊浦吉母、及び國防室津附近にこの名の地あり。こゝでは正月に餅をつかぬ。猫を焼殺した崇り餅を搗いても猫の毛がまじつて食へぬといふ。

一説には愚か村話となつてゐる。正月二三日すぎから門松を賣りに来て賣れなかつた話。壹岐島昔話集 九に年木を龍宮に送ることあり。これなどもとの形か、笑話になるに適す。

〔雉子鳥〕

雉子を見本にさげて歩いて鳥は要らぬかとふれ歩く。人が買ふといふと之は看板だからと云つて本もの鳥を出して賣る話。

兵庫縣 養父郡大屋

第一昔話號 六九

大屋の横生活・雉と雀

鳥取市附近

因伯民談 一ノ四ノ一九三

佐治谷人の佐治谷話三

この外旅傳 一ノ三に吉右衛門話あり。

鴨と鳥・鯉と青大将・翠蝶の話など。

片眼の牛の眼に紙を貼つて「片目の牛」だと云つて賣る話。

徳利の中に小便を入れて、これは小便だからと云つてつひに飲ま



せた話。

いづれも雉子鳥から發達したのかもしれない。或は事實談らしくいふものもある。

〔座頭の卵〕

愚か村話。明らかに盲人の作並びに選擧である。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五一〇

座頭が小輕米に一宿し、蚊帳を吊つて寝ると「座頭が糞をかけた」といひ、饅頭を忘れて立つたら「座頭ア卵なして行つた」といふ。

武蔵五日市附近にも饅頭を座頭の卵だと云つた話がある。

〔かすの子〕

かすの子と云ふものは、竹藪に捨て、おいてふやけた所を食べるものと思つてゐる愚か村話。

滋賀縣 高島郡勸修村

昔研 一ノ四七九

「やまの子」

福岡縣 浮羽郡

福岡縣昔話集 一三四

「かすのこと田舎人」

〔松山鏡〕

始から笑話として傳はつてゐる。この話も引戻しであらう。鏡を知らぬことを趣向とする。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ一一ノ三一

「鏡の親父」 尼の仲裁は無し。

ぼさまの作意明らかなり。しかも主人公は孝行者といふ。町へ出て愚かな事をいふ條あり。「かみみせのところ」の前の型か。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 七六・一六一

「坊主裁判」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一六六

「尼裁判」孝行な夫が亡父の像と思つて買つて来た鏡がもつて、夫婦喧嘩となり、尼が仲裁をする。

「松山鏡」に何か今一つの話をとりそへたか。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ六

「尼裁判」孝行息子が殿様から褒美に鏡を買ふといひ、孝行が此處までついて来てゐる。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一一〇

長崎縣

島原半島昔話集 一三九

五箇庄話の中にあり。

○参考

×郷土研究 二ノ四七四・三ノ二八二

×鏡わり翁繪詞 歴史と國文學 二七號

×續鳩翁道話 一ノ下(泉 八四)

鏡を知らぬ國の人

×中田氏 日本童話の新研究 三五〇

印度にも、支那にも、朝鮮にもあり。輸入の證は、備はるといふ。

ふ。

×朝鮮 朝鮮民譚集 二三〇 附三八

尼の仲裁はなし。

×朝鮮の俚諺集附物語 三六四

×大平廣記 二六二引 北夢瑣言

×支那 昔研 一ノ四〇四

鳥獸草木譚

雀 孝 行

昔雀と啄木鳥とは二人の姉妹であつた。親が病氣でもういけな

鳥獸草木譚

いといふ知らせの來た時、雀はちようどお齒黒をつけかけて居たが、すぐ飛んで行つて看病した。それで今でも頬べたが汚れ、嘴も上の半分だけはまだ白い。啄木鳥の方は紅をつけ白粉をつけ、ゆつくりお化粧をしてから出かけたので終に親の死目に逢ふ事が出来なかつた。その爲雀は姿は美しくないけれども、いつも人間の住む所に住んで、人間の食べる穀物を入用だけ食べる事が出来るのに、啄木鳥はお化粧ばかりきれいでも、朝は早くから森の中を駈けあわいて、木の皮を敲いて一日やつと三四の虫しか食べることが出来ない。そして夜になると樹の空洞に入つて嘴が病める泣くのださうである。

青森縣津輕

青森縣 東津輕

津輕口碑集 一〇

南津輕竹館村

旅傳 三ノ二ノ三二

三戸郡階上村赤保内

奥南新報

八戸

昔研 二ノ五八〇

三戸郡

五戸の昔話

雀とテラツ、キの話の前に、猫が薬取りの鼠を捕つて食つたこと百足が足の数だけ草鞋をはいた事を云ひ、それでお釋迦様の臨終に間にあはなかつた、と。

親の死目を涅槃といふは何かの混用ならん。



岩手縣

九戸郡誌 四八八

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 一二三

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一四四

北安曇郡口碑傳説集 二ノ一六〇

「啄木鳥」

小縣郡民譚集 一六五

和賀郡東森村

動物文學 一七

「雀と燕」

東筑摩郡

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 四三

東筑摩郡

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一八三

雀と燕。雀は親の死目に逢つた賞はあるが、あまり急いで親の頭を蹴り、それから二足一度にとぶことになつた。

新潟縣 中浦原郡

高志路 一ノ一〇ノ四五

長野縣 南安曇郡年中行事 一五六

北魚沼郡

五倍子雜筆 三

南魚沼郡

昔研 一ノ四七一

「お釋迦様と雀と猫」

南安曇郡年中行事 一五六

石川縣

鹿島郡誌 九八〇

下伊那郡

昔ばなし 一二二

「雀とお初穂」

江沼郡昔話集 一一三

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二〇五

おはぐろの條無し。

「雀と燕と猫とみみず」

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三六九

東京府 北多摩郡保谷

民俗學 二ノ六ノ四五四

「生き物の食ひ糧」

昔研 一ノ三六九

千葉縣 安房郡

安房の傳説 一八七

釋迦の臨終に何を食べたらよから、と相談に行く。はじめは雀、最後はナベダango、又はケヤツ、キとも。蚯蚓は土食へ、蛇はけつくらへといふ話までつく。

昔研 一ノ三六九

丸村石堂寺仁王様の傳説。

静岡縣傳説昔話集 三七八以下

孝子談との混合であらう。

昔研 一ノ三六九

静岡市・志太郡・御前崎・小笠郡・遠江佐久間・濱松市などの例を擧ぐ。

静岡縣 静岡市・志太郡・御前崎・小笠郡・遠江佐久間・濱松市などの例を擧ぐ。

静岡縣 静岡市・志太郡・御前崎・小笠郡・遠江佐久間・濱松市などの例を擧ぐ。

静岡縣 静岡市・志太郡・御前崎・小笠郡・遠江佐久間・濱松市などの例を擧ぐ。

静岡縣 静岡市・志太郡・御前崎・小笠郡・遠江佐久間・濱松市などの例を擧ぐ。

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひだびと 四ノ五九八

の白いはその時の袴のあとである。

「雀と啄木鳥」

民俗學研究 二ノ九三七

川蟬は又きつゝきとも鶴とも云ふ。

朝日高根村

民俗學研究 二ノ九三七

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 一ノ四〇五

加茂郡

民族 二ノ四ノ一九八

親の死目に糸を首にかけて行く。

大阪府 泉南郡

口承文學 一一ノ二九

かせかけみみずとの關係。

雀と啄木鳥。雀は弟、テラツ、キは姉。雀は袴をかけたまゝとんで行く、首に白い輪のあるのは袴のあと。

○参考

和歌山縣 田邊

郷土研究 一ノ二三八

アイヌ民俗研究資料 一ノ二三

島根縣 松江

高木敏雄氏傳説集

雀と啄木鳥の話。鳥が同じ母をもつて居た時代に、といふ。入墨の水を頭上にまいて、母獸の死の床に駆けつけた雀は汚れてゐても穀物を食へ、啄木鳥は不孝だから虫ばかり食ふ、と。

山口縣 周防大島

口承文學 一一ノ一七

愛媛縣 三豐郡志々島

昔研 二ノ五七五

福岡縣

豊前民話集

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ八一

「お釋迦さんと雀とつばせ」

昔研 一ノ八一

鹿兒島縣

民俗學 二ノ四五四

八代郡

民俗學 二ノ四五四

喜界島昔話集 一四五

喜界島昔話集 一四五

「雀と川蟬」

喜界島昔話集 一四五

雀と川蟬は姉妹。親の臨終に雀は織りかけの襪の白糸を首にかけ

て行く、川蟬は立派なものを織り上げて美装して行く、親の遺言

で、雀は高倉に住み米を食ひ、不孝者の川蟬は虫を食ふ。雀の首

時鳥と兄弟

親子三人の時鳥があつた。兄は生れて間もなく盲目となつた。

母と弟とは毎日美味さうなものを探して来ては兄に食べさせて居

ると、その中母が亡くなつた。弟はそれからは自分が木の實の皮

や草の根の尻尾などを食べて、いゝ所を兄にやる様にして居たが

兄は段々ひがむ様になつて、或日遂に弟の咽喉を突いて殺してし

まつた。すると今まで見えなかつた眼が急に見える様になつて、

弟の咽喉からは逆も食へさうも無いやうなものばかり出て居て、



自分の食べて居た様なものは少しも見えなかつた。兄は大變後悔し悲しんで死骸にすがりついて「のどつつきつた〜」と叫んでのどが破れ、血を吐き〜啼きつゝけた。  
之を見兼て神様が、これから毎日朝から晩まで一日に八千八聲鳴いて、弟にあやまつたら弟も許してくれるだらうと云はれた。それから時鳥は「のどつつきつたよ〜」と咽喉から血を吐くまで鳴きつゝけるのだといふ。

岩手縣 氣仙郡 方言と土俗 八ノ二四  
イ 姉妹と山芋。殺されるのは姉で郭公となり、妹は時鳥となつた。  
ロ 繼母に虐められる娘「マツチャキタケド」と啼く。  
「郭公鳥と時鳥」  
これも姉妹で腹を裂かれるのは姉。  
秋田縣 角館民俗資料 八一

青森縣 八戸 昔研 二ノ五八一  
同縣 五戸の昔話 九一

岩手縣 九戸郡長田村 方言と土俗 六

悪いのは弟。薯のことで兄を疑ひて殺す。兄の魂も鳥になり、弟も探しに出て時鳥となり、アッチャトンヂツタカ、コツチャトンヂツタカとないた。仍て時鳥を「アチャトンヂタ」と呼ぶ。  
岩手縣 九戸郡誌 四七五

この二話とも古い形と思はれず、聲によつて色々改作する。  
山形縣 北村山部 昔研 二ノ二八二  
他の地方で山芋とあるを此處では「ホド」といふ。兄が弟を疑つて腹を見る。  
宮城縣 桃生郡 郷土の傳承 三

「不如歸」 岩手郡平館 高木敏雄氏傳説集 二五七

「上閉伊郡」 遠野物語 三九

郭公と時鳥は姉妹。妹は疑ひぶかく、芋の事より姉を殺す。殺さ

宮城縣 桃生郡

兄の方が弟思ひで、弟は芋の疑ひにより兄を殺す。その罰で弟は時鳥となり「ポトサケタ〜」となく。

長野縣

北佐久口碑傳説集 二一六

「弟戀し」

福島縣 磐城昔話集 八六・一六四  
新潟縣 北魚沼郡 五倍子雜筆 三

南蒲原郡

加無波良夜譚 七三

「ほととぎす」

中蒲原郡 高志路 一ノ七ノ四〇

南魚沼郡

昔研 一ノ四六九

「ほととぎすの由來」

親子三人。初めから時鳥と云ふは前生譚の變化か。

兄は盲目。弟を殺して隣の人に見て貰ふ。その罪で鳥となり「オト〜ツツキツタカ」と啼く。八千八聲なくと青虫三四が食へる。

これも自然薯、弟を疑ひて殺す。兄は鳥に化してオトノドツツキツチヨ（弟咽喉突ツ切つちよ）と晝千聲夜千聲鳴いて弟の菩提を弔ふ。それで餌を探す暇なく、咽喉が破れて血を吐くの百舌が隣れみ虫や魚を木に貫いて食はず。

石川縣 北安曇郡 小谷口碑集 一二六

北安曇口碑傳説集 二ノ一五八

兄は盲で、山芋の話は無けれど食物を疑ひ、弟を殺す。その罪で兄は鳥となり、ホンゾンカケタカ、オトトコヒシと一日千聲啼かねば水が飲めぬと。

千葉縣 食物の疑ひで親を責め殺す不孝者。兄弟と云はぬ一例。  
靜岡縣 加茂郡 昔研 一ノ四〇五



複合の例。

静岡縣 加茂郡三濱

静岡縣傳説昔話集

弟は百舌になつて虫を取つてやる。

同郡下河津・富士郡田子浦・静岡市・磐田郡佐久間等に各々この話ありて載す。

三河

三州横山話

愛知縣

遠江童謡集 四〇

岐阜縣 大野郡上枝村

ひだびと 四ノ一一

益田郡高根村

民族學研究 二ノ四ノ九三三

大阪府 泉南郡

昔研 二ノ二三三

兵庫縣 城崎郡

昔研 二ノ四二〇

「芋掘り鳥」

親を疑ひて殺した子、水がのみたくても火が燃えて居るやうに見えて飲めない。

香川縣 小豆島

第一昔話號 七〇

愛媛縣 北宇和郡下波村

昔研 二ノ一三〇

「デシコシ」

兄弟で無く和尚と小僧。小僧を和尚が疑つて殺し、自ら鳥となり

デシコシ／＼と鳴く。

デシコシは梟ならん。

大分縣 宇佐郡

第二昔話號 九

「かつぼう鳥」

弟の名をかつぼうといふと。

長崎縣

豊後方言集 三ノ六〇

「時鳥の話」

壹岐島昔話集 三八

時鳥の兄弟で、兄は盲目。その疑ひを悲しんだ弟は、井戸に入つて死ぬ。兄はひもじくて弟を呼ぶ。「弟居るか／＼」と。

長崎縣 對馬

旅傳 二ノ九ノ一二

〇参考

×漫遊人國記 四二八

×生蕃傳説集 四一三以下兄弟姉妹鳥となるもの多く、その或者は芋のこともあり。

×雲錦隨筆（日本隨筆大成本 二ノ一六）

×雲錦隨筆（續群書類從 一七ノ二一五）

×漢鹽草、郭公はもと鵲、鵲はもと時鳥。

×鶉の早賣の圖

×入雲御抄 鶉の條

×類註密勘 一九 もず・ほととぎす名を代へしこと。百舌はもとと香縫ひ。

×倭頼口傳抄（續群書類從 一四）

×古名録引 髓腦抄

×雜和集 中

昔此時鳥佐宇里といふ人にてありけり。香をぬうて賣る人なり。

「時鳥」といふ人來て、香をとりて代りをなさず。二人ながら死して後鳥となる。佐宇里はホトトギス、時鳥は鶉となれり。

さて昔の香の代りを乞はんとてクツヲナセ／＼と鳴くを時鳥といへり。

×江談抄 三名を代ふること。

×半日閑話（日本隨筆大成本 一ノ四ノ三一九）

×伊豫でコツテ鳥といふこと。

時鳥と繼子

繼子が繼母にいちめられて時鳥になつたといふ話。「時鳥と兄弟」参照

弟」参照

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七

静岡縣 周智郡

静岡縣傳説昔話集 三五九

その一は時鳥は百舌に弟をとつて食はれた。故に「弟を返せ返せ」となく。時鳥の出てる間は百舌は出ず。

その二は百舌に弟を殺され「弟戀し」と鳴く。百舌は罪ほろぼしに、木へ鳥や虫をさして兄の時鳥に與へる。

静岡縣 磐田郡佐久間

静岡縣傳説昔話集

百舌に弟を取られた兄が、時鳥となつて「弟来い／＼」と探して歩く。故に時鳥の居る間百舌は居らぬ。

静岡縣 磐田郡佐久間

静岡縣傳説昔話集

昔此時鳥佐宇里といふ人にてありけり。香をぬうて賣る人なり。

「時鳥」といふ人來て、香をとりて代りをなさず。二人ながら死して後鳥となる。佐宇里はホトトギス、時鳥は鶉となれり。

さて昔の香の代りを乞はんとてクツヲナセ／＼と鳴くを時鳥といへり。

×江談抄 三名を代ふること。

×半日閑話（日本隨筆大成本 一ノ四ノ三一九）

×伊豫でコツテ鳥といふこと。

時鳥と繼子

繼子が繼母にいちめられて時鳥になつたといふ話。「時鳥と兄弟」参照

弟」参照

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七

和歌山縣 那賀郡

郷土研究 四ノ四一一

日本昔話集 一〇

旅傳 四ノ六ノ三四

鳥獸草木譚

二四七



岩手縣 氣仙郡有住

方言と土俗 八ノ二四

繼娘が父を迎へに町に行き、逢はずに歸つて叱られ、啼ながら鳥になる。「マツチャイツタケド〜」と鳴く。

長野縣 南安曇郡

第一昔話號 五二

兄弟が鳥になる。

○参考

配志和の若葉 七七

### 時鳥と小鍋

時鳥が文學に多く出て来るのは、民間文藝に多く出る爲。

青森縣

津輕口碑集 一五七

岩手縣 神貫郡

口承文學 一一ノ四

「ホテウ鳥」

繼母に憎まれて庖丁を隠され、その魂が「ホチウトテダカ」と鳴くといふ。

○参考

袋草紙 續群書類從 一六ノ八一五

配志和の若葉 七七

兄弟二人。兄は繼子、弟小鍋焼をして食ふ。兄の歸りて覗くを

避け、そこち飛び物蔭にて一人食ふうち、背中裂けて死ぬ。其靈時鳥となり「アツチャトデタ・コチャトデタ・ホツトサケタ」と啼く。

### 片足脚絆

昔親子二人あつて子供の名を郭公といふ。父がある日山から疲れて歸つて見ると、子供の郭公の姿が見えない。驚いて脱ぎかけた脚絆を片方だけつけて飛出し、「かつこう〜」と呼びながら山や谷を尋ねて廻つたが見つからない。遂に根氣盡きて行倒れ、この鳥になる。郭公の片脚が黒いのはそのためである。

福島縣 石城郡

—— 福岡縣筑紫郡 ——

廣島縣 佐伯郡

磐城昔話集 八七

山口縣 周防大島

藝備「昔話の研究」 一三六

「長吉来い〜」と鳴く。

口承文學 一〇ノ三五

福岡縣

九州民俗學 一

このカッポイ話は「繼子と笛」の話に續く。

豊前民話集

京都郡

寶滿山の郭公は片脚が黒いといふ。子を喪つた狩人が、片脚の脚

絆を脱ぎかけて尋ねて歩き鳥となるといふ。

東國東郡にも之と同じ話あり。糸島郡雷山でも。

福岡縣 筑紫郡 (例出)

昔研 一ノ四〇六

熊本縣 玉名郡

同書 一ノ一七三

「カッポン鳥の由來」

○参考

×丸龜では「オテツ」「オカツ」の二人の娘を尋ねあぐみ鳥となつた父親が「テツチヨ・カツチヨ」と啼くといふ。

×土佐壽原村でもガッポイは片足に羽生え、他の一方には生えて居ぬといふ。

×静岡縣周桑郡多賀村三津屋で時鳥の啼聲を「スッポイカッポイ」

×郭公の片脚黒からずとも惟しむに足らず。想像上の鳥なれば。

×廣文庫 一五ノ九四八 引温故目錄 一三

×アイヌにもこの話あり。郷土研究 二ノ一六一

ヨシトク

ヨシとトクといふ二人の娘を海に失つて、母は悲しんで鳥となり今もヨシトクと啼く。

廣島市

安藝國昔話集 一四〇

鳥歌草木歌

「梟と要七」

要七といふ息子を失つた母親、白黒の足袋を片足づゝにはいて野山を探し廻り、死んで梟となる。

香川縣 小豆島

第一昔話號 七〇

「梟と姉妹」

小豆島では梟をヨシトクと呼び、二人の娘を失つた母が死後梟になつて探し歩いてゐるといふ。

長崎縣

五島民俗圖誌 二三一

下五島にも「ヨシトクカッポ」の話がある(福江村郷土誌)。有川ではヨシカカシカと啼くヨシカドリといふのがあり、青葉づくといふ。

長崎縣

壹岐島昔話集

「クオックオー鳥」

### 郭公と母子

長野縣

北安曇郷土誌稿 二ノ一五九

母は子が背中を搔いて呉れぬので、崖で背をこすつて居て谷川へ落ちて死ぬ。子は悔んで郭公となり「カコー〜」と云つてゐるといふ。

二四九



千葉縣

南總の俚俗 一・七

クラといふ女、田草をとつて居る隙に鶯に子をさらはれる。片方だけ股引を穿いたまゝクラッコ〜と鳴く鳥となつた。

京都府 南桑田郡 口丹波口碑集 九六  
關古鳥。話は長野縣のものに似る。

郭公と繼母

岩手縣 上閉伊郡

遠野物語 三八

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 五七

「かつこう鳥」

和歌山縣 那賀郡鞆浦

土俗と傳説 二ノ五二

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ一七二

「カツボン鳥の由來」

長崎縣

五島民俗圖誌 二三〇

獵師と犬

歸らぬ夫を尋ねる妻が、山で別々に死ぬ。シロベン・黒ベンの二頭の獵犬も鳥となり今でもシロベン・黒ベンと啼いてゐる。此話不思議に廣く行はれる、會津より豊前まで。

福島縣 會津

話の世界大正九年六月號

野鳥雜記 九四

獵師の子二人は、父を山に尋ねて歸らず、鳥となり「モナクナ」と鳴く。二人の名が元七黒七。

廣島縣 佐伯郡

藝備「昔話の研究」 三八

トトボ。繼母に追はれて奥山へ入つた繼子のトトボを、父親が尋ねあぐみ、鳥となつて今も「トトボ〜」と啼く。

豊前小倉

新編芭蕉俳諧研究(小宮氏)

時鳥が「獵師戀し、黒戀し」と啼くといふ。

大分縣 日田郡

豊後傳説集 一一八

五和村内野狩倉 春里長者屋敷傳説。長者山中の大木を伐り、木精に崇られ一家死絶えて荒れたス家に末娘一人残る。筑後の勇士草野太郎、小黑・眞黒の二犬を連れ娘を救ひ出し妻とする。

大分縣 下毛郡耶馬溪

郷土研究 三ノ三六八

父を尋ねる娘、鳥となつて「獵師來い、黒來い」と啼く。

雲雀と借金

雲雀がお天道様に金を貸した。後にお天道様が出世して天に昇つてしまつたので、雲雀は催促に空へ昇つて行くと、お天道様に

元金だけは返すと云はれて、リートルリトルと云ひながら降りて來る。といふ。

秋田縣角館

旅傳 三ノ一七二

青森縣 南津輕郡竹館村

雲雀は博奕打。多土の中で鼠に八百負けた。それを返したが鼠はまだ受取らぬから返せと催促する。それで地上に居られず天で啼くといふ。

青森市附近

野鳥 四ノ三

南津輕のものには同じ。

青森縣 北津輕郡

土の香・昔話採集手帖 九〇

八戸市

雲雀と鶉の話。鶉は貧乏で始め「ノロスキ」に金借りに行つたが眼が光つて居て怖しく、雲雀から借りたが返さない。雲雀は高い空からトテカバトテア、借金ゼニシアへと催促すると鶉は「タルシ、トテカハエ」と啼く。

又一説に

雲雀が鶉から粟を借りて返さぬ。催促をうけて、十五日か二十日か、ジョウヤ・ジョヤジョヤと鳴くと鶉は怒つて「トテカハエ」といふのだと。

岩手縣 稗貫郡

口承文學 一一ノ四

雲雀と鶉。雲雀が貸してある。鶉は苦しんで「ググツウ〜」、雲雀は「質トル、妻トル、子トル」と啼くさうだ。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 七八

〔例出〕

静岡縣

静岡縣傳説昔話集 三八二

富士郡

雲雀はもと博奕打で負けてばかり、日に一歩づつでも儲け度いと思つて居たが、果せず遂に鳥になつた。それで日一歩々々となつていふ。

庵原郡

ひばりの鳴聲「粟三斗借した、さあさあよこせ、さあよこせ」

静岡市

此鳥は高利貸の生九代りで、「利をよこせ、元よこせ」となくと云ふ。

岐阜縣

飛騨の鳥 一六六

ヒイチブ〜と啼く。

和歌山縣 日高郡矢田村

民俗學 二ノ六一〇

暮が雲雀から五斗の米を借りて返さず、春になつて雲雀が一石を請求すると暮はゴト〜と鳴き、雲雀は「リニリークダ、リニリークダ」と離かぎり叫びつゞけて舞上る。



大分縣

豊後方言集 三ノ五七

宮崎縣

日向の言葉

雲雀が借した粟を催促して、「ケッファレ〜」(今日返せの意)となくと、鶉は是に答へて「ツクツチャロウ」と鳴く。

○参考

×アイヌ民俗研究資料 一ノ二六

借りたは鼠、貸り主は天の神様で雲雀はその催促にやられる。

柏の葉が落ちたらと鼠が云ふが、柏の葉は落ちないのでいつも

その上に來てなくといふ。

×旅傳 四ノ六ノ三四 アイヌに雲雀が鶉から粟を借りた話あり

といふ。

水が飲まれない。  
之は破片である。

水 戀 鳥

母と子の二人暮しがあつた。息子が言ふことを聞かないので、母親は心配して病氣になつた。水が欲しいと云つて息子に頼むが汲みに行くのを嫌つて圍炉裏の燃えさしを一本抜いてやつた。母親はそれを見て急に死んだ。息子は驚いて鳥になつた。鳥になつた息子は咽喉がかわくので水を飲みに行くが、水が眞赤な火になつてどうしても飲むことが出来ない。それで雨がふると少しづつ飲んで命をつないで居るので「ふれふれえ、〜」と鳴いて雨を呼んでゐるのだといふ。(この鳥をみやましようびんと云つてゐる)

雲 雀 牛 飼

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 一二五

雲雀は長者の家の馬飼重、水を呉れるのを忘れて馬が死ぬ。

「水はほんとに呉れたんね」と云つたといひ啼聲と云はず。

廣島縣 安藝郡上浦刈島

安藝國昔話集 一四二

雲雀が人間であつた時、牛馬を飼ふ。或る家に奉公し、牛馬に水をやらなかつた罰で雲雀になる。水がほしくても火に見えるので

それを地獄鳥。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四一三

「鉦打鳥と地獄鳥」

前半は釐福米福。繼娘は親の死水をとつて歎いた餘り鳥となり、

鉦打鳥となつてとんで行く。本子は親の臨終にも來ず、咽の病となり水がのみたい〜と云ひ乍ら咽から胸へ眞赤にやけて死ぬ。

それが地獄鳥。

埼玉縣 秩父郡大瀧村

昔研 二ノ一二九

「ふれふれえの話」(例出)

神奈川縣 津久井郡

相州内郷村話 六二

一名「博勞の蟻」と稱する由來話。

静岡縣 安倍郷大川村

静岡縣傳説昔話集 三八七

親の大病に世話もせずお化粧ばかりして居たのでその罰でこの鳥

となり、水が呑めないで雨水を飲む。

” 周知郡

親にそむいた罪で、或は又親不孝の人が生れ代つて雨が千粒ふつ

ても一粒しか口に入らぬ。

磐田郡も之に同じ。

” 志太郡

ピイドロ鳥といふ。話は弟を疑つた盲目の兄がアメフレ〜と啼

くといふ。

柿 十 と 十一

繼母が柿を十個戸棚へしまつて置いて他所へ用達しに行つた。用をすませて歸つて來ると戸棚をあけて見て、十一しまつて置い

た筈だけれど十しかない。お前は一つ食べたらうと云つて繼娘に云ひがかりをつけた。

繼娘は言ひわけをしたが開かれず、確かに十一あつた筈だと云つて酷く娘をいぢめた。繼娘は身に覺えない事だから、柿は十だ十だと云ひ張つてとう〜一羽の鳥となり「カキトウ〜」と鳴きたがらとんで行くと繼母もどうしても十一だと云ひ張り、之も鳥になつて「ジウイチ〜」と鳴く様になつた。

— 山梨縣西八代郡 —

續甲斐昔話集 一

山梨縣 西八代郡

「カキトウとジウイチ」

繼子話。(例出)

甲斐昔話集 五八

” 「かきとん」

柿賣が母の留守に若い娘に貸賣する。柿十を賣つておいて後に十一の代價を請求した。十だ〜と云つて娘はカキトンと鳴く鳥となり、柿賣はオチユイチン〜と鳴く鳥となつて未だに争ひつゝけて居るといふ。

かきとん鳥の説明は後年の發案であらうが、なほ貸借のことにかかるは因縁。

ジフィチは慈悲心鳥。



カキトンは郭公の事たらんか。如何？

岐阜縣 吉城郡上寶村

「ひだびと 四ノ六〇〇

「ゴキトン」

話はお菊皿屋敷に近く、主家の祝宴の日に預かつた椀を一つかくされた日頃御氣に入りの女中が、心配のあまりこの鳥となりゴキトウとなく。

此方が古さうだが母と子といふ事は無し。

群馬縣 吾妻郡六合村

上毛文化 三ノ七ノ一七

十一になる子を失つた母、鳥となつてジファイチジファイチとなく、今はこれが此鳥の本名となつた。

鳶 不 孝

昔母子の鳶が居た。親が何とか言ふと反對ばかりするので、これは何とかして子供の性根を直さねばならぬと思つて、いよいよ母親の死ぬ時になつて子供を呼び、葬式は雨のふる時出して呉れと頼んだ。子供は悲しんで、母の丈夫な時は反對ばかりしたからせめて葬式だけは遺言通りにしようと思つて雨のふる時に出した。それで今でも雨の降りさうな空模様になると母親の事を思ひ出してビョロビョロと云つて鳴くのださうだ。

鳶または鳩とも蛙ともいふ。遺言は「川の端へ埋めて呉れ」と云ふのもある。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八八・一六六

「親不孝なとんびの話」

石川縣

鹿島郡誌 九八〇

「鳩の不孝」

石川縣 七尾

第二昔話號 九

「ててつぼつぼ」

これは山鳩の話となる。

長野縣

小縣郡民譚集 一七八

「一生一度正直」

父と息子の話。

千葉縣

南總の俚俗 一〇六

静岡縣 小笠郡

静岡縣傳説昔話集 三七七

濱名郡

同書

磐田郡

遠江童詞話集 四一

鳶は親の屍が海の中に在つて取りに行かれぬので、海ンビョウ

海ンビョウ（海上乾よ〜）と啼く。

京都府 北葵田郡

口丹波口碑集 九四

兵庫縣 神崎郡

第一昔話號 六七

鳥根縣 八東郡

昔研 二ノ三三

〔例出〕

大分縣 荻田

口承文學 一一ノ三二

高田町の石の傳説。

豊後傳説集 一一四

アマノジャクといふ例も一つかと思はれる。

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ一七二

「蛙は親不孝者」

長崎縣 諫早

口承文學 九ノ七

これも蛙。

鹿児島縣

喜界島昔話集 一四六

「あまやくの孝行」

アマガフ即ち雨蛙のことか。

沖繩

南島説話 二一

「アマガクの話」

○参考

×南方隨筆 三三九

×西陽雜俎續集 四 昆明池中の渾子塚のこと 谷響續集にも注意してゐる。

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

雨 蛙 不 孝

鳶不孝と同型。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四一〇

尾長鳥といふ。

親の言ひつけと言はぬは脱落であらう。

沖繩縣

南島説話 二一・二八

アマガク（雨蛙）前生譚。

鳩 不 孝

鳩の鳴聲より。

食物を親に持つて行かず、親が餓死したのを歎いて鳥となつて……といふ。

青森縣 三戸郡

八戸昔話

父は鋤ふみに出かけ、子供は小川の雑魚を見て、父に持つてゆく

粉を雑魚に與へて父に持ち行かず、父は餓死にした。子は悔んで



鳩になつたといふ。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四〇八

飢饉の年に粉煎を子が親へ届ける途中で遊んで居て遅れ、父は餓死したといふ。子は鳩になつてテテコケエとなく。

一日に四萬八千八聲啼くともいふ。

石川縣 能登

日本昔話集 八

「鳩の孝行」

### 水 乞 鳥

馬に水をやらなかつた罰で鳥となり、水がほしい／＼と啼くといふ話。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 五

馬に水を與へなかつた馬喰のオカタがこの鳥になりしといふ。馬が死んだとは云はぬ。

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひだびと 四ノ二一

### 鳩と親子

鳩不孝・鳩不孝と同型。

岩手縣

九戸郡誌 四七六

こゝは鳩では無く不孝は蛙で、親の死ぬ時はじめて其言ふまゝに川岸に墓を作り、雨の前には墓が流れるかと心配して啼くといふ。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 七二

デデ(夫)が川向ふで仕事をして居る時、大水となり歸れなくなつた。それで妻は鳥となり、雨の前には「デデ、チョ(今日)來い來い」と啼く。

大阪府 北河内郡

近畿民俗 一

「郭公不孝」

親が背を搔いてくれと云つた時、子はおとましがつて足で搔いてやつた。親の死後悔いて鳥となり、「今ならカコウ／＼」とないてゐるといふ。

兵庫縣 城崎郡

昔研 二ノ四二〇

兵庫縣 城崎郡

芋掘鳥は親を疑つてその腹を割つてみた不孝者。

ワオー／＼と啼くといへば青鳩か。

熊本縣 阿蘇郡

民俗學 四ノ七

「チヨチユミドリ」

チヨチユミといふ子、親に偽り牛に水を飲ませなかつた。死んで

チヨチユミ鳥となる。川を上る時はキキキキと啼き、下る時は川音のやうにゴ／＼となく。いつも川端に居て、辛夷の咲く頃に啼く。

川の端に牛を埋け、流れてしまひはせぬかと心配して居るといふのは「アマノジャク」との複合か、もとは水を求むるといふのだらう。

○参考

肥後五箇莊で水鸚鳥を親不孝鳥といふ。

### 梟 紺 屋

昔鴉は紺屋をして居た。其頃鴉は眞白な立派な鳥であつたが、人間の目につき易くて危険だからと、この鴉の紺屋に羽毛を染めて貰つた。所が鴉は「とんたきたない色に染めてくれた」と怒つて一向染代を拂はない。それで今でも出合ひさへすれば鴉は怒つて鴉にやかましく其染代を催促して居るのだ。

青森縣 八戸

長崎縣壹岐島

三戸郡階上村赤保内

奥南新報 五ノ五ノ一〇

「ノロスケ」が紺屋。

鳥 歌 草 木 譚

青森縣

五戸昔話 一一ノ一

梟が紺屋。驚・雉子の夫婦・テラツツキ・雀・鳩などを詳しく説き、終に鴉が来て一番いゝ色に染めて呉れといふ。梟は憎らしいと思つて眞黒に染めてやつた。それで晝間出ると鴉に折檻されるといふ。

岩手縣

九戸郡誌 四八三

「梟紺屋」

口承文學 一一ノ四

意紺屋。鴉が来て誰よりも立派に染めてくれと云つたので「ピロウド」色に染めた。鴉が来て見て氣に入らず、それから鴉と鴉は仲が悪いといふ。

岩手縣 岩手郡平館

高木敏雄氏傳説集 二五五

「梟紺屋」

岩手縣 岩手郡

動物文學 一七

和賀郡更木村

意紺屋。鳥が天下一の色にと頼む。染まつた黒が氣に入らずもとの白羽にかへしてたべといひ「キン五郎トンビにだまされたんぢやカア」と云つて何時も鴉を追ひまくる。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四一七

「鴉と鴉」

鴉の紺屋。あんまり忙しくて鳥の頼みをつひどこもかしこも紺に染めた。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四一七

「鴉と鴉」

鴉の紺屋。あんまり忙しくて鳥の頼みをつひどこもかしこも紺に染めた。

染めた。



秋田縣 仙北郡

「身紺屋」

福島縣 石城郡

「鳥の黒いわけ」

長野縣 北安曇郡

鳥が怒るので鳶は夜しか出られない。

前とおなじ話。

静岡縣 安倍郡

鳥はおしゃれで、着物の色にさんく迷うて、いつそ全部の色を

と思つて怒をかけたので、あんな黒い鳥になつた。

紺屋の話は鳥がもとであつたらう。

岐阜縣 吉城郡上寶村

身紺屋。鳥が染違ひと云つて怒る。

京都府 南桑田郡

「身紺屋」

長崎縣

「着物の染代を拂はぬ意」

「例出」 これは鳥が紺屋。

○参考

「遠江童謡集」に

鴉 勘三郎

紺屋の恩を忘れるな。

行々子と草履

よしきり鳥はもとドウギョウ寺の草履取で、足高片方を見失つて

叱られて探し歩いて居る。此男鳥となり今も鳴く聲は、

ドウギョウ寺く、足高片ツボで首切るか、切れたら切れく。

――岩手縣――

九戸郡誌 四七四

岩手縣

「雲雀と鶉と葦切」

鶉が雲雀から草履を借りて、片方失ふと葦切が世話をする。雲雀

は鶉を攻めたてるので、鶉は草の中に隠れ、葦切は藪の中で「ゲ

ヤゲヤジ、ゲヤく、草履片ベア 何ダンダイ」と雲雀の意地

悪を憎んでゐる。

岩手縣 神貫郡

動物文學 一七

主人の草履をなくした時、寺の和尚さんに教へられて、葦の間を

探す。

トギヨ寺ノオシヤマ云々と啼く。

此處にも寺の名あり、元の形察せられる。

岩手縣 神貫郡

「例出」

同縣

これは宿屋の女中で、侍の草履を失つて斬られ傷口を洗はうとし

て川へ走つて行く。

又一話は、淫奔なる女、川原の葦葉で尻を切り、尻切つたくと

啼くといふ。

前者が女となつて居るのは後者の影響か。

秋田縣 仙北郡

カラガラスは常光寺の奉公人で、和尚の草履を片方なくして追出

される。和尚を恨んで今も啼く聲は、

常光寺、々々々 ケエケヤシ、ケエケヤシ

此歌はもつと長く草履の事を云つたであらう。

○参考

アイヌ民俗研究資料 一ノ一九

鷓鴣は鳥の王

大昔色々の鷹が集まつて酒盛りをして居る所へ小さな鷓鴣がや

つて来て、僕も仲間に入れて下さいと云つた。鷹共は之をばかに

口承文學 一一ノ三

上閉伊郡昔話集 一五三

秋田縣角館民俗資料 二三

秋田縣 仙北郡

秋田縣角館民俗資料 二三

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

秋田縣 仙北郡

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚

鳥獸草木譚



「鶴鶴も鷹仲間」〔例出〕

和歌山縣

有田郡童話集

枝にのつて割れ目に入つた鷲を助ける話。

猪の耳に入ると熊鷹がそれをまねした話。

その他此鳥の手柄を語る昔話多し。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一二四・一三四

○参考

ユエ 一五に「ミッサ、イト鶴鳥」

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三二

「蚯蚓の眼」〔例出〕

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一一三

眼は要らぬからい、聲で歌つて見たい。

後段なし。單なる由來話。

栃木縣 下都賀郡

芳賀郡郷土資料

埼玉縣 北葛飾郡

幸手童話集

東京府 北多摩郡保谷

民俗學 二ノ八

神奈川縣 津久井郡

相州内郷村話 六五

静岡縣 庵原郡

静岡縣傳説昔話集 三五五

蛇はお禮にみみずのために蛙を捕へて仇討をしてやる。

岐阜縣

民俗學 二ノ一二

廣島縣

安藝國昔話集 一〇三

「蛇とみみずのかへごと」

大分縣

豊前民話集

長崎縣 南高來郡

島原民話集 二一

「蚯蚓と土龍」

他の地方の蛇が土龍となつてゐる。

岩手縣

福井縣 阪井郡  
九戸郡誌 四八〇

みみずはうたひめの名あり云々と。

「鶴鶴も鷹仲間」〔例出〕

和歌山縣

有田郡童話集

枝にのつて割れ目に入つた鷲を助ける話。

猪の耳に入ると熊鷹がそれをまねした話。

その他此鳥の手柄を語る昔話多し。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一二四・一三四

○参考

ユエ 一五に「ミッサ、イト鶴鳥」

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三二

「蚯蚓の眼」〔例出〕

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一一三

眼は要らぬからい、聲で歌つて見たい。

後段なし。單なる由來話。

栃木縣 下都賀郡

芳賀郡郷土資料

埼玉縣 北葛飾郡

幸手童話集

東京府 北多摩郡保谷

民俗學 二ノ八

神奈川縣 津久井郡

相州内郷村話 六五

静岡縣 庵原郡

静岡縣傳説昔話集 三五五

蛇はお禮にみみずのために蛙を捕へて仇討をしてやる。

岐阜縣

民俗學 二ノ一二

廣島縣

安藝國昔話集 一〇三

「蛇とみみずのかへごと」

大分縣

豊前民話集

長崎縣 南高來郡

島原民話集 二一

「蚯蚓と土龍」

他の地方の蛇が土龍となつてゐる。

岩手縣

福井縣 阪井郡  
九戸郡誌 四八〇

みみずはうたひめの名あり云々と。

### かせ掛け蚯蚓

同じ年頃の女二人が隣どうしに住んでゐて、二人とも機織りが上手だつた。村の市が近づいたので二人は着て出る着物の織り競べをした。一人は糸も太く荒く粗雑ではあつたが、縫ひ上げたのに、一人は丁寧に織つてゐたのでまだ織り上げないうちに市の日となつてしまつた。縫ひ上げた方の女は嬉しくてそれを着て市に行つたが、織り上げない方は仕方なく、かせを首にかけて廻りの中に入り夫にかつがれて行つた。二人は市の人混みの中で出逢つてお互に罵り合ひ、夫は廻を地上に投げたので中の女は裸のままに地上に投出され、恥かしさのあまり地の中にもぐり込んだ。これが今首に白い輪のある蚯蚓になつたのださうである。

長崎縣 壹岐

齊藤縣 八戸

昔研 二ノ五八四

岩手縣 稗貫郡

口承文學 九ノ二

ホホツキとマハツプ といふ笑話。

母が夏祭までに織れと云つた帷子。一方はホホツキとなり身を隠

し、一方はいつも尻を出してゐる。

秋田縣 鹿角郡

昔研 一ノ一二三

鳥獸草木譚

「ホンヂキ(酸漿)とマハチア」

稗貫郡のものと同じ。

大分縣

直入郡昔話集 八六

「蚯蚓と蕨」

長崎縣

壹岐島昔話集 一二八

此形完形。

但し島にての變化か。

○参考

鹿兒島縣奄美大島の雀孝行の説話に、雀が首にかせをかけてとんで行く事がある。  
動物説話の笑話化しつゝも形のみ古いものを残して行くこと。

### 蕨の恩(蕨と蛇)

蛇が晝寝をして居たら茅萱が生えて、蛇の體を突きさした。すると蕨がその軟かい手で蛇を下からもち上げて、茅萱を抜いて呉れたといふ。蛇に出會つた時蕨の恩を忘れたかといふはなし。  
岩手縣 上閉伊郡  
「蛇と茅と蕨」  
聽耳草紙 二・三

上總

傳説叢書 一九八



蝮が病氣のとき炭の手で押上げて貰ふ。蝮に會つた時「奥山の姫  
蝮、炭の恩を忘れたか」と唱へる。

神奈川縣 津久井郡

相州内郷村話 六五

こゝでは蜈蚣。晝寢をして居たら茅萱につきさゝれたのを炭が頭  
をもたげてぬいてやる。

大阪府 藩原

こゝのはなめくぢが加つてゐる。炭が生えてなめくぢの汁を消す  
といふ。唱へことは

あれは彼岸のかきわらび、わらびの恩を忘れるな  
と三度唱へながら炭を手足に塗ると蛇に咬まれぬ。

○参考

南方隨筆 三三九

雁 と 龜

或時龜が雁に向つて、此處にも飽きたから何處かへ行きたい、  
どうぞ連れて行つて下さいと頼んだ。雁は引受けて棒の眞中を龜  
に啜へさせてぶらさげ、二羽の雁はその兩端を持って飛立つた。  
或村を通りかゝると、子供等がやあい龜が棒を啜へて雁に連れら  
れて行くと可笑しがつて囁し立てた。龜は雁に云はれた事も忘れ

て思はず怒鳴つた途端に棒からはなれて落ちた。龜の甲が割れた  
のは此時からといふ。

福島縣 石城郡

——福島縣石城郡——

〔例出〕

磐城昔話集 八九

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一二

「鶴と龜」

昔研 一ノ三〇

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三五

今も「ワン」といふ返事を龜みだといふ。

「蛙の宿がへ」

昔研 一ノ三五

長野縣

小縣郡民譚集 二三一

「雁と龜」

小縣郡民譚集 二三一

笑話となつてゐる。

子供が馬の杓といふと、「馬の杓ぢやねい、龜だわ」と云つて落

ちる、と。

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひだびと 四ノ一一

二話あり。その一は鶴、二羽で棒を啜へて龜がつり下り、途中で

子供にからかはれて、といふ。

大分縣 宇佐郡

第二昔話號 一〇

「鶴と龜」

鶴につれられて長州へ行く龜が、河中に落ちて死ぬと云ひ、由來

譚はない。

熊本縣 八代郡

第一昔話號 七八

「龜の甲ら」

天道様のお使ひにわらしべを啜へさせられてといひ、落ちて甲羅

が割れたのを天の使がおどろいて葛の蔓で巻いた、といふ。

○参考

×今昔物語 第五

龜不信<sub>レ</sub>鶴教<sub>一</sub> 落地破<sub>レ</sub>甲羅

「不信の龜甲を破る」の談。

×民俗學 二ノ九ノ五四五

南方氏 佛本生譚ヒイロン傳に出づと云ふ。

雀 酒 屋

昔雀が稻の實を啄み谷沿ひの水の溜りに置く。人之を嘗め試み  
るに風味よし、之を眞似て酒を醸すやうになる。故に今でも酒造  
家は雀を害することを忌むといふ。

——五島 福江など——

鳥獸草木譚

二六三

長崎縣

島原民話集 二二

蜥 蜴 の 尾

蜥蜴は人間の尾を借りに来て、とろく返さなかつた。それ故に  
人が來ると尾をとりに来たと思つて、尻尾だけ残して逃げて行く  
といふ話。

大分縣

豊後民話集

虱 と 蚤

蚤の赤いわけ、虱の背中に黒い所のあるわけなど。

色々の由來譚あり、繼母話の終などにも。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二九五

「蚤と虱」

これは喧嘩。蚤が川の中に落ちたので、それから後は蚤は水の音

を怖れるといふ。

熊本縣 八代郡

第一昔話號 七九

蚤と虱の伊勢詣りで早くつく競争をする。虱は旅人にとりついて

早く着いたので蚤が怒つて虱を打つた故といふ。

長崎縣

島原民話集 二二







「日輪さんとモーグラとドンコ」

太陽があまり照りつけるので、もぐらがこれを射ようと弓矢をもつて木に登る。それをドンコ(轟)が云ひつける。以後もぐらは地中のみしか歩けないやうになり、ドンコの子を産む時分には水が温くなる。

熊本縣 球磨郡

昔研 一ノ三七四

「モーグラとわくど」

人を食ふ土鼠が、晝も暗くなつたらもつと人を食ふ事が出来る太陽を弓で射ようとする。後は玉名郡のものと同じ。

鹿児島縣

甌島昔話集 二〇〇

○参考

生蕃傳説集 太陽を射る話。

### 炭と藁しべと豆

或時婆が炉に鍋をかけて蠶豆を入れて煮てゐた。婆が居睡りをしてゐると、鍋の中から蠶豆の一粒がポイツと炉の中へ跳ね落ちた其處には先から炭と藁とが居て、今落ちた豆と三人で相談した末、もつと廣い世界を見物して来ようと旅に出ることになつた。三人連れで川にさしかゝつたが橋が架つてゐない。そこで藁が

橋になり蠶豆が先づ渡つた。次に炭が渡つたが生憎炭にはまだ少し火がついて居たので、半分ばかり渡つたときその火が藁について藁はやけ切れて炭と一しよに川の中へ落ちてしまつた。二人が流れて行くのを見た蠶豆は困つて泣き出したがあんまり泣いたので頭がはづれてしまつた。そこへお針から歸りの娘が通りかかつて、生憎白い糸を持合せなかつたので黒い糸で縫つてやつた。それで今でも蠶豆の頭には黒い筋がついてゐる。

山梨縣 西八代郡

續田斐昔話集 一四

「蠶豆と藁と炭」 「例出」

静岡縣 濱名郡芳川村

静岡縣傳説昔話集 四九七

三人の旅。そら豆は仕立やに縫つて貰つた。

磐田郡

同書 四九七

蠶豆と豆腐との旅。豆腐は深へ乍ら渡り、蠶豆は川へ落ちてけがをし、お醫者様に縫うて貰ふ。

島根縣 邑智郡

第一昔話號 七五

型通り。

山口縣

周防大島昔話集

三人山よりの歸り途といふ。

熊本縣 天草郡

郷土研究 五ノ二六六

### 「炭火・藁の旅」

對馬

旅傳 一ニノ八ノ一八

○参考

グリム・昔研 一ノ四五二

### 大根と人參と牛蒡

これも由來話。

静岡縣 小笠郡

静岡縣傳説昔話集 四九二

三人で伊勢詣り。宿屋で牛蒡は置いて行かれた。驚いて亭主に聴くともうとうにたちましたと云ふ落し話。

長崎縣

島原民話集 二二

三人で湯に這入つた話。

### 古家の漏り

昔ある所に爺と婆があつた。或日婆が爺に向つて、爺さんく何が一番恐しいかと聞くと、わしや狼が一番恐しいと答へた。おばあさんは一番ブル(雨の漏ること)が恐しいと云つた。するとその時門口で狼がこの事を聞いて居たが、やがて雨がふり出した

鳥獸草木譚

二六七

ので「ソラブルが来た」とお婆さんが叫んだので狼は一目散に逃げ出した。ところが一方、此家の納屋に牛盗人が来て居たが、逃げて行く狼を牛の子と間違へて追かけて行くと、途で大きな穴に落ち込んでしまつた。すると狼は今穴の中へ落ちたのが「ブル」だと思つて、兎の所へやつて来て此事を告げた。兎は「ブル」の正體を探るためその穴の中へ入りかけると、下から體に取りつくものがある。そこで、「これがブルだ、こりやいかん」と急いで穴から出て逃げ行つてしまつた。

青森縣

——高松市——  
津輕口碑集 二

「雨屋の漏り」

津輕昔話集 八四

「漏り屋の漏り」

昔研 二ノ五八五

モリがもう不明になつて居てムリと云つてゐる。

五戸の昔話 第三三

岩手縣

紫波郡昔話集 一三七

「古屋のムル」



岩手縣 上伊閉郡

聽耳草紙 三二九

三話あり。土淵村・栗橋村・遠野町  
宮城縣 栗原郡

郷土の傳承 一

雨の夜と言はず、ムルが雨漏とも云はず、虎が来て立聽する。  
盗人は兎の家に飛込む。

この話も壞れてゐる。虎と兎との關係は無く、兎の尾の短かいわけをも云はず。

仙臺北部

郷土の傳承 三

狼とムリと泥棒。

泥棒が狼の居る堂へとび込み、外へ出て狼の尻尾をむしりとる。  
狼の尾の短かく面の赤い理由を言ふ。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 八一・一六九

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一七七

石川縣

越後三條南郷談 一一八

長野縣

江沼郡昔話集 一二九

「もりぞがおとろし」

上伊那郡史

「鬼猿より漏るぞ怖ろしい」

昔ばなし

伯樂と山の狼が馬盗みに来る。後に狼の尾の短い話。顔の赤い理

由の話あり。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二二九

「ムルと人穴」  
山小屋の夫婦の物語を狼が立聽く。馬盗人が逃げる狼に乗り富士の人穴の中に逃れる。動物評定と狼の冒険、狼の尾の短かいわけと人穴と稱する起り。

神奈川縣 都築郡

昔研 一ノ四七七

雨の夜とも云はず「モル」の意味も忘れられてゐる。江沼郡のと共に壞れた形。

静岡縣 榛原郡

静岡縣傳説昔話集 四六七

馬泥棒が、狼を仔馬と思つてしがみつ。洞穴のそばで振落されると、木の上の狼が急いで下りて来て尻尾で探る。狼の尾と顔の由來談。

愛知縣

三州横山話 一一八

遠江

土の色 五ノ四

岐阜縣 飛騨

ひだびと 五ノ一ノ六〇

「フルゾ モルゾ」

昔研 二ノ二二三

大阪府 泉南郡

昔研 二ノ二二三

「古家の漏ぞ」

大分縣 北海郡白杵

昔研 一ノ四五九

これには虎狼は無く、たゞ馬盗人がきいて怖れたといふ。

破損であらう。

熊本縣 葦北郡

昔研 一ノ三三四

「とん／＼虎」

狼の尾の後段はない。

球磨郡

昔研 一ノ三七五

「虎狼と馬盗人」

飽託郡

昔研 一ノ四二二

「古屋の漏りと虎狼」

阿蘇

高木敏雄氏傳説集 二五四

天草

郷土研究 七ノ二〇二

「ふるえのもり」

長崎縣

鳥原半島昔話集 七二

「古家ん漏造」

諫早

口承文學

「昔は狼の尾は七尋三尺」

長崎縣 南松浦郡

五島民俗圖誌 二五三

「恐ろしい松平」

話は前半だけ、虎狼が逃げて行くまでで、雨の夜はない。

兵庫縣 加東郡

旅傳 四ノ三

「神崎郡」

第一昔話號 六八

鳥根縣 八東郡

同書 七二

後段はあるが、狼は出て来ない。脱落かと思はれる。「モリドノコリオンケレ」といふのは古い言ひ方か。

「隠岐黒木村」

昔研 一ノ四一一

これには「漏おそろし」は無い。

この方がもとの形か。

「獸の王」

安藝國昔話集 一六九

「獸の評定。狼の尻尾を失ふことあり。狐が獸の王となる話まで續く。」

徳島縣

阿波祖谷山昔話 一〇四

香川縣 高松市

第二昔話號 八六

〔例出〕

愛媛縣 三豊郡

昔研 二ノ五七二

恐しいのは「プリン殿」といふ。

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集

この話は破片。或は誤傳である。

鳥獸草木譚



虎より狼より松平が一番怖いといふ。松平は隣の盗人のこと。あとは獸の評定と狼の尾の點、型通り。これも失念からか。

大隅 國民童話 三五四  
鹿兒島縣 甌島昔話集 一九〇

○参考

×朝鮮 國民童話 三八六 朝鮮民譚集 二二七  
虎より怖い串柿(なぜ怖いかは云はぬ)  
同書附録 三五にパンチャタントラを抄出してゐる。これは逃げただけで雨漏問答は無い。  
×支那民俗學 五ノ九六七に支那に同様の話がある由見える。  
昔話研究 一ノ四〇三、之に關する研究がある。

動物の援助

報恩譚になる前、原因無しに助けるといふこと。部分的にはあるが、これを主とした話はまだ見當らぬ。

○参考

×東洋口碑大全 一〇一九引。  
×東國旅行談 下野雀宮緣起

×三國傳記 青鸞と蓮

動物と人

岩手縣 上閉伊郡 聽耳草紙 四六〇  
「人間と蛇と狐」

人間が一番恩知らずであるといふ事の寓話。恐らくは單に昔話の人と動物との交渉に重きを置いた派生説話であらう。「古屋の漏」と反對の性質。牢屋から出す方法に古いものを存す。

栃木縣 芳賀郡 第二昔話號 一九

「五四の鹿の話」

人忘恩の話。本格説話中の報恩譚よりも手がこんでゐる。人は「ワキ役」である。

加賀 國民童話 一八二

「放し龜」

人と龜と狐と蛇。

熊本縣 玉名郡 昔研 一ノ四五

「蛇と狐の報恩」

日向 日向の言葉 七九

宮崎地方の童話に牛の話を立てる話あり。土手の陰から鼻ぐりの秘密をきく、それ故今も土手を憎み角を突くといふ。この日向に似た話、奥南新報にも在ったかと思はる。牛と牛とが山の上に寝そべつて話をして居る。「おれ達の鼻に綱をつけるならおとなしく働いてやるがなあ」

○参考

×東作誌 高倉村下高倉村の長者池の傳説。久作長者、牛馬の物語を聞き發心した話。業をさらさする爲に美しい娘に茶を賣らしむ。

×狼報恩。日本昔話集の狼正宗もこれに近い。

×阿州奇事雜話。

×今昔物語 二九

貝に手をはさまれた狼をたすけると、人の子をつれて逃げ去る話あり。

×朝鮮民譚集 附二

大洪水と人類

六度集經 三にこの話ありといふ。然らば翻譯か。

鹿兒島縣

「狼の親切」

喜界島昔話集 一七二

狼と人がイザイに行く。人は子を抱いてゐる。狼が蟹に足をは

狼と爺

岩手縣

紫波郡昔話 四〇

「爺那と狼」

爺山島に豆を蒔き「一粒蒔いたら千粒になれ」と云つてゐると平石の上で狼が「一粒蒔いたら一粒だ」と悪態を云ふ。爺が晝寝をしたら食はうと考へて狼は石の上に待つてゐた。

その夜婆と餅を搗き、次の日平石の上にそれを塗つて置き晝寝のふりをして居た。狼が石の上に来ると、尻が着いてしまつて遂に打殺された。

冒險譚のくづれか、動物譚とも云はれぬ。



動物競争

昔狸と田螺とが伊勢詣りをした。旅ももうおしまひといふ日になつて、田螺が狸に向つて言つた。斯うして歩いてゐるのもつまらないから伊勢の大神宮まで二人で驅けつくらをして見ようではないかと。狸も同意して支度をして居ると、田螺はすばやく貝の蓋を開いて狸の尾に食ひ付いた。そして伊勢の鳥居のそばまで来た時、狸は嬉しくて尻尾を振つたので附いてゐた田螺は貝が半分に割れて土の上へ轉がり落ちた。すると田螺は、狸に向つて遅いぢやないか、私はさつき此處へ着いて今肩をぬいで休んでゐる所だと云つた。

岩手縣 岩手郡

「田螺と狐」

前段狂歌のひやかし合ひがあり、その歌は「田螺と野老」の贈答によく似てゐる。

岩手縣 和賀郡

「狐と獅子」

福島縣 石城郡

二話あり。

静岡縣

岐阜縣 吉城郡上寶村

滋賀縣 高島郡

「蚤と虱の伊勢詣り」

虱が飛脚の草鞋について歩いて行く話。

大阪府 泉北郡

「猫はなぜ鼠を捕るか」

和歌山縣 有田郡

静岡縣傳説昔話集 四八八

ひだびと 四ノ一一

昔研 一ノ四七九

第二昔話號 一〇

有田郡童話集 一一

日本昔話集 一五

山口縣 周防大島

「狸と田螺の伊勢参り」

山口縣 周防大島

鯨とタハラゴの走りないご。仲間を申合せて、一人づゝ浦々に置く話。

口承文學 八ノ一〇

同書 一一・一八

「虎と蚤」

徳島縣 美馬郡

「兎と蟹の驅けくらべ」

福岡縣 遠賀郡

「狐と田螺」

昔研 二ノ三二

福岡縣昔話集 第一六

熊本縣 玉名郡

「狐と虎の走りくら」

朝鮮の虎が来るといふ白樂天型。一里毎に狐一匹づゝ。尾に嚙りつく話の方が古いであらう。

「田螺と狐の走りくら」

型通り、尾につく話。

熊本縣 天草郡

「田螺といたち」

之は後段あり。代つていたちが田螺の上に乗ると、田螺が上を見て呉れといふ。いたちは雲の走るのを見て、自分が走つてゐる様に思ふ。下りてみるとさつきので、不思議に思つてきくと「もう一遍廻つて来たのだ」と答へる。

長崎縣

「蛙と犬の競走」

「狐と田にしのかけくらべ」

鹿兒島縣

「猫と蟹の駆競べ」

昔研 二ノ八三

郷土研究 五ノ二六一

昔研 二ノ八四

郷土研究 五ノ二六一

島原半島昔話集 一〇三

五島民俗圖誌 二六一

喜界島昔話集 一四八

甌島昔話集 二〇一

鳥獸草木譚

「鵲とドンコ」 天草のと相似。

○参考

×昔研二ノ一〇 キリヤーク説話

「狐と蟹」

×交趾支那のは贈蛤と虎

仲間を途中に配置する話もアフリカその他に多い。

×輶軒偶記 五ノ二八七

又小兒の昔話に、蟹と猿の熊野参りするなどいへる事あり云々といふ。

狸と田螺の伊勢参りなど、いふのも同系であらう。蟹が競争に勝つた話は「寄合餅」にもある。尾をはさむ、背に垂る、など云ふは田螺よりも却つて似つかはしい。たゞ「肩をぬいで休んでゐる」といふ條には田螺の方が向くのみである。

狐と獅子と虎

三つの動物が、唐獅子・天竺虎・日本狐といふ様に對立して競争する話。獅子頭の起りを伴ふ。「動物競争」参照

岩手縣 和賀郡

「狐と獅子」

聽耳草紙 二八〇



静岡縣 志太郡焼津

静岡縣傳説昔話集 四四五

「狐はずるい」

虎と獅子と狐。走りくら後段に獅子頭の由来あり。

周智郡城西村

同書 四四六

「狐と獅子の話」

走り競べは無し。後段獅子頭の由来なる點前項のものも同じ。

和歌山縣 西牟婁郡

牟婁口碑集 九二

郷土研究 三ノ四七三

獅子の體が裂け三つとなり、虎は尾を、狐は頭を持歸る。之は獅子

子舞由来。

廣島縣 山縣郡

昔研 一ノ五二七

「虎と狐」

支那より虎が日本の狐の所へ力競べに来る。競争すると、仲間を

一匹づゝ置いて狐の勝となる。虎は負けて歸り、自分に似た獸を

よこした。それが猫である。

長崎縣 對馬

國民童話 三六五

これは狐が支那に渡る話。

動物葛藤

岩手縣 上閉伊郡

老姐夜譚 二五七

「犬と狼と猫」

犬が主人から嫌はれ、狼がそれを助けて手柄をさせる。その禮に

雞を食ひに来るといふ。犬はそれを斷つて、喧嘩になり猫が加勢

して狼を追ふ。狼は山の窪に鬼を集めて相談をして居ると、その

耳を鼠かと思つて猫がとびついたので鬼は逃げた。

新潟縣 南蒲原郡

越後三條南郷談 四一

貉と狼と狸と三人綱彦詣りをして莫産一枚、鹽一呎、豆一升の拾

ひ物をする。その分配の話で悪者は貉。「拾ひ物分配」参照

石川縣

江沼郡昔話集 四七

こゝは貉の代りに兎で、拾ふ代りに、賣りに来たことゝなつてゐる。

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ二八一

「狐と熊の話」

鹿児島縣

喜界島昔話集 一四四

「鳥と蝮蛇」

蝮が鳥に啜へられ、鳥の唄を賞めて歌はせて逃げるといふ話。

猿と貝

猿が貝に手をはさまれる話。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

この話はこわれて居るがもとの問答があつたか。

猿の言葉に「山を見れば日が暮れる、離してくれろやすほりどの

すほりどの」と何度も言つたといふので想像される。

狸の占ひ

狸が占ひ者となつて猿の危難を占ふ話。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 八一

「猿退治」

長崎縣

(舊)壹岐島昔話集 一七五

十二匹の仔を持つた猿を殺さうと思つて、人が犬をつれ猿の家に

行つて隠れてゐると、猿は氣配を不審に思つて、通りかゝつたサ

ンショイ坊といふ狸に占つてもらふ。

長崎縣 壹岐

同書 一七七

「狸のオンチョー」

鳥獸草木譚

拾ひ物分配

娘が父親に鹽を止めたがきゝ入れず出かける。父親は歸途猿にさらはれた娘を山中の堂の中に發見して、その猿を殺さうとかくれてゐる。猿が歸つて来て狸の占ひ者に占つて貰ふと、危難あるを云ひ當てゝ狸は逃げ、猿は遂に人に殺されたといふ話。

熊野の例は兎が占者。動物國の物語には斯ういふ發達があつたと思はれる。即ち由來譚の單純なものを追々と結構あるロマンスにする風。

昔貉と狼と狸の三人がつれ立つて彌彦詣りに出かけた。途中で莫産一枚、鹽一呎、豆一升の拾ひ物をした。さてどう分配しようかと仲々相談がまとまらない。すると貉は賢いので、斯う云つた。猿は鹽を持つて山の上に登つてひろげて方々を眺めたらいゝ、狸は鹽をどこか魚の居さうな池へ持つて行つて撒いて魚を浮かせて捕ればいゝ、私は残りの豆を賣つて食べよう、他の二人もうっかり賛成して猿は莫産を持つて木に登り、敷いて見物しようとする。とすぐ近つて木から落ちて足を挫いてしまった。狸は池に鹽を一呎入れてその後から入ると、鹽水で眼が眞赤に爛れてしまった。猿と狸は貉の狡るいのに氣がついて、二人で苦情を云



ひに貉の家に行くと、貉はその間に一升の豆を食べてしまつて、女房の貉と二人で豆の皮を毛の間に挟んで呻る眞似をして居る。そして私達も豆を食べたので、おできが澤山出来て苦しい／＼と云つたので狸も頼も又だまされて、それぢやお互様だから仕方が無いと云つて歸つて行つた。

長野縣 小縣郡民譚集 二七八  
伊那の話と同じであるが、たゞ伊勢で無く善光寺。  
上伊那郡 昔ばなし 七六・一四一  
山梨縣 西八代郡 甲斐昔話集 一五三  
「後は狐殿皆まゐる」

動物の種類も拾物も地方的に變化がある。  
岩手縣 稗貫郡 昔研 一ノ五一〇

お傳馬の晝飯をだまして取つた兎と狸と狐。狐がお傳馬の手紙をよむ條あり。  
山梨縣 續甲斐昔話集 四五三

「蟻の腰の細いわけ」

山梨縣 「蜂と蜘蛛と蟻」

蜂と蜘蛛と蟻が錢を拾ひ蜂八文、蜘蛛九文、蟻アリキリと錢を持つて行かうとして蜘蛛に絲で腰を縛られる。それから腰が細いと。

岐阜縣 飛驒

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一四一

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ三八二

「くぼどありどはぢの羽黒めえり」

大阪府 泉南郡 「百舌と鴨と鳩と鶉」

「猿と雉の話」

同書 一ノ三七五

新潟縣 南蒲原郡

百舌が錢を十六文拾ふ。鳩が分けるると「ハト／＼八文 シギ 四文 ウツラ三文 モズ一文」

〔例出〕

越後三條南郷談 四一

石川縣

島根縣

「猿と蟻」

江沼郡昔話集 四〇

拾つたのが鯛、アリガタイの洒落に既に變化しかゝつてゐる。

福岡縣 鞍手郡 「猿と蜘蛛と蟻」

福岡縣 築上郡

福岡縣昔話集 二一五

狐と狸が子供の餅をとる。

「兎の悪智恵」

福岡縣 鞍手郡

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

狐が飛脚の書狀をよむ滑稽。

甲斐昔話集 一五三

「後には狐が手紙をよむ條があつて、その文句がをかしかつたのだらう。」

福岡縣昔話集 二一五

「兎の悪智恵」

福岡縣昔話集 二一五

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

狐が飛脚の書狀をよむ滑稽。

甲斐昔話集 一五三

「後には狐が手紙をよむ條があつて、その文句がをかしかつたのだらう。」

福岡縣昔話集 二一五

「兎の悪智恵」

福岡縣昔話集 二一五

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

狐が飛脚の書狀をよむ滑稽。

甲斐昔話集 一五三

「後には狐が手紙をよむ條があつて、その文句がをかしかつたのだらう。」

福岡縣昔話集 二一五

「兎の悪智恵」

福岡縣昔話集 二一五

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

狐が飛脚の書狀をよむ滑稽。

甲斐昔話集 一五三

「後には狐が手紙をよむ條があつて、その文句がをかしかつたのだらう。」

福岡縣昔話集 二一五

「兎の悪智恵」

福岡縣昔話集 二一五

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

狐が飛脚の書狀をよむ滑稽。

甲斐昔話集 一五三

「後には狐が手紙をよむ條があつて、その文句がをかしかつたのだらう。」

福岡縣昔話集 二一五

「兎の悪智恵」

福岡縣昔話集 二一五

「蟻の分配」

加無波良夜譚 一四六

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一五三

「後は狐殿みなまゐる」

甲斐昔話集 一五三

産と大豆

産と大豆を分配するに大豆を取つた狐。身に豆殻をなすりつけてこの通り痲瘡になつたと相手を欺く。そのあとは「尻尾の釣」に續いてゐる。「尾花狐は尾のない狐」云々の歌がある。  
富山縣 下新川郡西布施村 越中郷土研究 三ノ一〇  
狸、又は熊が狐になつたものは、別に「尾の無い狐」の文句があつた爲か。

猫と鼠

猫と鼠が御馳走のし合ひの相談をし、お寺の本堂の奥にしまつておいた御馳走を、猫がウハナメ・ナカナメ・ソコナメといふ人の葬ひだと云つてみんな食べてしまふ。猫と鼠とが一緒に行つてみると皆なくなつて居るので鼠が怒ると、おれはどうせ悪い猫だと云つて鼠を食つてしまつた。以後二つの獸は仲がわるくなつたと云ふ。

岩手縣 紫波郡昔話 三五

○参考



狐と魚狗

狐と川せみの御馳走のし合ひ、魚狗がとび方で魚賣を誘ふと、その暇に狐は魚賣の魚を盗んで一人で食べてしまつた。そこで次には、狐を杭に化けさせ自分はその上にとまつてゐると、さつき魚屋が通りかゝつて怒つて擔ひ棒でなぐつた。魚狗は「ボート」とんで杭の狐がいやといふほど叩かれたといふ話。

青森縣

—青森縣五戸町—  
五戸の昔話 三一ノ三

この話はたしか九州にもあり、又沖繩にも似た話があつたかと思はる。

「狐と魚狗」

狐と魚狗が魚賣をだます話。昔研 二ノ五八六「狐と雉子」参照

青森縣

旅傳 一一ノ二ノ五七

八戸

昔研 二ノ五八六

獺と狐が招びごつこをする事になつた。先づ獺が狐を招いて、晩になつて獺がいろ／＼御馳走をして待つてゐると狐がほく／＼してやつて来て御馳走になつた。おひらもおつぽもお皿もみんな珍らしい雑魚ばかりであつたので狐はすっかり感心して、鱈腹の御馳走になつて歸つた。

次に狐が獺を呼ぶ番になつたので狐は朝から田の畦や川端を驅けずり廻つて魚を捕へようとしたが一匹も取れない。晩になると獺がやつて来た。すると狐はじつと天井を見つめたまゝ身動きもしないし何と云つても返事もしないので、獺は仕方なく歸つて行つた。

あくる朝狐が詫にやつて来て天井まぶり役といふのが當つて済まなかつたが今夜は来て呉れといふ。獺が行つてみると今度は狐がじつと俯向いて動かない。又翌朝来てゆふべは下まぶり役が當つたのでと言ひ譯けをした。獺は「狐殿は魚が捕れないからそんな事を云ふのだらう」と云ふと狐はその通りだと答へた。獺はそれなら魚を捕る方法を教へてやらうと云つて、寒い晩に尻尾を川の中に入れて置けば魚はいくらでも食ひ付いて来る。と云ふと狐

は大喜びで歸つて行つた。

日が暮れると狐は川へ行つて教へられたやうに尻尾を川へ入れてゐるが氷が着いてざら／＼音がするばかりで、少しも魚はついて来ない。それでも根氣よく朝まで我慢してゐると朝になつて、子供が氷渡りをする音がして来た。狐はこれは大變と尻尾を引上げようとしたが凍りついて居てもどうしても抜けな。無理に引張つたのでとう／＼尻尾が抜けてしまつた。

—新潟縣南蒲原郡—

青森縣 北津輕郡

津輕口碑集 二

西津輕郡

昔研 一ノ四五三

「川獺と狐」

津輕昔話集 一〇四

青森縣

五戸の昔話

一は蛙と猿 二は狐と川猫(獺)

この二つのヨメレゴトであるが、後者にのみ天井まぶり土まぶりの話がある。

三は狐と猿

岩手郡

紫波郡昔話集 八五

「川獺と狐」

上閉伊郡昔話集 九五

よばれつこより空まぶり役、地まぶり役の話がある。

狐が獺にだまされて尻尾で釣をし、朝になつて水汲みに殺される話。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 二七一

水汲みに殺される結末で、之は最後の狐の言葉に興味を集めてゐる。

座頭の口であらう。

岩手縣 江刺郡

聽耳草紙 二六九

これには狐の言ひ抜けは無し。尻尾の皮がヒンむけて山に逃げ歸るといふ。

秋田縣 鹿角郡

昔研 一ノ二二三

獺が狐によばれて豆を澤山食ひ下痢する。獺は狐をよんでその返禮をし、それから尻尾の釣となる。

秋田縣 仙北郡

旅傳 九ノ四ノ四八

狐と獺との話。狐の言葉が子守唄になつてゐる。東北の狐は尻尾をはさまれて叩き殺されるもの多く、尾の無くなつた話は無し。越後とも似てゐる。

秋田縣

昔研 一ノ五〇四

狐が獺に欺されて尻尾の切れた所を炭焼に殺される。なぜ短いかを言はず。



福島縣 石城郡  
新潟縣 南蒲原郡

”

「狐と狸」 「例出」  
形や、整つて居る。

富山市外

石川縣 能美郡

「兎と川獺」

石川縣

招びあひつこの條はあるが、記憶がうすれて居る。次の朝子供に殺される。

” 阪井郡

「かはそとんとけつねどん」

獺と狐。蛸を尻尾で釣ると騙されて蛸に引込まれる。狐は御馳走のお返しの日狸寝をして居た。

福井縣

長野縣 下伊那郡

欺すのが狐、欺されるのが兎。

大阪府 泉南郡

「尾の無い狐」だましたのは狸。

磐城昔話集 九三・一六七

第一昔話號 四八

加無波良夜譚 九五

兵庫縣 城崎郡

鳥取縣 氣高郡

” 日野郡

騙すのが狐で騙されるのが兎。兎の尻尾はこの時より短かく、前足はあんまり一生懸命で逃げようとして土を掻いたのですりへらしたと謂ふ。

島根縣 隠岐

昔研 一ノ三二六

「本屋敷の爺さんと狐」

爺さんが狐を欺す話。吉右話にもこの例がある。笑話として取扱はれてゐる。

隠岐昔話集のものも同じ。

廣島縣 高田郡

安藝國昔話集 一六六

「小僧と狐」お三狐が小僧に欺される。

大きな魚をさげて歸る云々は小僧らしくない。

山口縣 周防大島

大分縣

吉四六さん物語

長崎縣

島原半島昔話集 九八

「狐と獺」

越後南蒲原の例話とやゝ似てゐる。天見役、地見役。獺のため狐は水中に引込まれる。

長崎縣

「尻尾の釣」

化け狐退治譚、但し後段は奇。

○参考

×ユエ 一一・一四・一六〇

×伊曾保物語(岩波本)六一

狐が狼をだます。毛に籠をくくりつけさせ、それに石を投入して重くする。

×同じくイソツプの鶴と狐の例。

島原半島昔話集 九九

石川縣

「狼と獺」

鹿島郡誌 九八一

長野縣

” 下伊那郡

「獺と狼」「狼と蟹」

岐阜縣 吉城郡

狐が狼を欺く。それから狼は尻尾が短い。

「オーダイ、ダイモチ、オーンヨ」と引上げる。

これはダイモチ引の聲色で笑はせるのであらう。

和歌山縣

” 西牟婁郡

「狼の顔はなぜ赤い」

有田郡童話集 九

第一昔話號 六七

島根縣 松江

狼が熊に欺されてといふ。

高木敏雄氏傳説集 二五五

徳島縣 美馬郡祖谷山

「狼の尾はなぜ無いか」 欺すのは狐で欺されるのは狼、たまふり地まふり無し。

昔研 二ノ二八

愛媛縣 北宇和郡

「狼の尻尾はなぜ短いか」

昔研 二ノ一三〇

獺 と 猿

尻尾の釣の話。狼が尾を凍らせて引張り切つたといふ話は日本だけであらう。

尻尾の釣・狐の釣・獺と狐などみな同型なり。

青森縣

津輕昔話集 一〇三

”

津輕口碑集 一

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四六八

「狼の尻尾の短いわけ」

これは「尻尾々々のげて来い／＼」といふ文句が興味を中心であ

鳥獸草木譚



長崎縣 壹岐

「狸と猿」

猿と蟹と柿

蟹と猿とが山で出逢つて互に持つて居た柿の種と握飯とを交換した。蟹は柿の種子を持つて歸つて時き、毎日「生えろく生えんならぬ切る」ふとれくふとらんならぬ切る」など云ひ乍ら大切に育てた。柿の實も熟れて来たので、袋を持つて採りに登らうとするがどうしても登ることが出来ない。そこへ猿が来て柿をちぎるなら私がしてやらうと袋を持つてするくくと木に登り自分は熟れていゝのばかり食べ蟹には避いのを投げつける。蟹は口惜しくて堪らないので下から「お前のその袋に柿をいつぱい入れて枯枝の先にかけてゆさぶつたらさぞ面白からう」と云ふと猿もなるほどと思ひ、すぐその通りにした。枯枝は折れて袋が地に落ちるとすかさず蟹は走り寄つて袋を持つて穴の中に逃げ込む。猿は地に降りて穴へ行き「呉れなければ糞をたれ込むぞ」と尻を穴の所へおし出したので、蟹は缺で尻をはさんで放さない。猿は痛さに堪へられず、許して貰ひその代り尾の毛を蟹にやつた。それが今のやまだち蟹の先祖で、この蟹の手には毛が生えてゐる。

又猿はその爲に尻に毛が無く赤いのだといふ。

福岡縣八女郡

青森縣 三戸郡

五戸の昔話

暮近くなつたので寄合餅を崖の上で搗き、臼をころがす。猿はそれについて臼に押されて川に流れ、蟹は途中で掛つた餅を食ふ。これを蟹と兎にした話もある。餅の段が済み、次に兎が桃の木の上で桃を食つてゐると背中にクマガイダカがついてゐると欺く。兎は驚いて身を振り、桃は下に落ちて蟹に食はれる。後の形は九州に多い。但し繼目はあらはである。

青森縣

津輕昔集 二三

臼を轉がす條無く、直ぐ喧嘩となる。

津輕口碑集 八

岩手縣 遠野

話の世界 大正九年六月

聽耳草紙 二五六

餅を猿の顔に投げつけ、それを引剝いたので赤くなつたと語る。臼を山から轉がす話も東北にない事は無い。するとこの話は省略であらうか。

岩手縣

膽澤郡昔話集

臼轉がし、仔蟹の仇討がある。

秋田縣 鹿角郡

第一昔話號 三八

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三七〇

普通の猿蟹合戦に近い。蟹は鯛を拾ふ。仔蟹の仇討。蟹の甲の窪んでゐる譯をいふ。

埼玉縣

埼玉縣郷土研究資料 一一一

北足立郡加納村では

蟹が柿の木の下から、昔の猿は逆さ下りが出来たが今の猿は出来ないといふと、猿がそれを試みるがその時懷の柿を落して蟹に拾はれる。猿は怒つて今夜泥棒に入るといふので蟹が泣いてゐる。

埼玉縣 比企郡大河村

蟹が横穴を拵へてから逆さ下りをさせると、柿がこぼれて横穴に入る。猿は怒つて……。

秩父郡兩神村も同様。

大里郡熊谷附近

猿の命は助けるが代りに尻尾を切る。

北埼玉郡種追川村は加勢者の中に「水」が居る。

徳島縣

郷土研究 一ノ五ノ二七六

これを「猿ヶ島の敵討」といふ。蟹の子が黍園子を持ち、栗・缺臼などがお伴をする。

福岡縣

福岡縣昔話集 一六〇以下

鳥獸草木譚

豊前三郡と宗像とは柿の木の上の餅。次の三郡は柿の實となる。

猿は尻を挟まれて降参し、尻の毛を蟹にやつて勘辨してもらふ。

柿の種と握飯との交換なれど拾ふ事なし。「生えく生えんならぬ切る」云々は木呪ひの詞。「餅を枝の上に並べて見な、枯木の花が咲いたやうだぜ」と。

福岡縣下はこの話が多い。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ五七三

餅が柿の實になつてゐるだけの差。

熊本縣 阿蘇

昔研 一ノ二七〇

一は蒸籠拾ひ、他は餅つき相談で、猿の尾の短いわけで終る。

天草郡

昔研 二ノ四〇

長崎縣 壹岐

旅傳 九ノ四ノ一七八

鹿見島

昔研 一ノ二六七

寄合餅。杵の曲つてゐる條あり。猿が尾を失ふを以て終る。猫の登場するは奇なり。肝屬郡高山の例は(昔研一ノ三四四)これとほぼ同じ。

臼を轉がすといふ事無し。

なぜ話。古屋の漏との關係。

○参考

燕石雜誌 四(日本隨筆大成本 二ノ一〇ノ三七四)

二八三



寶永刊行の草子の抜縮のことをいふ。

餅争ひ

昔ある山中で狼と麩とが出逢つた。恰度お正月近くで里では餅つきが始まつて居た。狼は麩に「あの餅を一日取つて食べよう」と相談をもちかけ、話が纏つて二人は山を下りて来た。先づ狼が庄屋の背戸に隠れてみると、後から麩が来て庭の泉水へ大きな音をドブンと立てるとび込んだ。餅をついて居た人々はその音をききつけて、坊ちやんが池に落ちたやうだと白も餅も放つたらかしてとんで来た。その隙に狼は餅の入つた臼を抱へて山の上に歸り、麩も後からのつそりと登つて行つた。狼は又この臼のまゝ轉がして早く追付いた方が食ふ事にしようと思つてころ／＼と臼を谷底に轉がし落した。狼はすぐとんで行つたが麩はのろ／＼と後から降りて行くと臼から餅だけが抜け出して、道ばたの萩の枝にだらりと引かゝつて居た。麩は早速その側に坐つてゆつくりと食べてみると、空臼を追つて無駄足をした狼ががっかりして又登つて来て麩を見つけ、麩どん／＼此方から食つたらどうかねと麩に云つた。麩は「なあに俺の餅だから俺の好きな方から食はうよ」と答へたといふ。

——越後南蒲原郡——

青森縣

岩手縣 上閉伊郡

紫波郡

發端にちよつとわかりかねる問答があるが、もつと詳しくないとをかしみが知れない。

岩手縣

九戸郡誌 四八七

秋田縣 平鹿郡

「びつきと狼」

蛙の食つて居る所へ狼が怒つて行つた。蛙が熱い餅をちぎつて投げたのが狼の尾についてそれから赤くなつた。

山形縣 北村山郡

昔研 二ノ二八二

麩が井戸に隠れて赤子の泣眞似をする。狼に熱い餅を投げつけたから顔が赤いといふ。

但しこの解説は下手だからさう行はれぬらしい。もう餅は冷えてゐる筈。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 九〇

福島縣

信達民譚集 一〇〇

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一五

越後三條南郷談 一一四

〔例出〕

新潟縣 岩船郡

中魚沼郡

これは兎と蛙。

石川縣

江沼郡昔話集 五四

これも兎と蛙。毛だらけの手でちぎると美味しくない。いやエボ

だらけの手では、と互にちぎる努力を辭する。餅はコカの木(關

猴桃か?)に引かゝつた。だから今でも兎はこの木を噛むのだ。

石川縣 能美郡

昔研 二ノ三七一

「兎と蛙と狸」 狸が女に化けて穂を盗んで来て、兎と蛙と三人

で餅を搗く。兎がすばしく食ふので狸が耳を引いた。それで耳

が長く、蛙も狸に打たれて疣だらけになつた。

長野縣 小縣郡

昔研 一ノ三五

小縣郡民譚集 二二二

白轉ばしあり。「垂れる方から食ひやしよう」と麩の挨拶。狼は

恥ぢて顔が赤くなり、麩の咽喉には白い餅のあとがある。

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 一四六

「密合田」

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 四ノ三・八・一一

蛙は田の者だから米を、狼は山の者だから臼と杵を持つて来て餅

を搗く。白が自然に轉がり落ちる。狼が怒つて蛙をふんだ。それ

鳥獸草木譚

二八五

津輕昔話集 一三

聽耳草紙 二五五

紫波郡昔話 三〇・二〇八

九戸郡誌 四八七

昔研 二ノ三六五

昔研 二ノ二八二

磐城昔話集 九〇

信達民譚集 一〇〇

南蒲原郡昔話集 一五

越後三條南郷談 一一四

磐城昔話集 九〇

信達民譚集 一〇〇

南蒲原郡昔話集 一五

越後三條南郷談 一一四

で蛙の目玉が飛出る。

同書 四ノ八のは簡略ながら整つた話。四ノ一一にも二話あり。

大阪府 泉北郡

兎の前足の短かいわけ。

兵庫縣 神崎郡

第一昔話集 六六

麩の腹の大きいのはうんと餅食つたから、狼の顔の赤いのは餘り

急いで走つたから。

多紀郡

昔話採集手帖 九七

安藝國昔話集 八

出雲

國民童話 二二八

餅盗みと密合田の二つの型あること。

餅争ひまでは麩も蟹も雉もある。柿の種と握飯との交換は蟹だけ

で、相手は常に狼。

福岡縣 三井郡

福岡縣昔話集 一三七

兎と狼と餅をつき、龜が来たのにわけるのを嫌ひ、山の上に持つ

て行つて駈けくらをする。狼は尻をかき切り、兎は足を折る。餅

は龜一人で食ふ。

近年の改作か。

熊本縣 天草郡

昔研 二ノ四〇

狼と蟹の争ひ、蟹が狼の尻を挟むと「許せ／＼毛呉りう、毛は三

二八五



本ばかり呉りう」といふ。蟹の足に毛のあるわけ。  
鹿兒島縣

甌島昔話集 一九九

猿と蟹と餅

猿と蟹と一緒に餅を搗く事になつて、餅米を拾つて来たが、  
臼と杵が無い。蟹が隣から借りて来て二人して搗いた。搗いて  
しまつて蟹が杵を返しに行つた後、猿は餅を全部袋へ入れて持つ  
て木に登り獨り食べてゐた。蟹は歸つて来たが猿は居ないし餅も  
無いので探すと、裏の柿の木に登つて居た。蟹が木の下に行つて  
「少しおくれ」と云つても、猿は「登つて来い」と言つて居て呉  
れない。すると猿の乗つて居たのは枯木であつたのでどさんと落  
ちた。蟹は大急ぎで餅の入つた袋を持つて穴に駆け入ると今度は  
猿が少しおくれと云ふ。蟹が「此處まで来い」といつて少しも呉  
れなかつた。猿は腹を立て蟹に汚いものをかけたので、蟹も猿の  
尻を挟んだ。それで猿の尻は眞赤いのださうだ。

——佐賀縣小城郡——

佐賀縣 小城郡・藤津郡・神崎郡

昔研 二ノ二五八

「猿の尻はなぜ赤い」〔例出〕

寄合田・白轉ばしは無い。

佐賀縣 杵島郡

口承文學 一〇ノ一五

落穂拾ひの時に蟹には破れ狐を貸す。(粟福米福との關係)こゝ  
には汚い話は無し。

○参考

日本童話の新研究 三七八(中田氏)

終に蟹の穴に汚い事をしようとして尻の毛を引拂られる。それで  
猿は顔が赤く、尻尾に毛なく又尻が赤い。蟹の爪には毛がある。

猿と雉の寄合田

猿と雉とが寄合田を作る。雉は毎日田へ出かけるが猿は誘つても  
いろ／＼云つて居て行かない。稲を分ける時になつて始めて出て  
行つて、猿は一把、雉は一把、ましは一把と一把づゝ餘分にと  
る。雉が抗議するがきかない。雉は三分の一もつて歸る。猿はま  
た自分のも食つてしまひ雉のところへ借りに来る。この雉に加勢  
して粟・蟹・白・卵が猿を懲すのは猿蟹合戦である。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五八六

「狐と雉子」

同縣

五戸の昔話

岩手縣

九戸郡誌 四八三・四八九

兎と雉の寄合田。雉が鳥見に行き、粟を食ふので兎が怒つて、十  
二串にさして焼いて食ふといふ。雉は助力を得て之を防ぐ。

この兎少し氣の毒。

第二話は猿と兎と雉の寄合田で此方は猿が敵役。

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ四五三

同縣

角館民俗資料 四〇

雉と猿の寄合田。

平鹿郡

昔研 二ノ一二六

「猿と雉」

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一九

「鼠と鼬の粟作り」

長野縣 北安曇郡

小縣郡民譚集

猿と雉の粟拾ひ。袋の破れた猿のあとを雉が拾つて歩く。

鹿兒島縣

甌島昔話集 一九六

鼠と鼬の寄合田

鼠と鼬が川原の草叢をおこして粟を蒔いた。段々と大きくなつ  
て来たが鼬が草取りをしようと云つても、肥をかけようと云つて

鳥獸草木譚

も鼠はその都度口實をつくつて鼬にはかりやらせた。やがて粟に  
穂が出て山吹色に熟したら、ある晩鼠がこつそりと粟の穂を切つ  
て粟餅を搗いて子供等と食べてしまつた。翌朝これを見つけた鼬  
はおどろいて、とんびや烏や雀に聞いても知らないといふので、  
鼠の所へその話に行くと、仔鼠が「母さん、ゆふべの粟餅は……」  
といふ。親鼠が慌てゝ叱つても仔達はなほせがむので、鼬は感づ  
いてかん／＼に怒つてしまつた。そして鼠の齒をみんなぬいてし  
まつたが、それでも氣の毒だといふので前齒二本だけ勘辨してや  
つた。それから鼠の齒は前二本だけとなつた。

——越後南蒲原郡——

秋田縣 角館

第二昔話號 一二

脚氣だ空手だと働かない猿が、分配の時は猿ア一把、雉ア一把、  
マシア一把と三分の二とる。話はこゝで終り、餅搗きは無し。

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一九

〔例出〕

石川縣

江沼郡昔話集 五四

兎と蛙とで田を作るが兎は言を左右にして働きに行かず。  
殊に後者は、狐と獺の天守役、地守役の形なほ名残を止む。



猿 蟹 合 戦 (蟹むかし)

昔猿と蟹とが穂拾ひをして米にこなして餅を搗いた。猿はずるい考へを起して、一人で餅を食べてやらうと思つてつき上る頃白ごと轉がした。山の上であつたので白はどん／＼轉がり落ちて行つた。猿はその後を追ひかけて行つたし、蟹は泣き／＼ついて行つた。すると猿の通つて行つた後に餅がごとりと落ちてゐたので、蟹はしめたと思つてその餅を食べてゐた。すると猿がやつて来て餅を分けてくれと云ふ。「白に入つて居るのを食べればいゝでは無いか」といふと「白には入つてゐなかつた、その土のついて居る所でもいゝから」と頼んだが蟹は「土がついてゐても灰が着いて居ても落ちて食べれば美味いものだ」と云つた。猿は眞赤になつて怒り「ではこれから山々の千足猿を集めて仇討してやる」と云ひ残して山に行つた。

その後蟹がひとりでないで居ると椽が来て、わけをき、助太刀を約束する。次に蜂・牛の糞・杵と臼などが来て、みんな蟹に助太刀して呉れることになり、臼と杵とは梁の上に、牛の糞は庭の隅に、蜂は窓に、蟹は水槽の中に、椽は爐の中に待機して居た。

所へ猿がやつて来て、寒い／＼と爐に跨がつて火を掘りかへしたので、椽はどろんとはねて猿に火傷をさせた。猿は臺所の水槽で冷さうとすると蟹にはさまれ、あく痛い々々と云つてゐると蜂が頬を刺す、慌てゝ逃げようとする拍子に牛の糞ですべてつて轉び、そこへ臼と杵とが落ちて来て猿は潰されてしまつた。

青森縣

秋田縣鹿角郡

津輕昔コ集 二三

津輕口碑集 七

發端は寄合田、猿に食はせぬので猿が怒る。蟹が泣いてゐると加勢の者が来る。

岩手縣

紫波郡昔話集 六三

「猿の夜盜」

「雉と蟹」

「猿と蟹」

秋田縣 鹿角郡

第一昔話號 三九

「猿と蟹」(例出)

前段は寄合餅。

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一二

猿ヶ馬場へ仇討ちに行く。仇を討つは仔蟹。之はかたり方に異色を見るのみ。

新潟縣 佐渡

昔研 二ノ一七八

「蟹むかし」

蟹が汐くみに出て柿の種を拾ふ。(柿の木成長まで異色なし)猿に柿の實をぶつ／＼けられて親蟹は死に、仔蟹は仇討ちに行く。加勢の者に黍團子をやる。栗・蜂・藪打石・又ん棒・小刀・牛糞等の助太刀。

石川縣

江沼郡昔話集 三八

長野縣

小縣郡民譚集 二二六

猿と雉との豆拾ひ。助太刀は蜂・蟹・牛糞・繩・臼など。

甲州

童話の新研究 三〇〇

燕石雜誌のとお異のみ。これに引ける草紙も既出のもの。

「黄金の馬」のも大よを同じ。

廣島縣

藝備「昔話の研究」 一五八

「猿蟹合戦」

安藝國昔話集 三

加茂郡

同書 六

「猿蟹餅合戦」

この二話の發端は變り、柿で無く餅。寄合田に近い。

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 三〇番

オロンロンが日本一の黍團子を持つて丹波の篠山に親の仇討に

鳥獸草木譚

二八九

行く。敵は山姥、桃太郎の如き問答があつて臼・牛・蜂を家來にする。

福岡縣 朝倉郡

福岡縣昔話集 九一

牛方山姥の後半、この式の仇討となる。

又豊前民話集にもあり。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ五七三

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ四二

蟹に欺かれた猿。穴に糞をひり込まんとして尻を捻上げられ、それで赤いと。

長崎縣

島原半島昔話集 一〇一

「猿と蟹との餅搗き」

同縣

五島民俗圖誌 二三一

柿の木の上的猿を羨んで、蟹が猿を欺き、袋に入つた柿をまき上げる。前半は脱落か。これでは蟹の方が悪い。なほ袋のあるのは餅であつた時代の名残。

九州の方には助太刀が無い。

仇討ちと防戦と二通りがある。

猿と蟹との餅話の方には合戦の條が無く、たゞ由來談となつてゐる。



○参考

× 露旅漫録 一八五 猿ヶ島

京祇園のはやり唄に「ムカシノ〜」といふものあり。

「昔山のあなたにあつたげな……舌切雀を追ひ放つ」

「蟹殿々々、何處へ行かしやるぞいの、サルが島へ親のかたきを打ちに行き候。はさみの化物・丹波栗・石臼に針……」と、この形既に京に在りしこと判る。

× 寸錦雜綴（日本隨筆大成本 一ノ四ノ一四七）

寶永刊行の冊子見ゆ。柿の種と焼飯との交換の繪あり。

× 蒙古の語（旅傳 九ノ四ノ一六八）

前半は「天道さん金の綱」と同じく鬼婆が母を食ふ。四人姉妹が餅をやいてゐると助太刀の者來る。卵・石臼・鉄・針豚頭。これを雀の仇討としたものは福岡縣のオロンロン。

× 朝鮮（朝鮮民譚集 二一一）

悪虎を婆がおびきよせ、炭・唐辛子・針・牛糞・筵などで唄に苦しめる。物を云はず皆一人で働く。

蟹の仇討

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 二二五以下二話

結びと柿の實との交換。親蟹が殺されてその腹から生れた子が仇討にゆく。助太刀は蜂・栗・針・糞・臼など。猿の家では猿のお婆が留守番してゐて、猿にさしづして危険におとし入れる。

第二話は、發端桃太郎。川で拾つた柿の種、二人で「生れないほじくろぞ」と唱へて大きくする。蟹は中途より登場。

雀話（雀仇討）

昔臼の挽き木の孔の中へ雀が子を生んで置いたら、雀の留守に鬼が「雀の子供を見せて呉れ」と云つて來て、食べてしまった。親雀は歸つてそれを知り、唐黍團子と黍團子を拵へて鬼征伐に行く事になつた。先づ牛に逢つたので黍團子をやりお供にし、蜂・栗・臼などみな黍團子を貰つて助太刀する事になつた。地獄に行つてみると鬼は爐邊で寝てゐた。栗は爐の中へ入り、牛は背戸の戸口へ糞をして置き、臼は背戸の出口に、蜂は背戸に隠れて居た。爐の中で栗がバチツとはじけると鬼が魂消て目をさまし、背戸へ

逃げようとして牛糞に這つて轉び、そこを蜂がさし、臼が下りて來て押へ、とう〜仇を取つたさうな。

— 廣島縣山縣郡 —

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一一三

仇は山母、卵を取つて食ひ、親も食ふ。一つだけ鮫に落ちた卵が残つて、稲穂を集めて團子をつくり仇討に行く。

山形縣 北村山郡

昔研 二ノ五一三

「猿と雀」

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 六六

猿と雀と鳥。猿に卵を食はれた雀が、鳥の助力で猿を追ふ。後はナゼ話となる。

廣島縣

安藝國昔話集 一二

「雀話」

〔例出〕

之は雀の巢のかけ所が面白い。臼のひき木の穴・地藏の耳など。

福岡縣

豐前民話集

鹿兒島縣

甌島昔話集 一九二

「仔馬の仇討」

かち〜山

昔爺と婆とが畑へ豆蒔きに行つた。婆が「一粒植まれば千になれ」と歌ふと、爺が「二粒植まれば二千になれ」と歌つて植まて居た。そこへ狸がのこ〜出て來て石の上に乗つて、「一粒植まればメッコ豆、二粒うまればくされ豆」と悪口を云ふ。婆が追拂つて又二人で前の様に歌つて仕事をしてゐると、また狸が來て悪口する。追つても〜繰返すばかりなので二人は相談して晝飯に家に歸つた時、カイモチ（そばがき）を持つて來て狸の休む石の上に登つて置いて、又前の様に仕事をつゞけて居た。すると狸が出て來たが、石の上についてはなれないので爺が捕へて歸つて梁に吊し、晩には狸汁にしようと思つて爺さんは山へ婆さんは麥はたきを始めた。狸は婆さんに頼んで繩をゆるめて貰ひ、麥はたきの手傳ひをすると云つて、杵で婆さんを一搗きに殺してしまつた。そして自分は婆さんに化け、ほんとうの婆さんは料理をしてしまつた。爺さんは山から歸つて狸汁を柔くて甘いと云つて食べてゐると、「どうりで婆だもの」と云ひ乍ら窓から狸が逃げて行つてしまつた。爺は獨りで泣いてゐると鬼が來て仇討しようと思ふ。先づ山へ行つて柴刈りの競争をする。鬼は歸途狸の背中へ火をつ



けた。狸は大火傷をして家に歸つた。そこへ兎が薬賣りに来て南  
藩を塗り、痛がると又味噌をぬつていぢめ、それが癒ると木舟泥  
舟を作つて雑魚釣りに行き、狸の土船は沈んで仇討を果す。

——山形縣北村山郡——

これは完形と言つてよからう。

青森縣 八戸

昔研 二ノ五八六

この話の起りは獸の狡智を説く爲か。

同縣

五戸昔話 第三

「兎と熊」仇討でなくたゞいぢめる話。

”

同書 三ノ二

「兎と狸」前の例に近い。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ四六七

「木船泥船」

瓜子姫を竊に食はれて泣いてゐる爺と婆。兎が来て仇討してやる  
といふ。草刈野の兎・竹原の兎・杉立の兎、木舟泥舟の條すべて  
型どまり。

岩手縣 上閉伊郡

聴耳草紙 三〇六

「兎の仇討」

爺の豆蒔きに始まる普通の形であるが、この話は後段のみは變つ  
て面白い。

岩手縣 岩手郡零石

同書 三一二

かち／＼山の第二段で兎と熊との交渉に始まり、熊汁を作つて近  
所の家に行つて食ひ、騙してその親を齒抜けにした。捕へられ  
て殺されようとした所をうまく子供を騙して逃げる點、及び尻尾  
の無くなつた由來譚など五戸のものと同似てゐる。

岩手縣

膽澤郡昔話集

”

九戸郡誌 四九〇

かち／＼山後段、兎の尾の短いわけ。

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ一一ノ三三

「猿と兎」

”

昔研 二ノ二八〇

「かち／＼山」〔例出〕

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 二六

この地方は東京に近かつたと見える。烏が婆汁だと教へて呉れる  
點になほ瓜子姫の痕を残してゐる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 九五・一六七

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一

前段狸を捕る條なし。

石川縣 江沼郡

江沼郡昔話集 六一

「兎と猿と狸」

兎の狡智譚。「拾物分配」の項参照

石川縣

江沼郡昔話集 五三

「兎とべつとどん」

兎と麩の餅の話の續きに、兎が小屋を拵へて麩を入れ、出られぬ  
様にして火をつける。チン／＼鳥、ポウ／＼鳥の問答がある。  
やゝこわれて居るがもとの形はわかる。

石川縣

江沼郡昔話集 五七

「兎と狸」

この話は東京のとほゞ同じ。

”

同書 五九

「兎と熊」

東北の兎が熊をいぢめる話とよく似てゐる。家を拵へてやき殺し  
人家に入つて鍋を借りて熊汁を作り山へ逃げてゆく。  
カチ／＼鳥の話は無し。

山梨縣 西入代郡

續甲斐昔話集 二〇九

「兎の仇討」

東京のものと同ほゞ近い形となつてゐる。

岐阜縣

ひだびと 五ノ一

破片である。

岐阜縣

ひだびと 九ノ六ノ三四

狸汁から兎の仇討まで續く事は普通と同じであるが、兎の騙し方  
は念入りである。

静岡縣 小笠郡

静岡縣傳説昔話集 四六〇

狸が豆蒔きの爺をからかふこと。

廣島縣 豊田郡

安藝國昔話集 一七

「婆ア汁」

廣島縣

藝備「昔話の研究」二五

「猿筆入」系統の話の後段が「かち／＼山」になつてゐる。末娘  
の猪を「カチ／＼鳥」「ポウ／＼山」などの問答の末焼殺す。

山口縣 周防大島

口承文學 一一

兎の代りに狐が仇討する話。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 三〇・六六

愛媛縣 上浮穴郡

ひだびと 九ノ五

前段のみで仇討の段は無し。相手は狸で無く狸。

”

昔研 二ノ一三二

「カチ／＼山」

婆の米搗前は略。仇討も木舟泥舟が先で、その後小屋で焼殺す。

カチ／＼山、フイフイ鳥の問答。

福岡縣 企救郡

福岡縣昔話集 一五二

この話改造があるらしい。



大分縣

直入郡昔話集 五一

四話あり。第三話の相手は猿。第四話は猪で、これを退治する段のみあり。隣の爺型になつてゐる。

佐賀縣 杵島郡

口承文學 一一・一三

仇討は兎で無く爺自身がする。従つて舟遊びばかり。

熊本縣 飽託郡

昔研 一ノ四二一

「婆なます」

東京の話によほど近くなつてゐるけれど、カチ／＼山、ボウ／＼山の話無く船遊びのみ。

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ四三

「猿の脛」猿の脛の項参照

天草郡

昔研 一ノ四七五

「田打ち爺」

その一は悪者が猿で、婆汁を爺に食はせて逃げて行くまで。

その二は悪いのは狸、之は狐が仇討する。

長崎縣 諫早

口承文學 八ノ五

同縣

(舊)壹岐島昔話集 四九

對馬仁位村千尋漢

旅傳 一ノ八ノ一六

鹿児島縣

甌島昔話集 二〇四

「兎と狸」二話あり。

○参考

×「昔話と文學」 ちち／＼山

×「昔話覺書」 續ちち／＼山

×日本童話集 二三一

×日本昔話集 下ノ八 アイヌの例

×方言 五ノ一〇 岡山市方言

×國民童話(筑前)の馬方山姥にも 枯柴を折る音「カチ／＼鳴くのは何蟲か」

×岡山文化資料 三ノ四(邑久郡)に牛方山姥の中カチ／＼鳥の例あり。

×燕石雜誌(日本隨筆大成本 二ノ一〇ノ四〇一)

例あり。

猿の脛

ちち／＼山の狸が猿となつてゐる例。

徳島縣 美馬郡

阿波祖谷山昔話集 六六・一一八

熊本縣 玉名郡

昔研一ノ四三

「猿脛」

飽託郡

昔研 一ノ四二一

これは猿でなく狸。「やんや爺が婆脛ば食うたぞ」と逃げて行く。

長崎縣 對馬仁位村千尋漢

旅傳 一ノ八ノ一六

これは猿。すのこの下の骨見せで終り。この島には兎の仇討はなしといふ。

兎の奸計

ちち／＼山の一部。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 四ノ一一

二例あり。

その一は 相手は狸で無く鹿、前段白轉ばしあり。裏は其處で退場、二人で萱刈りに行き、鹿を焼殺し子供を騙して鍋を借り、一人で鹿を食ふ。

その二は 普通の形のかち／＼山。

その他 (昔話と傳説の間をゆくもの)

百合若大臣

百合若は桃から生れた人で幼名桃太郎といふ。王様の娘を嫁に

その他

産女の禮物

ほしいと思つて先づ風呂焚となつた。王様は鬼ヶ島を退治して來たら娘をやるといふので、百合若と名を改め、七千艘の船をつれて當時の鬼ヶ島(今の壹岐)に着く。鬼を退治して、國へ歸らうとするが歸船に頼んでも鬼と間ちがへて仲々のせてはくれない。やつとの事で歸つて見るともう知つた人は誰も居ないので、前の百合若である事さへ信じようとはしなかつた。所が王様の家に、百合若しか乗りこなせなかつた馬が居たので、それに乗ると見事に乗りこなせたので、それでやつと百合若といふ事が分り、娘と結婚した。

長崎縣 「例出」

民俗學 一ノ二〇七

産女の子を預つて大力を授けられ、後代々の女の子にそれが傳はるといふ話。

長崎縣

島原半島昔話集 九〇

「女の大力」

○参考

×安藝豊田郡川源村

瀧城の士兵右衛門、川に馬を洗ひ河童を退治す。訛のしるしに



大力を受けらる。  
今昔物語 廿七卷

「平季武美濃國にて産女にあふ」

これは全くの怪談となつてゐる。古い例である。

### 長柄の橋柱

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一六四

「雉も鳴かずば」

島にあるナラン橋をかける時、それを見てゐた四五人の女の中の一人が、髪元結に節のある女を人柱にせよといふ。調べて見ると云つた女自身がそれで、人柱になつた。

その娘が他島に嫁したが、長く物言はず親元へ歸される事になつた。所が途中山で雉の聲をきいて「雉ぬ鳥むクッゲンした故に射たつて、我親はユミタしてナガラ橋踏で」と唱つた。夫は初めて物言はぬ理由を知り伴ひ歸つた。

岩手縣 稗貫郡

口承文學 一一

やゝ普通と形異なる。代官の女房密男ありて、代官の袴に横つぎをあてゝこの提案をさせたもの。代官の老母、孫娘に物を云ふなの教へ、娘の歌

雉はケアイン／＼ホトトギス、我親は母のため、川の流れの人柱。  
誤傳察すべし。

○参考

朝鮮慶南 朝鮮民譚集 五四

「三年啞婦」人柱の段無く、唯親の戒めに依つてと言ふ。雉の聲をきゝ始めて物を云ふ。

和漢三才圖繪 七五・七四に本文があり。朝鮮民譚集 附九 啞婦傳説の集に之を引く。

### 阿曾沼の鴛鴦

愛知縣 西春日井郡

愛知縣傳説集 三一八

西春日井郡春日村白木橋傳説

昔の城主藤堂公は白木の弓にて鴛鴦を射る。美女夢にあらはれて泣く。射切られた雄の首をもつて居て撃たれる。

即ち、二つの趣向を併せたものゝ例である。この話は非常に早くあらはれ、従つて分布廣きも昔話と云ふ事は出来ぬ。昔話の様式では無い。

### 蠶神と馬

長野縣 南安曇郡

第一昔話號 五四

昔蠶は美しいお姫様であつた。早く母を喪ひ、繼母が来て姫をいぢめて二度までも既のわきに生埋めにされたのを馬が助けた。次には船にのせて流したが助けられて戻り、又々庭に生埋めにされた。助け出されたが度重なる苦しみに姫は蠶に生れ代り、後には繭の中に入つてしまつた。

甲斐昔話集 一六一以下二話 「蠶の始め」を見ると信州のこれは省略或は忘却かと思はれる。

この類の話、或は語りものであつたか、獨立して昔話の中から派生したとは思はれぬ。けれども昔話の中に生存するは共通の約束によつたものであらう。

### 人魚の食ひそこね

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一六六

「二十三夜様」

二十三夜様の集りに「モラヒ」が来て参加し、次の會は自分の

その他

所に來て呉れと云ふ。行くと立派な家で、臺所で赤子を料理してゐる。(實は人魚であつた)同行の二人は逃げ、亭主だけ御馳走になる。

東北では庚申待の話として傳へられる。若狭の八百比丘尼も同じ。

### 石像の眼に血が流れる日

高麗島の傳説。

宮城縣 名取郡愛島村

郷土の傳承 一ノ一七三

夜露の降りぬ所に竇があると、教へられて探しまはる草苺、戯れに笠をかぶせておいて取つて置くと喜んで其處をほる。錢の澤山入つたつばを掘り出す。

○参考

朝鮮民譚集 六一 廣浦傳説

酒幕老女 旅の老女に教へられて悪戯青年が夜中ひそかに石像の眼に赤いものを塗る。

あの山の墓の前に立つてゐる童子石像の眼に云々。附録 一五



物言ふ魚

宮城縣 登米郡錦織村來不來の瀧

郷土の傳承 一

旅僧この瀧にて二匹の鰻を見、一尾を捕へ袋に容れて行かうとする瀧の中から、

マサボウヤくイツ來ルカ、マサボウヤ

といふ聲、すると袋の中から

來ルヤ來ズノマサボウヤ

と返事をする。驚いて袋より出して離すといふ。それより來不來瀧と書いてマサボウ瀧と訓ませる。

○参考

一ツ目小僧その他、魚王行乞譚

鱧の骸骨を蹴つたら

石見

旅傳 九ノ三ノ三〇

濱田の士、石井友之進、弓の名人にて海上にて大鱧を射殺す。大阪の宿で鱧の骨を見、腹立たしさに蹴つたら足に深く食ひつき段に毒が廻つて死す。尚濱田の蛭子町の八幡宮には友之進の額がかゝつてゐる。

鱧に影をのまれる

大分縣 北海郡

昔研 一ノ一三八

或武士の乗つた船が沖に出て動かなくなつた。皆手拭を海に浮かして見て、沈んだ手拭の持主は鱧に影を吞まれて居るのだから海に入つて貰はなければ船は進まぬと船頭が云ふので、その通りになると武士の手拭だけが沈んだ。士は鱧に吞まれようと海に入る時弓をつがへて鱧を射た。鱧はそのまま逃げて船は無事に進んだ。程經て或港に武士が立寄ると珍らしい大鱧が濱に上つてゐるといふので見ると頭に矢が立つてゐて、曾て自分の射たものに相違ない。その口の中へ頭を入れて見るとどうしたはづみか死んだ

小蛇の成長する話

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 一五二

旗屋のマイの逸話として。

鱧の口が閉ぢて、武士はとうとう食ひ殺されてしまつた。影を吞んだ鱧はどうしても人を食ふものだといふ話。

長崎の魚石

鹿児島縣

喜界島昔話集 一七五

「くもの玉」

蜘蛛の玉といふものを探してゐる男、或蜘蛛の巣だらけの汚い家を千兩で買ふ約束をした。家の持主の爺は慾を出して、綺麗に掃除して置いて千兩では賣れないと云はうとする。買ふ男は蜘蛛を一匹ものがすまいと家いつぱい包める網を用意して来て見ると蜘蛛は一匹も居ない様に綺麗になつてゐる。これならばもう要らないと破談となつた。

○参考

花良治の魚石 喜界島昔話集 一三五

長崎の魚石 日本昔話集 一七四



昔話の魅力

昔話の名称・發端・結語など



## 昔話の魅力

### 果無し話

聴手が話をせがむのを防がんとしてなすもの。「きりなし話」「眠たい話」「長い話」などとも呼ばれる。

又昔話の好きな者を果無し話で困らせる話もこの名で呼ばれる。

青森縣

津輕昔話集 二六

八戸

昔研 二ノ五八七

話好きが、もういゝといふまで話をした者に一人娘をやらうと言ふと、座頭が果無し話をして娘を買つてゆく。途中で牛とすりかへられるが氣がつかず色々話しかけるをかしみ。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一八九

「きりなし話」

敷話あり。蛇を小刀でチョッキリと切つたと、ペロツと出たと。又チョッキリと切つたと、又ペロツと出たと。……の類。

同縣

紫波郡昔話集 七

「二歳胡麻に三歳胡麻」

話好きの長者の婆さんを果無し話で降参させると、呉れる約束の

昔話の魅力

二歳駒とは二年越の胡麻であつた。

山形縣 東田川郡狩川村

昔研 二ノ三一九

「眠たい話」

その一は、羽黒詣りの途次蛇をシと追ふとゾロツと逃げ、シと追ふとゾロツと逃げた……。

その二は羽黒詣りの途次、川端の紅葉に蛙が澤山ゐる。ゾク／＼と鳴いてはボタツと落ち、又鳴いては落ち、ゲク／＼ボタツ……。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 一・三

話好きの殿様や婆さんを果無し話で閉口させる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一八四

新潟縣

佐渡昔話集 二〇〇

一は千石船に一杯の鼠が一匹づゝ橋へ跳び出ながら「その尾に食付けチイ／＼／＼」といふ。

二は或天氣の良い時、天竺さんから白い糶が下つた。いくら引ばつてもまだ下つた、まだ下つた。

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ三一七

「とつても長い話」

川端の枳の實。富士山を七巻半の大蛇。

石川縣

江沼郡昔話集 一三二

千石船につまえた蛙の話。



長野縣 下伊那郡

昔ばなし 九四・一五一

話好きの殿様に蟻が米を一粒づゝ引く話をする。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ六

四話あり。二話は川端の大きな栗。他の二つは愚か聲が嫁に教へられて「根も葉も芋も食へる」と繰返す話。

山口縣

國民童話 二七六

話好きの殿様聲選み。

日本童話集 一七六

徳島縣 美馬郡

昔研 二ノ三二

千隻の千石船に蚤を一杯入れて、少しづゝ放す話をして話好きを閉口させる。

同縣

阿波祖谷山昔話集 一三五

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 一九一

大きな池に蛙が澤山集つて、大きいのと小さいのと交互にドボンチビンと飛込んでく……。

大分縣

直入郡昔話集 五七

風一船蚤一船取寄せて、その風がぞろぞろと這ひ蚤はほつと跳ぶ話を果無しに三日三晩話続け、長者を閉口させて養子になる。

長崎縣 伊王島

民俗研究 一九

鹿児島縣

甌島昔話集 二一〇

「鶴の鳥話」

うそ昔

話の種が盡きてから語る他愛ない話。嘘話。子供の笑ふやうな口合ひである。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一八六

「眠たい話」

山火事を盲が発見し、啞が叫んで跛が駈けつけて消した。

秋田縣 角館

聴耳草紙 五七八

「昔かたな」かたなとは語るな意。向ふから大刀の先に車をつけて引いて来るので、聞いてみるとそれはムカシカタナであった。だからもう語らないといつて、子供たちを失望させる。

山形縣 東田川郡

昔研 二ノ三一九

爺様と婆様とあつた。爺様臼の上に鐵砲あげた。そんなテンボも無い昔(他愛のない話の意)語らないものだ。テッポとテンボの口合ひである。

群馬縣

桐生郷土誌 一七五

四話あり。「菜も酒もなくナサケナイ」板が痛いといふと塵芥がごみんなさいと謝るの類。

石川縣

江沼郡昔話集 一〇八

蕪を両方から引張つたので葉なし。空を仰いだら鼻に椎の實が入つて鼻椎。笑はない兒があるので口を開けてみたら齒なし。

鹿児島縣

甌島昔話集 二〇九

昔や剥けた

昔や剥けた、長者は禿げた。

——長崎縣——

之は昔話にまつた時にいふ詞。昔話の戯れである。

岩手縣

聴耳草紙 五七六

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 二ノ一一八

昔むんつけて話はんつけた。

昔もぢりコ着て、話半纏コ着て湧谷の方さ行た。

富山市外

昔研 二ノ二六九

昔向ひから飛んで出たと。話アはなから飛んで出たと。

昔むけんで鐘をついたと。今日はふくべの底たたく。

廣島縣 西郷町

因伯民談 三ノ二

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 九八

とんとん昔もあつたさうな。猿のつびはぎんがりこ、鳥のつびはひよこく。もうないと。

昔話の魅力

長崎縣

長崎縣民話集 二〇二

〔例出〕

話の三番叟

熊本縣 飽託郡

昔研 二ノ二六二

爺と婆とあつて、爺は山へ柴伐りに、婆は川へ洗濯に行くとき河童が出て来て「婆引かせ」と言つた。それを「火貸せ」かと思つて炬火を持つて行つて「火貸さうく」と言ふと、河童は鳥帽子を被つて川から出て「ほんかく」「火貸さうく」「ほんかく」これから話を始めるといふ印しにするもので、昔話の雰囲気を作るためといふ。まだ他に例をきかぬ。

晝むかし

ひるま昔話をするとき鼠が笑ふと言つてしない。

岩手縣

江刺郡誌 二五三

東磐井郡でも同じことを言ふ。



昔話の名稱・發端・結語など

むかし

岩手縣

昔研 一ノ三〇六

昔話をムカシコ、ムカシムカシ等といふが、これを語ることを稗貫郡でムカシカタリコヌルと言つてゐる。

秋田縣 平鹿郡淺舞町

旅傳 一一ノ一

昔を語れと言はれて「昔アむくれて爲アと」がつた」と言つて茶化すことあり。

新潟縣

頸城郡誌稿

幼童に桃太郎・猿蟹・乙姫の話・花咲爺・兎と狸・狐と狸等の話を聴かす。これをムカシといふ。

壹岐

壹岐島方言集

鹿兒島縣 肝屬郡高山町

ムカシエ語ち聞かしたとは、昔物語を聞かせてくれの意。次項の黒島の如き昔語りの式は此處にももつた。

同縣

くろしま 一一二

子供が昔話をきくに行くのは正月七日と十四日の夜(片泊)、大

里では二日と十五日の夜である。カブリモノとて大人の着物を持つてゆき、これを被つて横になつて聞く。「さるムカシありしか無かりしか知らねども、あつたとして聞かねばならぬぞよ」といふ定つた言葉に、必ずウーム(片泊)オー(大里)と答へる。多くは其處で眠つてしまつて翌朝歸つた。この式今は行はれぬ。

○参考

×霞む駒形 菅江眞澄全集 五ノ八九 天明八年二月廿一日の條に坊様のムカシムカシ語りしこと詳しく見ゆ。トツピンハリリの句を以て終る。

×寓意草 一一九 江戸の士人の間にもムカシムカシの名ありしこと見ゆ。

×ケサシ 沖繩「むかしから……ケサシから……」といふ對句が「おもろ」に見える。

奄美大島大和村大和濱——「ケサあたんちやな」は昔ありしといふの意で、ケサは昔のこと。

ケサは來し方か。

×シタジ 岡山縣小田郡で老人が昔のことをシタジといふ。之はただ前代のこと。

徳島縣海部郡阿部では以前といふ意味に使つてゐる。

とんと昔

さる昔

なら 五六號

山形縣 北村山郡東郷村

昔話のことをとんと昔といふ。

新潟縣 中浦原郡

昔研 一ノ四二四

方言 七ノ八

又トントムカシともいふ。

佐渡昔話集

「トント昔があつたとき」で話が始まる。

トントは「昔々その昔」などと同じく、全く、大變なの意か。

ざつとむかし

げなげなばなし

仙臺方言考

昔話のこと。

「昔々ザットムカシの話」といふ句で始まる。

福島縣

磐城郡昔話稿

「ザット昔は終つた」と話の終りにつける者がある。

廣島縣 豊田郡

——岐阜縣山形郡梅原村——

藝備今昔話 二六

話者が途中で「ゲナゲナ話は嘘ぢやないぞ」といふ。

是は近頃の風であらう。

昔話の名稱・發端・結語など



山口縣 厚狭郡

小野村の諺に「ゲナゲナ話は嘘ぢやげな」

防長史學 三ノ一

ものがたり

仙臺

昔話をしあふことをオハナシカタリといふ。

仙臺の方言

山形縣

莊内俚語集 一六〇

新潟縣

布部郷土誌 一五九

以上では早物語りをモノガタリといふと見えてゐる。

鹿兒島縣 沖永良部島

昔研 二ノ三四四

おきえらぶ昔話集序 一〇

昔話を多くムンガタイといふ。又話をして聞かせよを「物をよんで聞かせよ」といふ（おきえらぶ昔話集 七三）。

○参考

易林本節用集の時にはまだ「話」の訓はモノガタリであつた。

物語或は昔物語といふのが昔話の古名であつたらう。

早物語

琵琶法師の語りの合間に、その弟子などが早口に語つたもの。

「……の物語」の句で終るから、たゞ「物語」と呼ぶ地方もある。又「てんぼ物語」「てんぼう語り」「ちよぶきり」等といふのも同じもので、暗記と口豆を競ふものである。

青森縣 八戸

「田を作れば泥がつく云々」の問答體の詞の終りに「ハイハイの物語語り候」といふ。

これも早物語りであらう。

岩手縣 下閉伊郡宮古

旅傳 六ノ二

終の一句「これも一夜の夢物語」といふ。

宮城縣

仙臺の方言 一七七

「さあさいいな、てんぼ舞を見さいいな」で始めるてんぼ舞の囃子あり。

山形縣

莊内俚語集 一六〇

福島縣 南會津郡

旅傳 一ノ五ノ六七

新潟縣

高志路 一ノ一〇

昔は正月に座頭の坊が「テンボ物語かたつて候」と言つて囃づく

めの文句を述べたてゝ祝ひに來た。

新潟縣 蒲原郡

加無波良夜譚 一〇二

形は北越間狀客にある早物語りと同じ。てんぼ試合の話もあり。

テンボは嘘誇張といふ以上に「逆」の意があらう。「入間川」などの意味もあるか。

壹岐

壹岐島昔話集 一〇八

「大食家」これは早物語りらしいもの。

○参考

×ひなの一ふし 八九 十曲あり。

×はしわの若葉 一二八

江刺郡黒石にて、管江眞澄翁宮古の座頭の小法師の語るを聞きたる由。

×秋田風俗問狀客 「それ物語りかたり候」で始まる。

×北越月令 正月七日盲人の平家を語る後につきて、初心の盲人

「てんぼう物語」をする。

×越後風俗問狀客 方言 四ノ七 江戸文學

×さゝなみ 三ノ一 黒住文雄の文詳かなり。

所引 經覺私要抄 文明三・正・十四及四・正・一〇

言繼卿記 弘治三・二・四

世間胸算用（元祿五刊）晝夜用心記。

昔話の名稱・發端・結語など

曠野後集且藁の句「年波は所詮早物語りかな」

佐藤鶴吉 元祿文學辭典

×櫻千句 伏猪の床に早ものがたり 西鶴

花折、雀どくの類。子守歌を作るもとは法師の語りか。

チョンガレもこれか。

秀句 咄

門前へつるした一把の藁を十六把にしたら娘の聲にすると言は

れて、「こちらの前には二把（庭）ござる。お臺所に九把（鉢）

ござる。婆さん顔には四把（轆）ござる。前なる一把で十六把」と言つて聲入りした話。

—— 神奈川縣津久井郡 ——

神奈川縣 津久井郡

第一昔話號 四七

〔例出〕

婆さんの四把は無理故後の作か。秀句咄は難關聲話と結び付くものが多い。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四九

和歌山縣 熊野

第一昔話號 六四

馬喰の牛賞め言葉。



鳥根縣 隠岐

昔研 一ノ四一二

「和尚と小僧」

一二三四五六七八九十と書いた手紙を、小僧が和尚の情事に當てこすつた讀み解きをする。

廣島縣 佐伯郡

安藝國昔話集 一二一

これは一把の藁を十二把にする。

山口縣 大島

第二昔話號 八三

「長者聲話」

これも十二把にする話。

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 九

嫁二人の歌をよむ。

鹿兒島縣 喜界島

喜界島昔話集 一七三

「賭け話」

「五萬の屋敷に八萬の家作れ」と言はれて、胡麻畑に蜂の巣を作らせればいゝと解く。そして「高みから岩を落したら受止めるか」といふと、先の男が「蜘蛛の巣に引掛ければ」と答へるので勝負なしといふ事になつた。

佛 舞

岩手縣 上閉伊郡

東北の民謡 一八三

「地藏舞」

山口縣 熊毛郡

俚謠集 七四〇

「佛舞」

輕口歌で兩者酷似せり。猫の名の話に似てゐる。「佛舞を見さいな……鴉こそ佛よ、鴉が佛ならナシやジンジョウに恐れるか」

夜 話

山口縣大津輕郡向津具村では庚申講の家で、その夜木團子十二拵へて庚申に供へ、神酒をあげて寄合つて話をする。正五九の廿三夜待も同様である。咄をすると厄除けになるといふ。

年 取 り 話

年取りの晩爐ばたで夜遅くまで咄をする。  
「大歳の火」「大歳の客」などはこの年取りの晩に話されたもの

であらう。

鹿兒島縣 出水郡伊唐島

年取りの晩には棟木の見えろ迄火を焚くと、登乏神が逃げて行くといふ。

「思ふまゝには言はれざりけり」

和尚と小僧 三三

醒睡笑 六ノ二二一 十五夜の片割れ月。

連 歌 咄

和尚が餅を半分持つてゐる處へ小僧が十五夜に片割れ月はなきもの……と誦みかけたので、和尚仕方なく

雲にかくれてこゝに半分と言つて、もう半分出して小僧にやつた。

——石川縣江沼郡——

岩手縣

東磐井郡誌

新潟縣

加無波良夜譚 九

「てんで持」

石川縣

江沼郡昔話集 九八・九六

「例出」 「りん／＼と」の歌もあり。

福岡縣

福岡縣昔話集 二八・二九

六三・六九・七七・一三〇

昔話の名稱・發端・結語など

狂 歌 咄

蕎麥搔餅を馬鹿聲が路傍に隠して、しるしに糞をしておいて單體に行つた。翌朝おきてみると雪がつもつてゐるので

雪降りてヤイ しるしの糞も見えざれば 我が蕎麥搔餅は如何になるらむ

と誦んだ。男に「何言つてゐるのか」と尋ねられたので、嫁子が雪降りてしるしの松も見えざれば 我が古里は

何處なるらむ

と直して聞かせたので、單體はこれは馬鹿聲どころか偉い歌詠みだと感心した。

——岩手縣——

岩手縣

聽耳草紙 五四三・五二〇・五二四

「愚か聲話」 「例出」

「太鼓破り」

之はりん／＼と……のついた歌を詠んで、太鼓を破つたのを許し



て買ふ。

「豆腐」

田楽を食ふ言葉。  
確か醒睡笑にあり。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ三九

「孝行馬子」

千葉縣

南總の俚俗 九七

和尚小僧「雪降りての歌」

石川縣

江沼郡昔話集 九

「三人姉妹」

上手な歌を詠んだのが殿様の縁になる。

長野縣

小縣郡民譚集 一八九・二五八

静岡縣 濱名郡

静岡縣傳説昔話集 四九八

「三人弟子」

中世の形のまゝ。

もじ咄のやうだ」といふ諺がある。

子守話

話の形ではなく、手毬唄を幾つもつなぎ合せたやうなもの。但し動作を伴はない。

秋田縣

秋田郡呂魚譚 一七三

夢合せの子守話。

新潟縣

佐渡昔話集 四一・六一

うそごき

金杭墜落の時に一人だけ生き残つた者で、即ちこの話を傳へた人の名。又オソトキ、オトタツとも呼ばれ、男とも女ともいふ。

岩手縣

農民譚譯

(南部領産金小史)

社會經濟史學昭和一年九月號

東奥異聞 二二・二六

和歌山縣 日高郡上山路村

「一口心經」

一口心經といふ諺名の信心男が、山小屋の外から呼出され、従ひ

いもじ咄

千葉縣 印旛郡

郷研 一ノ五七四

鶴掛屋は話上手で藝人が多く、その話には少々洒落も混る。「い

てゆく間に小屋が崩れて中の人は皆死ぬ。

をどけ話の主人公

彦八、彦市、吉吾、吉右衛門、仁王寺別當等同じやうな人の名が笑話の主人公として諸國に傳はつてゐる。いづれも實在した人と信じられてゐる。愚か者として、と横着者としてと全く違つた二種の笑話の主であるが、横着話の方が主かと思はれる。術くらべから派生するか。

岩手縣

紫波郡昔話 四一・九〇・一三一

「もんじやの吉」

和尚様を騙る横着者の名。

會津地方

しくじりをする「仁王寺別當」と言つて笑ふ。

長野縣

北安曇郷土誌稿 一ノ一九〇

「美麻村の切明庄屋」

これは實話かと思はれる話の多い中に、やはり「長頭を廻せ」や「辛ころがし」の愚か村話が混つてゐる。

鳥取縣

因伯民談 四ノ一三〇三

伯耆中津に明治初年實在した人といひ、多くの笑話をその逸話と

昔話の名稱・發端・結語など

傳へる。こゝにあるのは皆昔話外のもの。

鳥根縣

國民童話 二三四

石見久喜の近くの仁王村に仁王寺別當。

出雲の方にも仁右衛門とか。

鳥根縣口碑傳説集兼川郡 二六

播州

「彦七」天狗と交抄す。

岡山縣 邑久郡

岡山文化資料 一ノ一ノ二九

「無いもの呉れば孫八ぢや」

上過郡の人といふ。

廣島縣 比婆郡

庄原に馬鹿の彦六、寺迎への話あり(ゲツの話と同じ)。

峯田村で「彦七はなす」とは存分といふことだといふ。

之は話上手といふことから轉じたか。

廣島縣

安藝國昔話集 一八四

「彦八」と「話千兩」と結び付いた例。

少しも笑話の分子は無い。

藝備「昔話の研究」 一一七

話上手の彦八の逸話。「一貫匁話」「俵薬師」

宇和大島



彦入様は話の神様などいふ。

しかも笑話の主人公であらう。

高知縣

幡多郡では「大作話」高岡郡では「黄六話」

旅傳 一ノ七

”

長岡郡で「喜代助話」「興八話」

旅傳 五ノ一二

福岡縣

福岡縣昔話集 九六・一一二・二〇五

「福岡の又兵衛」「吉吾話」

漁村民俗誌 五二

直方・飯塚などで「鐘崎の魚賣久市」の咄といふ。

” 築上郡

長崎縣

豊前民話集 七・八〇・一〇〇

「吉五郎の天昇り」「ボラ賣り吉五郎」

「唐津かんね」

同書 七五

”

對馬位位村

旅傳 一ノ八

”

五島民俗圖誌 二二三

”

島原半島民話集 二八六

「八兵衛話」「權助話」

「肥後の吉どん」といふ話もある。二〇三 以下の座頭話は、輕口の應酬のみで、問題はこんなものが「昔々」と見らるゝ理由に

ある。

大分縣 直入郡

話の世界 大正九年七月

「吉よむ話」

直入郡昔話集 九四

熊本縣 球磨郡

昔研 一ノ三九 二二九

「彦市話」

薩摩 久志

權五郎といふ草履作り。

○参考

×吾妻昔物語中 をどけ全孝。

×信濃寄勝録 をどけ全孝。

×私可多咄 一ノ四〇

×宇治拾遺(日本隨筆大系本 七〇) 藤六。

×尾花集 五九 日當山俳儒。

×國學院雜誌 三二ノ四號 寒田話。

×俚言集覽 ヒコハチは大阪詞ウズワナリ。

×旅傳 一ノ四ノ二一(中田氏)

宮城縣 栗原郡

郷土の傳承 一―三

昔々ずつと昔

” 名取郡及び仙臺

昔々ざつと昔に

” 白石郡

昔々大昔のことだえ、

” 桃生郡

昔々うんと昔

昔々あつとこに

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ五五五

昔あつたげだ

” 中蒲原郡

昔研 二ノ九四

とんとん昔があつたての

長野縣 北佐久郡

昔研 一ノ五六二

ある處にあつたとさあ

兵庫縣 水上郡

旅傳 一〇ノ六

昔やな……

” 養父郡大尾村大杉

近畿民俗 一ノ二

何といはるか、うん横行話をしようか

鳥取縣 八頭郡

昔研 二ノ三〇三

昔話の始の句

岩手縣 西磐井郡

旅傳 一ノ二一

昔々あつたおね(一關町)

こは昔あつたとさ(嚴美村)

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ四五五

ざつと昔その昔或所に……

” 仙北郡

昔あつたぞん

「あつたぞ」ではなく「あつたといふ」の約であらう。津輕も

「あつたぞん」

” 河邊郡豊岩

昔あつたでおん

「あつたといふもの」か。

山形縣 最上郡安樂城村

昔研 二ノ一八四

昔あつたけど

” 北村山郡西郷村

昔研 三ノ二一四

とんとむかさつたけど

これも「昔はあつたけど」の訛。

昔話の名稱・發端・結語など



なに昔ある所に

廣島縣

なんの昔があつたさうな

山口縣 周防大島

とんとん昔があつたんといや

徳島縣 美馬郡祖谷山

とんとん昔あつたんぢや

とんと昔あつたさうな

三好郡

とんとん昔もあつたさうな

香川縣

昔はとんとあつたげな

三豊郡志々島

昔そうな、子供があつたんぢや

昔あつたさうな

愛媛縣 上浮穴郡父二峯村

とんと昔もあつたさうな、あつた所に何處のやうな(或は……私のやうな)

福岡縣 小倉

とんとん昔であつたさうな、そこに爺と婆と居つて

福岡縣昔話集 一二九

安藝國昔話集

昔研 二ノ三一

福岡縣 鞍手郡

うんと昔であつたげな

佐賀縣

昔のう……

大分縣 速見郡

昔婆さんがあつたとこや

長崎縣 北高來郡

昔ジークト

昔のうまい

昔ネ

ジークトは「ずつと」であらう。とんと昔のとんとに同じく。

昔研 二ノ三二〇

昔研 二ノ四七四

昔話の結句

兵庫縣 氷上郡柏原

ちようどほんの昔話、それで慾はせんもんぢや。

廣島縣 深安郡八尋村

それがまつかうから一昔。

之は狼と蟹の話の結語にある。マッコウは誠に斯うか。「昔やまつかう」といふ例も他にはある。狼の話にはマツカイナともなつ

た。旅傳 一〇ノ六

藝備「昔話の研究」 一四八

てらら。

香川縣 三豊郡志々島

もうなししやんしやん

そうな候へばくばく

香川縣 佐柳島

そうぢきさうな候へばくばく

愛媛縣 上浮穴郡父二峯村

これも十年一昔。

昔研 二ノ八九

石川縣 能美郡

そうらいきり

之は候ひけりの洒落。

鳥根縣 邑智郡

これぼつちり

それでぼつちり

ぼつちり

佐賀縣

「それぶんきり」「そんだけ」

昔研 二ノ三七三

昔研 二ノ四一七

旅傳 一二ノ七ノ一四

同書 八ノ二五

同書 九ノ二五

そりばつかり

昔話の結句である。

青森縣 三戸郡三戸町

それきつてどつとはれア

岩手縣

どつとはらえへどつとわらへとも

”

それきりどつとはらひ

東磐井郡沖田村もドットハラヒである。

埼玉縣 秩父郡大瀧村

郷土報告 昭和一三年

九戸郡誌 四七〇

岩手郡誌 一〇六〇

昔研 二ノ一二七

昔話の名稱・發端・結語など

昔研 二ノ二五八

同書 三二〇

熊本縣 阿蘇郡小峯村

そりばつかり

” 天草郡

そりばつかりのばくりう(博勞)どん

昔研 二ノ四〇

肥後方言集附録 三



そりばつかりのばくりうどんの大きんたま  
長崎縣 北高來郡  
そりばつかし

昔研二ノ四二一

とつびんはらり

昔話の結句。

秋田縣 仙北郡生保内

昔研 二ノ五八

錦の長者とよーばれた。呼びも呼んだし、よーばれた。ソレキテ

トツピンバラリンブン

平鹿郡淺舞村

昔研 二ノ一二六

それきつてのとんびんばらり

雄勝郡

旅傳 一〇ノ二

どつびんばらりん山椒の實

山形縣 最上郡安樂城村

ドンヘカラツコネツコ

眞室川村

昔研 二ノ一八四

トンビカンコナイケド

トンビカンコナイトハ

ケドはけりとぞ、ださうだの意。

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ五七四

トツピンカラリンネエケエド

ソンデとつびんからりんねえけえど

とつびんからりんアドねえけえど

山形縣 北村山郡西郷村

昔研 二ノ二一四

どんびん三助猿まなく、猿のけつさ午夢焼いてぶつつけろ

江戸の童詞もとは昔話の結語か。

とんびんからり

莊内方言集

とつびん三助などもこの變化か。どつとはらひと近し。

富山縣 中新川郡

ひだびと 七ノ一二

昔切つて候

○参考

「霞む駒形」二月二十一日の條にとつびんはらり見ゆ。

がつんごうん

沖永良部島昔話の結語。

おきえらぶ昔話 六六

「がつさとよさでろ」ともいふ。

では「に侍る」單にトウヤといふのを以て結ぶ例もあるか

ら、トイサは「あつたとさ」などのトサか。ガツサは「斯くぞ」の意。

喜界島

喜界島方言集 一六五

テイサ

とぞ、とさ、「といふことだ」の意。多くの昔話の結語として用ひられる。

とん

島根縣隠岐中村では昔話は「とんと昔があつたがやな」で始り、トんで終る。

島根縣 那賀郡那治村

昔研 二ノ四六三

……ぼつちり

こん限いのむかあし

甌島中甌で昔話の結語に、コンカギノノカアシといふのは、「これ限りの昔」である。

昔こつぱり

昔話の結句。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ三二一

これぼつちり

岡山縣 阿哲郡神代

昔研 二ノ三二一

昔こつぱり泥鰌の目

昔こつぱりとんびの糞

廣島縣 比婆郡庄原町附近

昔研 二ノ三二一

昔カップリ泥鰌の目、ドウランケツツリ

昔カップリコ

藝備「昔話の研究」二

〃 双三郡

昔こんぶり。昔こつぱり。あと昔こつぱり

是ばかりの意か。

〃 神石郡

昔こつぱり鳶の糞

昔かつぱりこ泥鰌の目

昔こつぱり泥鰌の目くり玉

ひと昔こつぱり

けつちりこ泥鰌の目玉

ケツチリコもコップリからか。



廣島縣 山縣郡高田郡

……とうかつちり

廣島縣 佐伯郡

……かつちりこ

大分縣 速見郡

昔かつぼ米の團子

長崎縣 對島

とうすんだ

旅傳 一二ノ八ノ一八

昔研 二ノ四四

……申すばつかり、猿のつべはきつかり  
これは前半は古來の形。後半は斯ういふ話からつけはじめたか。  
大分縣 速見郡  
昔研 一ノ五六七

もうすこし米の團子

すこす米の團子、はよ食はにやひゆる

昔かつぼ米のダゴ

惣ばりや實がない

語つても語らいでも候

昔研 二ノ二六九

もうすべつたり釜の蓋

昔話の結句。

鳥根縣 美濃郡鹿足郡

もうすべつたり釜の蓋

” 邑智郡

とんとすべつて釜の蓋

廣島縣 山縣郡中野村

……もうし昔けつちりこ

山口縣 周防大島

猿の寶物の話の破片。

鳥根民俗 一ノ四

昔研 一ノ五六一

昔研 一ノ一一二

富山市外  
語つても語らいでも候の權入やつたと  
語つても語らんでも候

それでちよつびりきのこめし

昔話の結句。

岐阜縣 郡上郡

それでちよつびりきのこめし

それもちよつびりきのこめし

昔研 二ノ二六九

それだけぢや。

續き候

昔話の結句。

越後布部郷土誌 二二四

・しやみしやつきり

昔話の結句。

富山縣 中新川郡

昔切つて候

岐阜縣 吉城郡

シヤミシヤツキリ鈍つかぼつきり裨がらばゴソゴソ、箒で掃いた

らペラリペラリ

” 大野郡丹生川村

昔むけた、この世こけた

さみさつきり、なかすりぼつきり小便ぼろく、

さみさつきり、なかすりぼつきり、お話良うてもお茶菓子がない

岐阜縣

しやみしやつきり鈍つかぼつきり、茶釜の蓋ちやんちやらん、

昔話の名稱・發端・結語など

いちご榮えた

昔話の結句。

岩手縣 西磐井郡

いんちくもんちく榮えた(一關町)

いんつこもんつこ榮えたともいふが、又「せんげもつこちよい」

(嚴美村)

いんちこまんまん榮えた(孤禪寺村)

これでまんまんときまつたのさ(花木村)

宮城縣 桃生郡

これでよんつこもんつこさ

これでよんつこもんつこさげだのさ

よんつこもんつこさげだてこいつのことさ

よんつこもんつこさけたとさ

旅傳 二ノ一ノ三四

郷土の傳承 二ノ一九



三人兄弟の昔はこんでよんつこもんつこや

これだよんつこもんつこさけたとや

新潟縣

西頸城郡郷土誌稿 二ノ一四一

一期榮えた

中蒲原郡

高志路 二ノ八

昔研 一ノ四二五

「い」さんがえたぶらりと下つた

一期さかえたぞ

いちごさんがいた

えちやぼんと榮えた

いちごぶらんとさがつた

昔研 二ノ二ノ四六

えちやぼん・えちやおたえ・越後バラリ

頸城方言集

新潟縣 西蒲原郡

さと言葉

えつちご、さつかえボキンと折れた

越後を苺と解してかボロンともげたといふもあり。

イナゴを市と解するに至つたのであらう。

新潟縣

昔研 二ノ六ノ三六

佐渡昔話集 七

いつちよろ繁昌さけた

一期繁昌榮えたの意。まじめな話には「一生安樂に暮したとさ」

「それで済んだ」「それで終り」も勿論ある。

いーちばんばん

あんまり引張りこしたので半疊裂けた

山梨縣

續甲斐昔話集

それもそれつきりイ

それで市んさかえ

鳥取縣 八頭郡西郷村

昔研 二ノ三〇

一ゴサンゴクラエタ

昔話の合槌の言葉

岩手縣 西磐井郡

旅傳 一ノ二ノ一ノ三四

「ハリーヤ」「ハート」等といふ

同縣

紫波郡昔話集 八

「タチニエボシハア」

かういふ合槌の言葉がかつてあつたらしい。

山形縣 北村山郡西郷村

昔研 二ノ二二四

「オット」

宮城縣 刈田郡

「ゲン」「ゲイ」といふのが話を聞くものの受返事で、雑談の時

にも使はれる。

○参考

阿波木頭では「ゲイ」が感嘆詞として使はれる。

新潟縣

佐渡二宮村誌

昔研 二ノ一七

子供が昔話の合槌に、サッといふ語を挟む。合槌を打つことを「サッを繼ぐ」といひ、話をせがむ時には「お婆さんサッ、お婆さんサッ」といふ。女の子などは合槌に「サッ」「セース」といふ風にも言ふ。「それから。」といふ氣持が今は多い。話が氣に入らぬ時は「サッヘンデベッ」等と言つて、話を目茶目茶にしてしまふ。「チャソウ」「チャ」といふ語は日常も使ふ。

岐阜縣 吉城郡上寶村

昔研 二ノ三〇三

昔話の相の手に、もとはヘントと言へと教へられた、といふ。



資料の解説

(本文中に使用した書名は便宜上簡略にした。)

- 安藝國昔話集 磯貝勇著 昭和九年一〇月 岡書院
- 天草島民俗誌 濱田隆一著 昭七・六 郷土研究社
- (全國昔話記録) 柳田國男編 昭一八・一 三省堂
- 阿波祖谷山昔話集 武田 明著 昭一八・一 三省堂
- 愛知縣傳説集 愛知縣教育會編 昭一二・二 郷土研究社
- (アチツクミューゼウム彙報四五) 武藤鐵城編著 昭一五・四
- 秋田郡邑魚譚
- 安房の傳説 羽山常太郎編 大正六・七 安房通報社
- アイヌ民譚集 知里眞志保著 郷土研究社
- 伊那の傳説 岩崎清美著 昭八・七 山村書院(飯田市)
- (舊) 壹岐島昔話集 山口麻太郎編 昭一〇・六 郷土研究社
- (全國昔話記録) (前者に後採集のを加へたもの)
- 壹岐島昔話集……
- 柳田國男編 昭一八・一二 三省堂
- 山口麻太郎編 昭一八・一二 三省堂
- 因伯昔話(又は因伯童話) 因伯史話會編 大一一・九
- 因伯民談 鳥取郷土會 昭一一
- 市原郡志 千葉縣市原教育會編 大五・七 市原郡役所
- 猪・鹿・狸 早川孝太郎著 大一一・一 郷土研究社
- うつしはな 澤田四郎作著 昭一六・三 大阪市
- (浜邊叢書) 城後三條南郷談 外山曆郎著 大一一・四 郷土研究社

資料の解説

(浜邊叢書)

江刺郡昔話 佐々木喜善編 大一一・六 郷土研究社

岡山文化資料 文獻研究會(岡山市) 昭三・一二 同會

岡山歴史地理 桂又三郎編輯 岡山歴史地理學會

おきえらぶ昔話 岩倉市郎著 昭一五・二 民間傳承の會

小谷口碑集 小池直太郎著 大一一・六 郷土研究社

加賀江沼郡昔話集 山下久男著 昭一〇・八 小川書店

加無波夏夜譚 文野白駒著 昭七・一 三元社

甲斐昔話集 土橋里木著 昭五・六 郷土研究社

(全國昔話記録) 柳田國男編 昭一八・一二 三省堂

上野伊那郡昔話集 佐々木喜善著 昭一八・一二 三省堂

鹿島郡誌 石川縣鹿島郡誌 昭三・一二 鹿島郡自治會編

角館民俗資料 (羽後角館に於ける鳥虫草木の民俗學的資料)

武藤鐵城著 昭一〇・五 アチツクミューゼウム

川越地方昔話集 鈴木業三編 昭一二・四 民間傳承の會

聽耳草紙 佐々木喜善編 昭六・一 中外書房

(全國昔話記録) 柳田國男編 昭一八・一 三省堂

真界島昔話集 岩倉市郎著 昭一八・一 三省堂

郷土研究(雜誌) 大九・四 郷土研究社

郷土研究資料 埼玉縣立川越高女郷土室 昭一一

北安曇郡郷土誌稿 信濃教育會北安曇部會編 昭一二・一一

信濃毎日新聞社

安北疊郡口碑傳説篇 (前者が昭和五年五月以降續刊されその第一



資料の解説

・第二・第七巻に口碑傳説が収められてある

- 北佐久口碑傳説集 北佐久教育會編 昭九・九 信濃毎日新聞社
- 近畿民俗 太田陸郎編 昭一・二 近畿民俗刊行會
- (炬邊叢書) 垣田五百次 昭一・二 三省堂
- 口丹波口碑集 坪井忠彦 昭一・二 三省堂
- 黄金の馬 森口多里編
- 口承文學 宮本常一編・刊(第一號・一二號) 昭一・二 三省堂
- 五島民俗圖誌 久保清共著 昭九・一 一誠社
- 橋浦泰雄著 昭九・一 一誠社
- 高志路 (雜誌) 昭一・一 高志路社(新潟)
- 高志路 (雜誌) 柳田國男編 昭一・三 三省堂
- 岩倉市郎著 昭一・三 三省堂
- 佐渡島昔話集 (佐渡昔話集の八五話と類話若干を編したもの) 鈴木棠三編 昭一・七 三省堂
- 鈴木棠三編 昭一・七 三省堂
- 佐渡昔話集 鈴木棠三編 昭一・四
- (炬邊叢書) 早川孝太郎著 昭一・一 郷土研究社
- 三州横山話 (全國昔話記録) 柳田國男編 昭一・七 三省堂
- 紫波郡昔話集 小笠原謙吉著 昭一・七 三省堂
- (炬邊叢書) 全國記録は此書を整理し更に若干の新らしい話を加へてある 佐々木喜善編 昭一・五 郷土研究社
- 紫波郡昔話集 縣立女子師範編 昭九・三
- 靜岡縣傳説昔話集 關 敬吾編 建設社
- 島原半島民話集 關 敬吾編 建設社
- (全國昔話記録) (前書所収の昔話百餘編中より六十餘を撰んだ島原半島昔話集) 關 敬吾編 昭一・七 三省堂
- もの 關 敬吾編 昭一・七 三省堂
- 島 (雜誌) 昭八・五 一誠社

二

- 信濃民譚集 近藤喜一 昭三・九 郷土研究社
- 周防大島昔話集 宮本常一編 寫本
- 周桑郡郷土叢報 周桑高女内 昭五・七
- 郷土研究會
- 瀬戸内海島嶼巡訪日記 アチックミニエール編・刊 昭一五・九
- 續甲斐昔話集 土橋里木著 昭一・一〇 郷土研究社
- (炬邊叢書) 鈴木重光著 昭一・三 郷土研究社
- 相州内郷村話 鈴木重光著 昭一・三 郷土研究社
- 第一・二昔話號 (旅と傳説 第四卷 四號 昔話特輯號の假稱)
- 旅と傳説 萩原正徳編輯 昭三・一 三元社
- 小縣郡民譚集 小山真夫著 昭八・四 郷土研究社
- 筑前の傳説 佐々木滋寛編 昭一・一 九州土俗研究會(福岡市)
- 津野昔口集 川合勇太郎編 昭五・八 東奥日報社(青森市)
- 津野口碑集 内田邦彦著 昭四・一 郷土研究社
- 朝鮮民譚集 孫晋泰著 昭五・一 郷土研究社
- 登米郡史(誌) 登米郡役所編上下二卷 昭一・二 三省堂
- 豊里村誌 (山形最上郡) 佐藤豊治著 昭二・一
- 津野物語 柳田國男著 昭一・七 郷土研究社
- 津江草詞話集 中道道爾著 昭一・一〇 一
- 東奥異聞 佐々木喜善著 昭一・三 三省堂
- (全國昔話記録) 柳田國男編 昭一・八 三省堂
- 直入郡昔話集 鈴木清美著 昭一・八 三省堂
- 南總の俚俗 内田邦彦編 昭四・一

- (炬邊叢書) 佐喜真與英著 昭一・五 郷土研究社
- 南島説話 (兒童文庫) 柳田國男著 アルス
- 日本昔話集 柳田國男著 アルス
- 日本傳説集(同名の書ある爲本文中には筆者名を題した) 高木敏雄著 昭二・八 郷土研究社
- 日本傳説叢書 藤澤衛彦 自昭一・一 刊會
- 至大九 日本傳説 刊會
- 西讃岐昔話集 武田明編 昭一・六 郷土研究室(香川県丸龜高女)
- 能美郡誌 能美郡々役所編 昭二・一 一
- ひだびと(雜誌) 飛騨考古土俗學會 自昭一・一 一
- 飛騨の傳説と民話 高山西小學校研究部 昭八・七 生伊書店(飛騨)
- 鳳至郡誌 鳳至郡々役所編 昭二・三 一
- 五倍子雜纂 澤田四郎作著 昭九・七 一 (第一) 著者
- 豐後方言集 市場直次郎編・刊 昭八・四 第一輯 大分縣立第一
- 昭九・二 第二輯 高女國文會
- 昭一・三 第三輯 高女國文會
- 方言 瀧野武馬編 昭六・九 以降 春陽堂
- 民間傳承(雜誌) 昭四・九 民間傳承の會
- 南安曇郡誌 南安曇郡教育會 昭二・一 一〇
- 南安曇郡年中行事(南安曇郡郷土調査叢書・第一) 信濃教育會南
- 安部會編 昭一・七 郷土研究社

資料の解説

三

- 民俗學 民俗學會編 昭四・八 一二
- 民俗叢書 谷川馨雄著 昭一・五 坂本書店
- (全國昔話記録) (文野白駒の名を以て發行された加無波良を譚に新南原郡昔話集) 採集のもの七十種八十二話を収録したもの
- 岩倉市郎著 三省堂
- 南佐久口碑傳説集 南佐久教育會編 昭一・四 信濃毎日新聞社
- 昔研(昔話研究第二卷) 昭一・二 三元社
- 昔ばなし(伊弉民俗叢書第二輯) 伊弉民俗研究會編 昭九・六 信濃郷土出版社
- 昔話採集手帖 柳田國男共編 昭一・一 民間傳承の會
- 關 敬吾共編 昭一・一 民間傳承の會
- 昔話の研究 (備叢書第一輯) 給れを防ぐ爲本文中には「昔話の研究」とす 廣島師範郷土室編 昭一・四 七 廣島師範郷土室
- 野鳥 日本野鳥の會編 昭八
- 大和の傳説 (奈良縣電話聯盟高田十郎) 昭八・一
- 山原の土俗 島袋源七著 昭四・二 郷土研究社
- 老嫗夜譚 佐々木喜善著 郷土研究社



索引

(あ)

赤米と子供 一七七  
 あくびをした奥方の話 一七三  
 阿曾沼の鶯 二九六  
 頭の木 一〇一  
 後は狐殿皆参る 二七六・二七  
 兄のむかし 三三  
 姉と弟 九  
 姉のはからひ 九  
 あねさんと天邪鬼 五  
 雨蛙不孝 三五  
 尼裁判 二四〇  
 天邪鬼と瓜子 四  
 あまやくの孝行 二五  
 あまりか 二四  
 アサナローの花 九  
 葦子萱子 五  
 阿野様 一六  
 あはて者の話 三三  
 粟福米福 四  
 憐れな姉妹 四  
 蛇と手斧 五

索引

(い)

あらんこ・こらんこ 三  
 蟻通し 一四  
 生き埋めのこと 一六  
 生き物の食ひ糧 一七  
 生針死針 一七  
 埋けた瓶 二九  
 いさばの鎗左衛門 一〇一  
 石の正兵衛 二七六・二七  
 醫者と駕籠 三三  
 醫者どんの頭 九  
 石と酒瓶(瓶と小石) 九  
 伊勢詣り子 五  
 伊勢詣り猫 三五  
 いち 二四〇  
 いちご榮えた 四  
 一貫匁話 二五  
 イツチヨメ 二四  
 一寸法師 九  
 煎つた粟種 五  
 泉の小さくだ 一六  
 糸績み女 三三  
 糸引聲 四  
 田舎の若者 四  
 犬飼七夕 五

(う)

犬子話 三  
 犬と猫と指輪 一四  
 犬梯子(千足娘系) 一六  
 犬の恩報じ 一七  
 猪の舞入 一八  
 言ひそこなひ 二〇  
 祝ひ直し 二一  
 いもじ咄 二二  
 妹は鬼 二五  
 芋掘長者 二七  
 芋掘り鳥 二八  
 右衛門太郎と左衛門太郎 二九  
 鶯姫 三〇  
 鶯の一文銭 三一  
 兎と蟹の証けくらべ 三二  
 兎と蛙と餅(餅争ひ系) 三三  
 兎と狸 三三  
 兎と熊 三三  
 兎とべつとどん 三三  
 兎と山芋と栗 三三  
 兎の仇討 三三  
 兎の悪智恵 三三  
 兎の奸計 三三  
 牛方山姥 三三

一



牛と舟	一六四	瓜姫子と天邪鬼	四	鬼の姉	三三・一三三
牛の嫁入	一七	うるこ玉(こげら玉)	一六	鬼の家の便所	九八・一〇〇
臼と杵	一三〇	魚女房	三〇	鬼の子小綱	八九・九〇・九一
嘘つき小僧(倭薬師系)	一六九	魚賣りと鬼婆	一〇五	鬼婆と小僧	九八
うそとき	三三三	運定め話	一九	鬼婆に耳から食はれた話	一〇一
嘘の皮(大もの競べ)	二二八	運の玉	七〇	鬼むかし	八七
嘘昔	三〇四	運の良い俄か武士	三〇八	鬼を一口	三七
唄があまる	三三八	運命の神	一〇	負はれよう	一〇〇
打たぬ太鼓	一九	(元)		御籠大明神	六五
歌ひ骸骨	一八五	繪婆女房	三五	狼と爺	一四
歌ひ井	一八五	えつちごきかえ	三三	狼の恩返し	二七
歌詠み舞	一八	海老と大鳥	三三	大きい比べ	二四
打出小槌	八六・一六四	延命小槌の取戻し	二六	大きな大根の話	二九
鯉男	三七	(お)		大口	二八
鶴ノ鳥話	三〇三	オーバ話	一七〇	大歳の客	一〇一
姥皮	四七	起上り小法師	六三・六三	大歳の火	九
姥棄山	一六四	桶屋の昇天	二二	大鳥と海老と龜	七
ウバリヨン	六五	お釋迦さんと雀とつばき	三三	大話	三三
産女の禮物	二九五	お月お星(お銀小銀)	五〇・五一	大袋小袋	一〇〇
馬方と鬼	一〇五	弟戀し	二四	大もの競べ(嘘の皮)	一六
馬方山姥	一〇六	弟出世	五九	おもひの魔物	二八
馬になる旅人	九六・九七	をどけ話の主人公	三三	和尙と小僧	一三
生れ子の運定め	一八八	鬼ヶ島脱出	九二	和尙と化物	一〇
生れつき運	六七	鬼を笑はせる	九	親捨山	九
瓜子姫子	三				一六五
瓜姫	四				

梅指太郎	一一	かち／＼山	二九・三三	金の量	一一九
おりんこ・こりんこ	三三	火車の化物	一九三	金をひる馬	一一九・五八・一七一
馬か息子	三二六	がつかい長者	三六	金袋と蛇	六七
愚か村	三三〇	がつきとらき	三八	金を負うた子供	六六
愚か舞	三三二	郭公と親子(片足脚絆系)	三二八	鐘を被つた狸	一六
愚か嫁	三三六	郭公鳥と時鳥	三二四	金を放る龜	八五
女の大力	三三六	郭公と母子	三二九	かはうそ	一一
お姫こ	四	郭公不孝	三二六	狸と狐	二二
(か)		郭公と繼母	三三〇	狸と猿	二八
冥神と馬	三九七	河童の恩返し	一五八	川の主	九
海中の石臼	八七	河童舞入	三七	かばの長者	一五
嘉右衛門の鶏	三三五	かつぼう鳥	三二六	燕燒笹四郎	一五・二五
柿十と十一	三三三	カツボン鳥の由来	三三〇	嘉兵衛歟	二五
柿の木参詣	三三七	蟹と爺	一九	蛙になれ	六八
柿をまき上げる蟹	三二七	蟹の仇討	三九〇	蛙女房	三三
隠れ養笠	三八九	蟹の甲羅	一九〇	蛙の恩返し	三三
かける蟲	一五	蟹報恩(女房譚系)	一九	蛙のだんぶくろ	三五
笠長者	一〇	蟹むかし	三八九	蛙の頭巾娘	三五
笠地藏	一〇	蟹問答	一四三	蛙の舞	一四
かさの病	一〇一	鉦打鳥と地獄鳥	一五三	蛙の宿がへ	二六
賢こ淵(水蜘蛛話)	一五九	鉦叩き鳥	五	蛙の嫁貰ひ	一四
かずの子	三〇〇	金と吸殻	一五八	蛙は親不孝者	三五
かせ掛け蚯蚓	三六一	金の茄子	一七一	蛙舞入	一四
片足脚絆	三六二	金のなる樹	一七三	叭狐	一四
片目ちがひ	三六八	金の量	一七三	片目ちがひ	一四
	三六八	金の化物(賣化物系)	二八	神さまと酒のみ	九〇



神様と鏡飯	二・三三	狐と狼狗	二七六	久市咄(魚賣久市)	三二四
神様の申し子	二・三三	狐と熊の子	二七六	狂歌咄	三二一
上の爺と下の爺	二・三四	狐と小僧	二七四	兄弟と鬼	三二一
瓶と小石(石と酒瓶)	二・三四	狐と子供	二七四	兄弟話	三二一
龜の甲ら	二・三四	狐と獅子	二七三	兄弟淵	三二一
鴨取權兵衛	二・三二	狐と獅子と虎	二七三	兄弟星	三二一
鴨女房	二・三二	狐と田にしのかけくらべ	二七三	京の五條の橋	三二一
烏賣り(雉子鳥)	二・三二	狐と抱齋	二七三	京上り	三二一
烏と蟻	二・三二	狐と貉	二七三	經文と泥棒	三二一
烏の黒いわけ	二・三二	狐女房	二七三	きりなし話	三二一
烏の言葉(聽耳系)	二・三二	狐の仇返し(二度の威嚇系)	二七三	ギリが飛んだ話	三二一
唐津かんねの話	二・三二	狐の悪戯	二七三	棄老國	三二一
かり子と瓜子	二・三二	狐の恩返し	二七三	金銀の枕	三二一
雁と龜	二・三二	狐の騙し直し(似せ本尊)	二七三	金銀鑲錢	三二一
雁穴(大ものくらべ系)	二・三二	狐の釣(尻尾の釣)	二七三	金の茄子	三二一
雁取爺	二・三二	狐の化けの皮(八化け頭巾)	二七三	金の扇銀の扇	三二一
(き)		狐の走りくら	二七三	(く)	
聽耳	二・三二	狐の寶物	二七三	クオツクオー鳥	三二一
樵夫の殿様	二・三二	狐のみの	二七三	クシメトクメ	三二一
鳩子鴉	二・三二	狐の飯匙(八化け頭巾系)	二七三	楠を伐る話	三二一
吉よむ話	二・三二	狐遊女	二七三	藪をやめる賭	三二一
狐退治	二・三二	氣にかけ爺さん	二七三	養が綾錦	三二一
狐退治の失敗	二・三二	靈の化物	二七三	蛇と狐の報恩	三二一
狐と馬方	二・三二	木舟泥舟	二七三	口無し女房	三二一
		着物の染代を拂はぬ爺	二七三	口眞似聲	三二一

グツガラリ(ぐつの話)	二・三〇	げなばなし	二七〇	黄金の蛇	二八三
ぐつの話	二・三〇	げん	二七〇	黄金の瓶	二八三
口傳聲	二・三〇	源五郎話	二七〇	オヤトン	二八三
くつ	二・三〇	源五郎の天昇り	二七〇	後家のお久さ	二八三
食はず女房	二・三〇	(じ)		こげら玉	二八三
首掛け素麵	二・三〇	小池婆	二七〇	コウウ次郎	二八三
くぼとありとはちの羽黒めえり	二・三〇	幸運獵師(まのよい獵師系)	二七〇	九ツ山の一ツ山	二八三
能野詣り(動物競争系)	二・三〇	孝行坂	二七〇	ここ掘れわんく	二八三
蜘蛛と座頭	二・三〇	孝行娘と狼	二七〇	心得童子	二八三
蜘蛛とやまめ釣り	二・三〇	額額城	二七〇	兒裁判	二八三
蜘蛛淵	二・三〇	荒神さま	二七〇	蘆と大豆	二八三
蜘蛛嫁	二・三〇	香の木の卵	二七〇	小左衛門と狐	二八三
暗がりから牛でござる	二・三〇	鴻の巢女房	二七〇	子浚ひ鬼(三枚のお札系)	二八三
海月骨なし(猿の生肝)	二・三〇	かうの鳥と海老と鯨	二七〇	腰折れ雀	二八三
クラッコ鳥	二・三〇	弘法機	二七〇	小僧と鬼婆	二八三
暗間から牛でござる	二・三〇	仔馬の仇討	二七〇	小供と狼	二八三
栗太郎(桃栗小太郎系)	二・三〇	こうまん鳥	二七〇	小僧の頓智	二八三
栗姫	二・三〇	高名の鼻利き	二七〇	子育て幽霊	二八三
黒く犬の報恩	二・三〇	五月節句の萱と蓬	二七〇	子供育て	二八三
黒鏡の彈	二・三〇	五月の鬼	二七〇	小蛇の成長する話	二八三
(け)		五箇庄話	二七〇	五人太郎作	二八三
怪我の功名話	二・三〇	黄金小犬	二七〇	鯉・難・狐	二八三
芥子の種	二・三〇	黄金の牛	二七〇	鯉女	二八三
獸の玉	二・三〇	黄金の馬	二七〇	小判とボタ餅	二八三
		黄金の瓜	二七〇	五匹の鹿の話	二八三



鯉の恩返し  
こぶの鳥の恩返し  
痛取爺  
小間物屋と狸  
米倉・小盲  
米と糠  
米のなる瓢  
米ぶく粟ぶく  
こもく歌舞  
子守唄内通  
子守話  
五郎太婆  
五郎の缺碗  
ころころ團子(ころげた餅系)  
こん限りのむかあし  
コソビ太郎  
こんにやく問答

三枚の御札  
(し)  
仕合せ孫左衛門  
猪射と飼猫  
舌切雀  
七化八化  
竹算太郎  
尻尾の釣  
しどこ  
椎の木山の妻  
鹽吹白  
下田おうち上田おうち  
下の句  
しやみしやつきり  
十一は柿賣  
秀句咄  
酒泉(發見)  
衛競べ  
出世舞  
朱椀朱折敷  
正月さんの起り  
正月知らず  
上下二つの口  
上下の河童  
しよるべえ婆

定つた運  
ざつと昔  
ざつとと狸  
佐渡の白樺  
座頭の卵  
座頭の頓智  
さとりわつば  
佐野屋の不運  
鯖才次郎  
さやぶりふくべ  
皿々山  
猿ヶ島  
猿蟹合戦  
猿神退治  
サルサワの話  
猿次郎  
猿地藏  
猿と蟻  
猿と人(動物と人系)  
猿と貝  
猿と蟹  
猿と蟹と柿  
猿と蟹と餅  
猿と雀  
猿と雉のはなし  
猿と雉の寄合田

猿と鮓  
猿とみづち  
猿の生肝(海月骨なし)  
猿の一文銭  
猿の顔はなぜ赤い  
猿の尻尾の短いわけ  
猿の膽  
猿のはじまり  
猿の返禮  
猿の嫁子  
猿の尾はなぜ無いか  
さる昔  
猿舞入  
されこべの恩返し  
寒田話  
三尺草鞋  
山神の相談  
三人片輪  
三人兄弟  
三人泣き  
三人の大力男  
三人舞  
三人娘  
三年寝太郎  
三本の手拭  
三本の笛

正法寺の古風  
庄屋の婆  
虱と蚤  
尻鳴籠  
尻矢  
白いんこ  
シロペンクロペン  
吝さ比べ  
(す)  
ズイトン坊  
雀仇討  
雀孝行  
雀酒屋  
雀と川蟬  
雀と啄木鳥  
雀とり話  
雀話  
雀報恩  
すねこたんばこ  
すひつかう  
炭と薬しべと豆  
炭焼五郎  
炭焼長者  
炭焼と天狗

石像の眼に血が流れる日  
世知原話  
錢垂れ馬  
錢のなる木  
仙太郎  
千把萱  
千疋狼  
千里の靴  
(せ)  
ソクヘイタン  
底無し袋  
粗相惣兵衛  
そりばつかり  
(た)  
大工と鬼六  
大根と人參と牛蒡  
大木の秘密  
大力くらべ  
寶犬  
寶子供(龍宮童子系)  
寶手拭  
寶化物

大工と鬼六  
大根と人參と牛蒡  
大木の秘密  
大力くらべ  
寶犬  
寶子供(龍宮童子系)  
寶手拭  
寶化物



寶養 一五・一五五  
 寶物の力 三三  
 寶物と犬と猫(犬と猫と指輪) 一三六  
 寶物交換 一五三  
 竹伐翁 一三七  
 竹取翁 七  
 竹の子童子 六  
 竹姫 六  
 たご馬 一〇〇  
 蛤の足の八本目 一六〇  
 助けた鶴 一七  
 忽ち小僧 八五  
 七夕女房 二四  
 田打ち翁 二九四  
 田螺長者 一三  
 田螺と狐 二七三  
 田螺の聲 一四  
 狸と田にしの走りくら 二七三  
 狸仰天 一九三  
 狸と小間物屋 一九四  
 狸の占ひ 二七五  
 狸の巢 二七五  
 狸を言ひ負かす 二七五  
 田野久 二四一  
 煙草の起り 一五六・一五八  
 戯れの言葉 二六四

旅學問 一五・一五五  
 旅人馬 三三  
 騙しあひ 一三六  
 田螺といたち 一五三  
 誰ならべ 一三七  
 依藥師 七  
 團子淨土 六  
 團子淨土 六  
 團子淨土 六  
 段々の教訓 一〇〇  
 丹波のお作丈 一六〇  
 だんぶり長者(蜻蛉長者) 一七  
 (ち)  
 ちいさい小袴 二九四  
 爺様と猿 一三  
 爺那の小袴 二七三  
 智謀有り殿 一四  
 力競べ 二七三  
 地藏様と團子 一九三  
 地藏淨土 一九四  
 父の土産 二七五  
 地中誕生 二七五  
 ちひさこ 二四一  
 茶栗柿 二四一  
 茶筌子・茶碗子 一五六・一五八  
 長者の賣比べ 二六四

長者の娘と池の主 三三六  
 長頭をまはせ 九六  
 長命競べ 二二五  
 長名の短命 二七三  
 チョッキリ(きりなし話系) 二〇五  
 ちんちんちよぼし 一六九  
 (つ)  
 盡きぬ錢縋 二三四  
 づくなし競べ(二人のづくなし系) 九五  
 讀き候 二二〇  
 燕と雀 三三一  
 田螺長者 一三  
 壺の中の蛇 二六八  
 鶴と龜 二〇三  
 鶴女房 二〇三  
 (て)  
 テイサ 二九四  
 テイテイコブシ 一四四  
 手無し娘 一四四  
 出ば出い 一六三  
 天狗と炭焼 一五三  
 天狗の隠れ養 一五三  
 天狗の掛算 二〇七  
 天狗の小扇 二五三

天上胡瓜 一〇一  
 天道さん金の綱 一〇一  
 天人女房 三三  
 天福地福 六六  
 テンボ競べ 二七  
 てんぼ物語 三〇八  
 (と)  
 東岸の爺と西岸の爺 一七三・一三三  
 藤太さんの猿 二二  
 唐土の虎と古屋の漏(古家の漏系) 二六七  
 盜賊の賭 一六八  
 動物の援助 二七〇  
 動物葛藤 二七四  
 動物競走 二七三  
 動物と人 二七三  
 動物報恩 一四〇  
 唐丸籠 一三五  
 どうもからも 一三三  
 玉蜀黍の根の赤いわけ 一〇・三三・三三  
 蛸鳩の尾 一〇・一一  
 年とり男 二六三  
 年取り話 七九  
 どつとはらひ 三三〇  
 とつびんはらひ 三二七  
 鄰の寢太郎 三二八  
 一五

殿様の難題 一〇一  
 駕紺屋 一〇一  
 寓不孝 三三  
 友を試る話(兄弟話系) 六六  
 虎と狐 二七  
 取付く引付く 三〇八  
 鳥團扇 二七  
 鳥女房 二八  
 鳥吞爺 二八  
 とん 二八  
 蜻蛉長者 二八  
 どんぐり太郎 二八  
 とんてき 二七  
 とんと昔 二七  
 とんとん虎 二七  
 (な)  
 長い名の子供 一〇・三三・三三  
 長い話 一〇・一一  
 長崎の魚石 一〇・一一  
 長須太マンコ 二六三  
 長柄の橋柱 七九  
 投擲頭 三三〇  
 七つの釜 三二七  
 何が一番怖い 三二八  
 蛸爺 一五

なら梨取り 二二  
 成田季 二五七  
 難題舞 二七  
 (に)  
 二十一夜様 二四・六五  
 錦長者 一五五  
 偽八卦 二八  
 二反の白 一三八  
 似女本嫁 三九  
 日輪さんと土鼠とどんど 七三  
 日輪の下し子 九  
 二度の威嚇 二七  
 二人吉吉 二七  
 女房の智慧 二七  
 仁王寺別當 二七  
 仁王と墓 二七  
 俄か小僧 二七  
 人魚の恩返し 二七  
 人魚の喰ひそね 二七  
 人間と蛇と狐 二七  
 (ぬ)  
 練袋紅皿 九〇・九二  
 盗人難さん 一五六  
 練福米福 一四

一七  
 一八  
 一九・二二  
 二九七  
 六  
 二〇六  
 一七四  
 一四六  
 二六六  
 一七三  
 一九六  
 二七  
 二七  
 一六六  
 三三  
 二二五  
 二〇三  
 二九七  
 二七〇  
 四三  
 六三  
 四一



盗人梳こ	六二	鼠と團子	一四一
盗人女房	一六七	鼠の淨土	一四三
沼の神の手紙	三三	鼠の餅つき	一三五
(ね)		寝太郎舞入	一三五
姉さんど弟	五九	眠たい話	三〇三
猫岳・猫島	一七	(の)	
猫檀家	一九	のねの鍛冶の婆	一四
猫寺(猫の助力)	三〇・三一	野間話	三三
猫と蟹の駆比べ	二七三	蚤蚊の起り	三三
猫と南瓜	一九七	蚤と虱と蚊	三三
猫と狩人	一六	蚤と虱の伊勢参り	三三
猫と茶釜の蓋	一五	蚤になつた山男の話	一〇〇
猫の淨瑠璃	一九九	(は)	
猫と鼠	二七七	はありや	三三
猫と鼠の御馳走	二七七	梅園坊の化物屋敷	三三
猫の恩返し	一八・三三	敗北の承認	一四
猫の守護	三三	博奕打と天狗	一五
猫の祟つた話(猫と南瓜系)	一一	博徒とさいの神	一五
猫の妻	一一	馬喰八十八	一六
猫の面	四八	化けくらべ	一六
猫の秘密	一九八	化け猫退治	一六
猫はなぜ鼠をとるか	二七	化物退治	一六
猫山(猫又)	二六・六五	化物寺	一六
鼠經	三〇・三三	化物梨の木	一六
鼠と鷹の寄合田	二八		

花若ばなし	四七	姫こ昔(猿舞入系)	四七
婆ア汁	三三	美女奪還	三三
ばどつ皮	四三	瓢の米(腰折雀系)	四三
婆なます	二九	火焚き娘	二九
婆に化けた猿	九	額柿の木	九
婆の三つ疣	一九	ひつつこ	一九
母の眼玉	三	引張屏風投團子	三
婆と天狗	一五	人影花	一五
ベソンの婆	一四	人が馬になる	一四
灰の發句	一四	人が見たら蛙	一四
灰繩千束	一四	人喰ひなば	一四
灰坊太郎	一四	日と月と星	一四
灰時き爺	一四	一ツ屋の怪	一四
灰娘	一四	人身御供	一四
給女房	三〇	獅々婆ア	三〇
早物語	三〇	日向山	三〇
播磨國糸長庄司	一八・四七	榎木の由来	一八・四七
春の野道から	一八	雲雀牛飼	一八
パロンの化物	六	雲雀と借金	六
板橋三娘子	九	日まさり川	九
判じもの	一七	日向次郎	一七
(ひ)		瓢箪千と針千本話	一七
東の壺屋四の壺屋	三	畫むかし	三
彼岸水	三	拾ひ物分配	三
彦八話	三	(ふ)	
	一七・一四・三三		

夫婦の黙りくら(無言くら系)	三〇
笛吹き男	三
笛吹藤平	三
鯉の骸骨を蹴つたら	三
鯉に影をのまれる	三
福の神よげない	三
福間の又兵衛	三
フクの皮	三
烏紺屋	三
無精競べ	三
不思議な筈	三
ブスケ	三
二人兄弟	三
ぶつ話	三
ふなの恩返し	三
舟作り(娘と弟)	三
ふの良い獵師(まのよい獵師)	三
振り米	三
飾古金	三
古屋の漏り	三
風呂焚三八	三
風呂場の餅	三
文福茶釜	三
分別八十八	三



尻こき爺(尻ひり爺)	一七三	時鳥と兄弟	二四三	味曾買橋	七〇
尻とうつろ舟(尻の親子・金の茄子)	一七三	時鳥と小鶴	二四八	鶴鶴は鳥の王	二五九
紅皿鉄皿	四三	時鳥と織子	二四七	水瓜(天人女房系)	三三
への字鐵砲	二〇〇	ぼら賣吉五郎	二〇八	水蜘蛛話(賢こ淵)	一五九
蛇と金の玉	六七	ぼら吹きの子	二二七	水乞鳥	二五六
蛇とみずのかへこと	三六〇	盆皿(皿々山系)	四四	水懸鳥	二五三
蛇女房	三三	ホンチギとマハチブ	二六一	水引きの話	一三九
蛇の金攻め	一四八			水の神の文使ひ	九三
蛇の目玉	二二二			三つの難題	二二
蛇舞入	三三・三七	(ま)		見透し童子	一〇八
蛇息子	一一	孫太郎婆	一一三	見透しの六平	一〇六
尻ひり話	一三・一〇五	孫八	三三三	箕輪曲げ	一六三
尻ひり嫁	一〇三	増間話	三三七	耳掛け素麺	二二
への起り	三〇三	松山鏡	二四〇	耳切團一	二二
へんと	三三三	まのよい獵師	二二〇	蚯蚓と蛇と眼交換	九八・一〇一
		織子と竹(三本の笛系)	五五・五五	蚯蚓と土龍	二六〇
(ほ)		織子と鳥	五五	耳なし草鞋	二二
法印様と狐	一九五	織子の井戸掘り	五三	見るなの屋敷(鶯の一文銭)	一三三
坊様と摺白	三八	織子の椎拾ひ(栗拾ひ)	四八		
坊主裁判	二四〇	織子花	五三		
寶物恢復	二二	織母の化物	五三		
寶物交換	一五三	豆子話	六三・三三・三〇三		
寶物の力	六三	豆助の話	九		
ばた餅きらひ	一五六				
佛舞	三〇〇	(み)			
時鳥香籠	二四七	三井寺話	一八・一九〇		

むかしむかし  
昔や判けた  
舞入と雁  
舞入話(三人舞系)  
無言くらべ  
絡と猿と類(動物葛藤系)  
むじなの仇討

(め)

メイケントウ  
名裁判  
目籠で水掏む  
盲の水の神  
飯食はぬ女房  
目付け犬(猿神退治系)

(も)

申し子話  
亡者と歌賭  
亡者と鹽買ひ  
もうすべつたり釜の蓋  
李藏話  
土鼠と墓  
土鼠の舞取  
もくろじ話  
百舌と時鳥

索引

引

餅争ひ	三〇六	餅と白石	三〇五	夕顔長者	五八
餅は化物	三三六	餅は化物	三三六	幽霊の子育て	一〇
モノナク鳥	三三三	モノナク鳥	三三三	指太郎	一〇
物言ふ魚	三三〇	ものがたり	三三八	結付け枕	二二五
もの食はぬ嫁	三二四	もの食はぬ嫁	三二四	夢と夢	七〇
物食ふ魚	一九二	物食ふ魚	一九二	夢の玉	七〇
桃賣殿様	一〇〇	桃賣殿様	一〇〇	夢の蜂	七〇
桃太郎	三三・一七〇	桃太郎	一	夢話	二七
瀧り屋の瀧り	一	瀧り屋の瀧り	二六七	夢見小僧	七〇
		八化け頭巾	一五〇	百合子姫	二九
		やかん太郎	二二	百合若大臣	二九
		山姥	一〇三・一〇三・一〇		
		山姥問答	一六二	良い思案	一六〇
		山田白瀧	一六二	よい夢	〇一・二〇
		山寺の蜘蛛女	一七	横穴	五三
		山寺の恠	一九三	行々子と草履	三五八
		大和言葉	六五・二二〇	ヨシトク	二五八
		山鳥女房	三二七	夜話	三三〇
		山梨の恠	二八	呼ばれつこ話	二七・二七
		山婆と桶屋	二九	嫁に行きたい話	三三六
		山伏	一六三	嫁の駕籠に牛	一七
		彌六淵	一四	よもぎの由來	八三
			一六〇	夜蜘蛛は焼殺す話	一一〇



(り)

良辨物語  
力太郎  
力士泉川  
龍宮入り  
龍宮女房  
龍宮童子  
龍宮の斧  
龍宮の門松  
龍神の傳授  
龍神と花賣  
林檎の恠

(れ)

獵師と犬  
連歌話

(ろ)

老人を捨てる話

(わ)

若返りの水  
鷺にさらはれた子  
鷺の捨て兒  
葉しべ長者  
蕨の恩

良辨物語	二八
力太郎	二七
力士泉川	八五
龍宮入り	三〇
龍宮女房	八四
龍宮童子	八四
龍宮の斧	八四
龍宮の門松	八五
龍神の傳授	三・八五
龍神と花賣	二九
林檎の恠	二九
獵師と犬	三五〇
連歌話	三二一
老人を捨てる話	一六五
若返りの水	八三
鷺にさらはれた子	八八
鷺の捨て兒	八八
葉しべ長者	三・一〇一
蕨の恩	三六一

註 本文中に題名なき物も一例を載せてカッコ中にその系統を示した。

日本昔話名彙



昭和二十三年二月二十五日印刷  
昭和二十三年三月一日發行

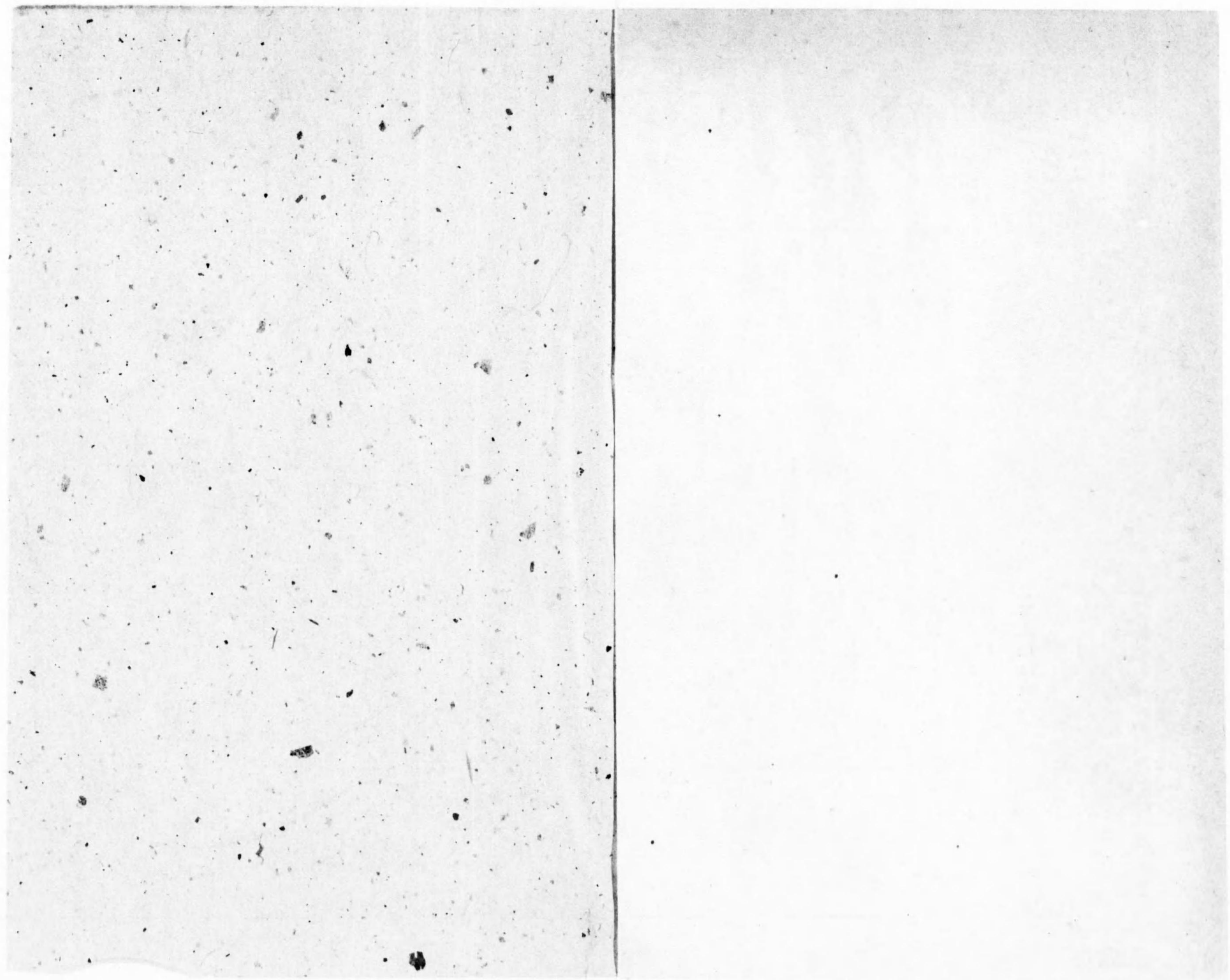
定價 金三〇〇圓

編輯者 社団法人 日本放送協會  
東京都千代田區内幸町二ノ二  
發行者 奥屋熊郎  
東京都中央區日本橋馬喰町三ノ一  
印刷者 北川武之輔  
東京都中央區銀座四六ノ二  
印刷所 株式會社 細川活版所

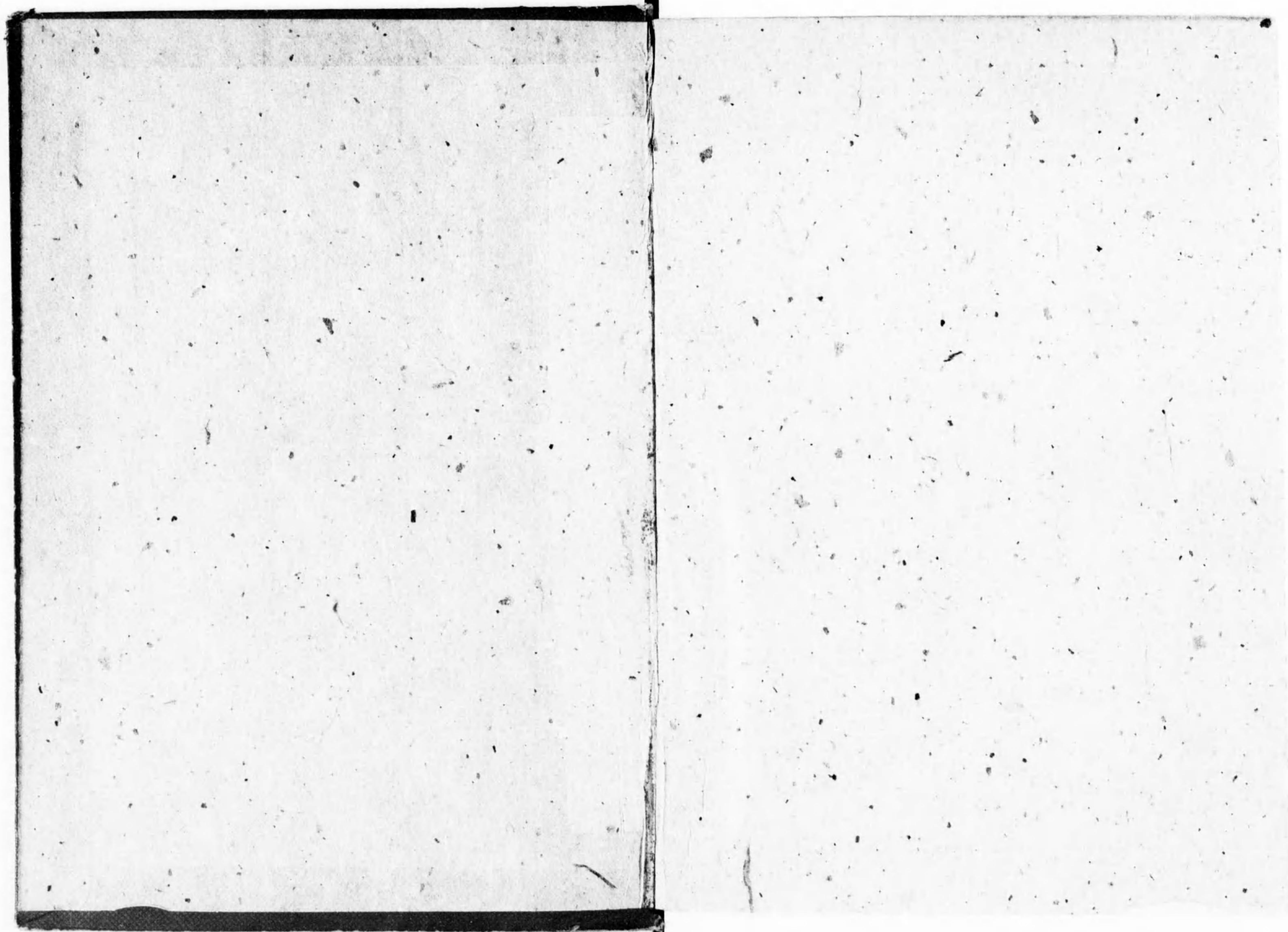
發行所 東京都中央區日本橋馬喰町二ノ一(花王ビル)

株式會社 日本放送出版協會  
會員番號 A一一四〇〇六番











終